

東京都立西高等学校 卓球部 70周年部史



東京都立西高等学校 卓球部70周年部史



東京都立西高等学校
卓球部OB・OG会



東京都立西高等学校卓球部OB・OG会

東京都立西高等学校卓球部OB・OG会

東京都立西高等学校
卓球部70周年部史

東京都立西高等学校卓球部OB・OG会

創部70周年 栄光の歴史

目次

東京都立西高等学校卓球部OB・OG会 会長ご挨拶	4
創立70周年記念事業実行委員会 委員長ご挨拶	6
東京都立西高等学校 校長ご挨拶	8
東京都立西高等学校 卓球部顧問ご挨拶	9

巻頭特集1 トップアスリート座談会	10
----------------------	----



巻頭特集2 座談会 荻村伊智朗氏を語る	14
------------------------	----



第一章 1948-1965 創生期 第一期黄金時代	18
第二章 1966-1975 充実期 第二期黄金時代	50
第三章 1976-1995 発展期 第三期黄金時代	66
第四章 1996-2015 安定期 第四期黄金時代	84

第五章 2016現在 西高卓球部の今	100
思い出写真館	104
編集後記	111

東京都立西高等学校卓球部OB・OG会(西卓会)会長 ご挨拶



以前西高卓球部は創立三十周年の記念誌を出したことがある。今度は創立七十周年誌を出そうという話が、OB有志の中で纏まった。いち高校の部の中でこのような企画は希有のことではないかと思う。

都立十中(西高の前身)が新制高校になったとき(それまでの中学は五年制で戦後の学制改革により昭和二十三年に新制の高校になった)中田君が「卓球部はなぜできないのか」とデカデカと書いた紙を、校長室のドアに貼りだした。

中学三年の3学期、校庭の片隅においてあつた古い机を利用してピンポン遊びがはやつたことがあつた。この遊びも春になるとすたれたが、中田君は碑文谷の卓球場で腕を磨き、卓球にはロングという打ち方があるぞといい、これが初期の頃の伝統的な打ち方となる。中田君と仲の良かった私はよく一緒に練習し、四年の終わりには卓球部の新設を願うようになる。

「手順もふまずに、いきなり校長室に張り紙するとは何事だ」と、校長先生に呼ばれてお目玉を頂戴したが、これがきっかけとなり、藤崎先生、川島先生のご支援を得て西高の卓球部は誕生した。

半分焼けた体育館のベニヤ板で囲つた一室に一台の卓球台をおいて皆一生懸命練習し、秋には城西地区では、いいところまでいくようになった。

中田君は高校2年の終わりに転校したため、私が初代のキャプテンになった。

私が卒業した年に、春の憲法大会で西高卓球部は東京都で見事団体優勝を果たした。部創立3年目の快挙である。このときのメンバーは荻村、市川、亀田、甲子。

都立西高卓球部を語るとき、荻村伊智朗氏(西高3期生)のことに触れざるを得ない。残念なことに62歳の若さでこの世を去ったが、彼の功績は後の世まで語り継がれるであろう。卓球を始めてから4年目で全日本軟式選手権大会(このころは軟式があった)で優勝し、5年目で全日本(硬式選手権)のチャンピオンとなり、6年目には世界の頂点に立った。いずれも初出場で初優勝である。これは卓球界はおろか、他のどのスポーツでもなし得ない記録であろう。その後彼は、シングルス・ダ

ブルス・団体戦合わせて世界選手権で十二個の金メダルを獲得した。

この間、招かれてスエーデンのコーチを数回にわたってしたことがある。名古屋の世界選手権(1971年)ではベンクソンが優勝、千葉幕張の世界選手権(1991年)ではパーソン、ワルドナーの活躍が目立つ。

その後日本卓球協会の理事となり、強化委員長、国際部長、専務理事として重責を果たした。1973年国際卓球連盟の理事に就任、79年に会長代理となり、87年薦められてITTF会長に立候補し当選した。彼は卓球のメジャー化を目指し、いろいろな改革に取り組んだ。卓球を明るくする試み、ボールのカラー化、卓球台の色、ユニフォームの色彩(それまでは一色に限られていた)、ラリーを続けるためボールの大きさを変えること、1ゲーム21点から11点制に、有害物質を含む接着剤の禁上、その他もろもろ。(彼が亡くなったあと実現したのものもある)

荻村氏が日卓協の専務理事のとき、全国ホープス卓球大会を立ち上げた。小学生以下のクラブチームの団体戦である。私とその委員長に任命された。今年で第34回を迎える。

最近若手の活躍が目立つが、このことと無縁ではなからう。

終わりに、同人雑誌卓球人の創刊号「忍・荻村伊智朗」に私の書いた文を載せておこう。前述と重なるところもあるが。

『都立十中が新制高校になったときN君が「卓球部はなぜできないのか」とデカデカと書いた紙を、校長室の前に張り出した。当時の他の運動部は活躍していたのに、卓球部はなかつた。「手順も踏まずにいきなり張り紙するとは何事だ」と、校長室に呼ばれてお目玉を頂戴したが、これがきっかけとなり、藤崎先生(初代卓球部顧問)のご支援を得て都立十高卓球部が誕生した。(翌年十高は西高と改名)

大工さんに作ってもらった手作りの台を焼けた体育館の片隅において、(西高は戦災はまぬがれたが戦後の失火で体育館の半分以上を焼失)朝は始業の一時間前から

放課後は球が見えなくなるまで(もちろん電灯はつかない)フォア打ちやゲームをやつた。勝ち抜き戦は1回負けると次の番まで一時間以上待たなければならなかつた。

このとき入部してきたのが荻村である。毎日曜日には朝から練習、近所の学校へも出かけ、練習や試合をさせてもらった。はじめのうちは負けてばかりいたが、好きこそものの上手なれで、やがて対等に戦えるようになり、一年後には城西地区でいいところまでいくようになった。荻村はフォアで動きまわる卓球で、ミスが少なく試合に強かつた。私が卒業した年、春の憲法大会で西高は東京都で団体優勝を果たした。卓球部創立3年目の快挙であつた。一回戦から逆転試合の連続で、決勝で都立小石川高校と対戦した。一番で荻村が敗れ、二番も落とした。三番のダブルスも1ゲームを失い、2ゲーム目も15-20とリードされたところで荻村にレシーブがまわった。彼はレシーブを5本連続強打で決めて挽回、これが優勝につながつた。ピンチになるほど力を発揮し、後に何回か奇跡的逆転勝利を収めているが、逆転劇の最初はこのときであろう。このころまで荻村は卓球界で無名であつた。その後関東大会でベスト8入りし徐々に頭角を表してくる。

西高を卒業した荻村は都立大(現首都大)に進学する。当時都立大は昼夜開講制だつた。

幼いとき父親を亡くした彼は、私立の卓球名門校に進むには経済的負担が大きすぎた。

都立大に入ったが彼は学連には加盟せず、もつぱら武蔵野卓球場で練習を積んだようである。

関東学連六部では物足りなかつたのかもしれないし、学校では練習相手が不足だつたかもしれない。このとき武蔵野卓球場経営の上原さんには大変お世話になっている。

大学2年のとき、全日本軟式に初出場で初優勝した。西高で祝勝会をし優勝杯でビールを乾杯した。このとき顧問の加藤先生が冗談で世界で優勝したら自分の奥さんを質に入れて御祝いするといった。まさか実現するとは思わなかつたでしょう。

翌年矢尾板監督の薦めで日大に転校する。このとき都立大の主将だつた私は学連の幹事長から参考人として呼び出しをうけた。私は荻村は学連に加盟していなかつたのだから、転校生の半年出場停止の規定は適用されないのではないかと意見を述べたが通らなかつた。

日大に移ってからの彼の活躍は周知の通りである。翌年、日大講堂で行われたアジア選手権団体戦でベトナムのマイバンフォアを破つたのは彼だけだつたと記憶しているが、個人戦では山口才二選手のカットに苦杯をなめた。その悔しさを応援に行っていた私にこうぶつけた。「相手の返球に上を向いたら照明で眼が眩んだ」そしてこう言つた。「次の全日本硬式選手権では絶対優勝してみせる」



2期

田中 恒夫

創立70周年記念事業実行委員会 委員長ご挨拶



西高卓球部の創立は、創部3年目の快挙として歴史に残っている「昭和25年5月、憲法大会で団体優勝」との記録から逆算して昭和23年ということになります。ということで、2016年（平成28年：昭和では91年）は創立68周年にあたるというのが正確な数え方だと先輩たちからご指摘をいただいています。何故、2016年に70周年の記念事業をやるのですかという質問には、「3期の故萩村伊智朗先輩が実行委員長になって昭和51年6月に西卓会が発行した創立30周年の記念部史があります。実は、今年は昭和でいえば91年です。30周年記念部史の発行から数えて40年が経過した今年が70周年にあたるとした方がわかりやすいし整合性があるのでは」と説明させていただいています。

気の早い先輩達が30周年を2年ほど前倒しにしてくださいました関係で、私の年齢が西高卓球部の年齢と一致してくれることになったのは、偶然といえば偶然ですが、2代目の記念事業の実行委員長として大変光栄なことだと思っています。

私と卓球のお付き合いはかれこれ60年、運動音痴の小学生が、近くの卓球場を遊び場に行っているうちに、いつしか運動が好きになり、中学校、高校、大学、社会人、老後と選手生活を続けてきたことになりました。中でも、西高の卓球部の時に時折指導に来てくださった萩村伊智朗先輩との出会いがその後の55年の卓球人生を方向付けてくれたのではないかと考えています。「卓球の大会を盛り上げるために必要な人たちは誰か？」と萩村さんに聞かれて、「それはまず、素晴らしいプレーをする選手ですね、それから公正で優れたジャッジができる審判、もちろんいいコーチ（指導者）も必要ですね」と答えました。でも、「中村君、まだまだ大事な人を忘れていないかな？」との問いに、困ってしまって、しばらく考えた末に「そうだ、大会を運営する熱い思いの優れた組織者の人たちが欠かせませんね」、これで答えになったと思っていた私に、萩村さんは「中村君、みんな大切な人たちだけど、一番大切な人を忘れてるよ」とおっしゃいました。私は降参して「それは誰ですか？」と尋ねました。「ファインプレーに敵味方関係なく拍手

を送れる卓球を知っている素晴らしい観客だよ」と教えてくれました。私が筑波大学の男子卓球部の監督をしながら、地元の我孫子市で卓球連盟の会長になったところの話です。ママさんや初心者の指導をし始めた頃でもありました。「大学で監督としていい選手を育てることも大切だが、いいプレーを見て喜んでくれる卓球がよくわかる観客の皆さんを増やすために、我孫子市の会長としてしっかり頑張ってくれることを期待しているよ」と背中を押していただきました。いつの間にか、萩村さんのお話の内容が卓球大会の挨拶の中で子供たちに語り掛ける内容にもなっています。「試合で頑張る、審判で頑張る、応援で頑張る、卓球の試合に出る人はどれもが大事なことですよ。」そんな話をよくするようになりました。

地元でジュニアクラブを立ち上げて6年になりますが、地区大会で勝って、中学生の千葉県大会に出られる選手が何人も育ち始めました。家内と一緒に始めたこの白山ジュニア卓球クラブの40人の子供たちの成長が私達の老後の楽しみになりました。週に3回、子供たちから元気と夢をもらいながら、夢中になって家内と一緒に球出しをしています。高校に進学して関東大会で活躍する子供もいて、そろそろ上級者の指導の勉強をしっかりしなくてはと70の手習いで、今年は日本体育協会の公認コーチに挑戦することにしました。白山ジュニア卓球クラブでの毎日は数ある西高卓球部の贈り物のなかで、一番素晴らしい贈り物だと思っています。

昨年9月の記念祭に同窓会からの依頼で運動部OB展示として卓球部の展示の機会をいただきました。多くのOB・OGの皆様のご協力で素晴らしい展示ができたと思っています。萩村伊智朗氏の展示コーナーでは三鷹ITSからお借りした萩村伊智朗氏の略年譜、記念写真、著作物を、卒業生の展示コーナーでは皆さんからの寄稿や写真、動画のコーナーでは、萩村伊智朗氏の制作になる「日本の卓球」や萩村さんの発案で始まり、今も続いている卓球やろう会の第一回目の記録「卓球やろう会1989年」の動画等を紹介させていただきました。これらの展示物や動画は西卓会のホームページからご覧いただけますので、是非一度ご覧になってください。また、そ

の時に集まりいただいた方たち40数名で総会と懇親会を西高会館で行いました。その時の総会で70周年記念事業の実施と実行委員の皆さんが決まり今回の西高卓球部創立70周年記念部史の発行と創立70周年記念パーティーの実施に至りました。この記念祭のイベントで西高会館にお世話になった関係もあり、西高同窓会ともご縁が出来て同窓会の会報に寄稿したりするようになりました。西高同窓会も今年西高が創立80周年ということで記念事業として西高会館の存続基金の募集を始めています。卓球部の皆さんには記念事業の寄付が重なり大変ですが、西高卓球部の後輩たちが合宿でお世話になる西高会館ですのでご協力よろしく願いいたします。

今では、700人を超える卒業生を送り出している西高卓球部、卒業生の皆さんの現役時代や卒業後の選手としての活躍、指導者としての活躍、組織者としての活躍、大切な観客としての活躍が卓球界に果たしてきた役割は計り知れないものがあると思います。私を知る限りでも、創部3年目で東京都で団体優勝した方達（3期の萩村伊智朗さん、市川功嗣さん、4期の甲子貞夫さん、亀田佐さん）の戦いの跡は伝説ですし、卒業後、日本一、世界一となり選手として活躍しただけではなく、指導者としても多くの著作や指導歴を残し、組織者としても、日本卓球協会の役員や世界卓球連盟の会長で活躍された3期の萩村伊智朗先輩、軟式で1955年から全日本選手権を2連覇した5期の斉藤友希子先輩の存在は西高の宝でもあります。また、東京都代表として1958年に関東大会や全日本ジュニアに出場した7期の加々美信光さん、関東学生リーグで1部のキャプテンとして活躍し、卒業後は30年以上スポーツ少年団を指導してきている15期の遠藤孝子さん（旧姓：木村）、高校時代に東京都代表で全日本ジュニアやインターハイに出場し大学時代も関東学生の1部でキャプテンとして活躍した25期の近光護さん、組織者として指導者として日本の卓球の基礎を作った、西卓会会長の2期の田中恒夫さん、東京卓球連盟で田中先輩の跡を継いで重職をこなしている13期の小川敏夫さん、皆さんの活躍や功績は数え上げればきりがないと思います。そんなOB・OGの皆さんを生んだ

西高卓球部の歴史の一端を可能な限り記念部史として残し、後に続く後輩の皆さんへのメッセージにしたいと思っています。

大変、長くなりましたが、現役の皆さんの西高卓球部での活動が実りあるものになりますように、毎年秋に行われる現役とOB・OGとの交流戦が大勢の皆さんの参加を得て益々盛り上がっていきますように、並びにOB・OGの皆様が健康で末永くご活躍されますようにと祈りつつ筆をおきたいと思っています。

最後になりますが、この紙面をお借りして、記念部史へ寄稿して下さった方たち、記念事業にご寄付いただいた皆様、記念パーティーの準備や、記念部史の編集の労をお取りくださった実行委員の皆様へ厚く感謝しご挨拶とさせていただきます。



16期

中村 明彦

東京都立西高等学校校長 ご挨拶

都立西高校卓球部創部70周年誠にありがとうございます。

私は西高校に着任して今年度で5年目を迎えますが、西高校の素晴らしさの一つは卒業生の皆さんが卒業後も交流を続け様々な活動を熱心にされていること、常に現役の生徒達を温かい目で見守って下さり積極的に支援して下さることです。生徒達もそのような先輩方の姿を見て西高生活を過ごしていますから、卒業すると同じように学校をサポートしてくれます。良き伝統であり、学校にとって貴重な財産ですので、いつまでも大切にしていきたいと思っています。

先日、70周年記念事業実行委員会委員長の中村様より（故）荻村伊智朗さん関係の資料をお送りいただき早速読ませていただきました。その中に戦後間もなく荻村さん達約40名の当時の部員の皆さんが色々なアルバイトをして資金を作り、ようやく中古の卓球台を手に入れ学校まで運び込んだという卓球部草創期のエピソードが書かれてあり、こうした先達たちのご苦勞があって今日の卓球部があることを知り大変感動しました。

私は大変スポーツが好きで、荻村さんが卓球の名選手であったことや国際卓球連盟会長等として卓球のみならずスポーツの振興に多大な貢献をされたことは知っていましたが、西高の卒業生であることは着任するまで知りませんでした。私は、現在全国高等学校協会の会長をさせていただいている関係で、全国の多くの校長先生方とお話する機会が多いのですが、「私の学校に荻村さんが講演に来たという記録がある。」「私の父が昔荻村さんから卓球の指導を受けた。」などのお話を聞くこともあり、改めて荻村さんの偉大さを実感するとともにその母校である西高の校長であることを誇りに思っています。

このようにして始まった西高校卓球部が、70年もの長きにわたり活動が続けられてきたことは大変素晴らしいことです。近年急速に社会や家庭、地域など子供たちを取り巻く環境が変化し、子供たちが家族以外の様々な人と直接関わり共通の体験をする機会が大変少なくなってきました。その意味においても部活動の果たす役割は大変大きなものがあり今度益々重要になってきます。

卒業生の皆さんには同じ卓球部の先輩としてまた人生の先輩として現役生へのご指導、ご支援を引き続きお願いいたします。そしてそのことが卓球部の80周年、90周年、100周年へと繋がっていく原動力になると信じています。

西高校は来年創立80周年を迎えます。学校としてもこれまでの良き伝統を継承しつつもグローバル化が一層進む新たな時代にリーダーとして活躍できる人間を育成していくために改革を進めてまいります。卒業生の皆様におかれましても今後とも都立西高校への一層のご理解、ご支援をよろしくお願いいたします。

都立西高校卓球部の益々の発展を心よりお祈りして、私のお祝いの言葉といたします。



東京都立西高等学校校長

宮本 久也

東京都立西高等学校卓球部顧問 ご挨拶

都立西高校卓球部創部70周年まことにありがとうございます。

縁あって西高着任以来、卓球部の顧問を勤めております小豆畑と申します。私自身、中学以来卓球を続けており、多くの中学・高校の卓球部をみてきましたので、そうした点から、西高卓球部の素晴らしさを紹介して、お祝いの言葉とさせていただきます。

私は江戸川区の出身です。近くの児童会館で同級生と卓球で遊んでいたのが、中学校へ入学すると卓球部へ入りました。江戸川区には関東第一高校（ある年齢以上の方にはカンショの名でおなじみでは）という、全国でも優勝している高校があったため、練習に参加させてもらっていました。都大会でそこそこの戦績をおさめたので、高校に入学しても卓球部に入りました。今から考えると乱暴な話ですが当時は当たり前で、1年男子は坊主頭でした。当時は根性第一の時代で、夏でも練習中に水を飲むことは厳禁、うさぎ跳びは校庭何周、フットワークのときかかたが床につくとコーチにもすごい勢いで怒鳴られました。そうしたスパルタ練習が私の根底にあり、教員になってからはそうした指導を行っていました。一方で江戸川区には、全日本卓球1部リーグの優勝争いからんでいる強豪チームが所属しているため、そうしたチームの関係者や、千葉の強豪校と情報交換をして、様々な指導法を研究してきました。

教員になって5番目の学校として西高に赴任いたしました。驚いたことに、西高卓球部は、生徒が練習メニューを決め、練習試合の相手と連絡をとっていました。私は生徒の練習の邪魔にならないよう、後ろから様子をうかがい、時々アドバイスをするくらいでした。もう一つ驚いたのは、初心者の生徒が半分程度いることでした。そうした初心者が、朝練・昼休み練・放課後練と頑張つてめきめきと実力をつけていきます。おそらく高校時代の上達率は、西高は東京でトップクラスだと思います。

“奇跡”的な上達は、もちろん第一に彼ら自身が、毎日の練習に集中した結果だと思います。しかし一方で、OB会の組織だった支援が“奇跡”を可能にしていることにも注目すべきです。西高卓球部は、代々団体戦に強

いといわれています。他チームの多くが、中学までの財産に頼り個人個人で団体戦をやっているのに対し、西高部員は全員で団結して戦っています。こうした雰囲気は、OB会が作り出し醸し出しているのだと思います。私としては、これから社会に出ていく生徒に対し、「これからの人生では理不尽なことが多いと思う。でも関わっている者が気持ちを一つにして、同じ方向に進んでいくときには“奇跡”がおこる。みんなは今“奇跡”をおこしているよ」と言ってやりたいと思います。彼らには、高校時代に素晴らしい財産を築いてもらいたい、卓球を好きになってもらいたいので、今後さらに一生懸命、努力していこうと思います。OB会の皆様にもご協力をたまり、ともに卓球部員を鍛錬していけたらと思います。

では西高卓球部の益々の発展をお祈りして、私のお祝いの言葉とさせていただきます。



東京都立西高等学校卓球部顧問

小豆畑 和之

創部70周年 栄光の歴史



創部以来70年の長きにわたり、都立西高卓球部は数多くのトッププレイヤーを輩出してきました。戦後間もない頃から現在に至るまで、脈々と受け継がれてきた西高卓球部の歴史と伝統。今回は6名の西高卓球部の各世代を代表するトッププレイヤーが集い、それぞれの思い出と次世代へのメッセージを語り合っていました。

卓球に懸けた高校時代

——まずは、西高時代の思い出からお聞かせください。

中村 中学時代の先輩に憧れて西高卓球部に入りました。入学前に西高の練習に連れて行ってほしい、圧倒的な強さを見せつけられました。同時に、すごく楽しいと感じたことも忘れられません。入学後はインターハイを目指して頑張ったものの、とうとう行けずじまい。それでも、1年生だけのチームながら第三学区で団体戦優勝したり、東京都の新人戦で団体戦のベスト8に入っ

たりと、良い仲間恵まれた高校生活でした。

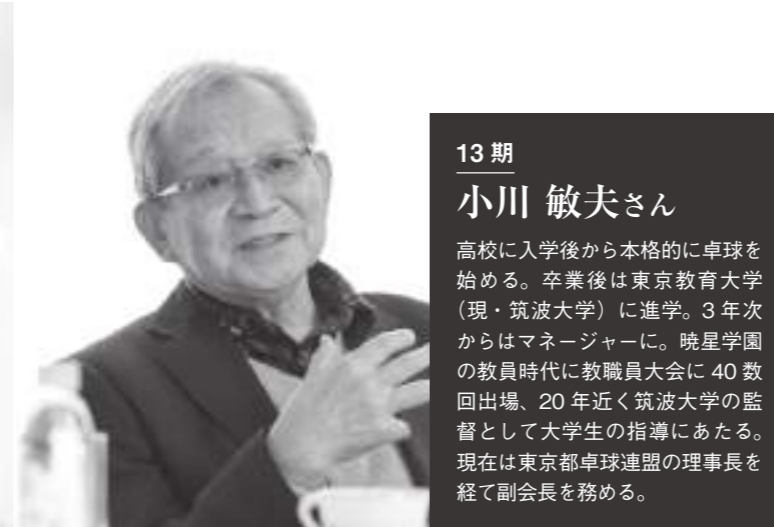
小川 私は中学時代までテニスをしていました。たまたま通っていたそろばん塾にたまたま卓球台があり、やってみるといつの間にかやみつきに(笑)西高に入学し、意気込んで卓球部に入ったのに、練習と言えばトレーニングばかりでした。卓球の練習をした記憶がないくらいですよ…。

坂岸 (旧姓:尾達) 西高卓球部と言えば、一にも二にもトレーニングですよ。私は中学時代に都大会のベスト8に入賞し、夢に燃えて西高に入学したんです。ところがその頃は女子部員が少なく、一時は男子と一緒に練習していたこともあり。みんなを引っ張らなくちゃと思うのがあまり気合いが入り過ぎ、同期の部員がどんどん辞めてしまっ…。今でも苦い思い出ですね。

2期

田中 恒夫さん

西高卒業後、東京都立大学(現首都大学)に進学。2年のとき卓球部キャプテンとして学連に加盟。卒業して中学教員となり日本中体連卓球競技部長、日本卓球協会委員、東京卓球連盟理事長、同副会長を務めた。現東京卓球連盟顧問。



13期

小川 敏夫さん

高校に入学後から本格的に卓球を始める。卒業後は東京教育大学(現・筑波大学)に進学。3年次からはマネージャーに。暁星学園の教員時代に教職員大会に40数回出場、20年近く筑波大学の監督として大学生の指導にあたる。現在は東京都卓球連盟の理事長を経て副会長を務める。

近光 私は小学生の頃に卓球を始めて、中学時代にはシングルスで都大会のベスト8に入賞しました。高校でもぜひ卓球を続けたいと思い、西高の受験を決意。荻村伊智朗さんの出身校であることも、志望した大きな要因の一つでした。でも、実際に入学してみると体育館は古びているし、練習時間は限られているし…。

田中 私が在籍していた頃は、焼け残り体育館で、電灯はつかず、夕方暗くなるまでボールを打ち合ったものです。朝は始業前30分~1時間くらい前に来て朝練をしたこともあります。夜になると電気がつかなくなるから仕方なくですが。

遠藤 (旧姓:木村) 実は、私は西高に入るまでOBに荻村さんがいらっしゃることを知らなかったんです。世界選手権で優勝された後に西高の記念祭にいらして、デモンストレーションを見せてくださいました。全校放送が流れ、生徒が体育館に殺到。その時のことが強く印象に残っていて、私の卓球人生における原点とも言えますね。

偉大なる先輩を見つめて

——やはり、荻村さんの存在感は絶大なものがあつたのでしょうか。

坂岸 そう思います。私は大学生になってからもよく



西高に顔を出していたんです。ある時、荻村さんが大勢の前で講習をされていました。世界一のチャンピオンになられても、こんなふうには高校へ出向かれるんだ…と、強い感銘を受けたのを覚えています。

中村 私が高校2年の時に、荻村さんが指導のため西高に来てくださいました。たまたま更衣室で一緒になったのですが「練習前に着替えている時って『これから卓球ができるんだ』と思ってわくわくしない?」とおっしゃったんです。どんな立場になられても、卓球に対する純粋な想いは変わらないんだなあと思いましたね。指導者として世界中で活躍されるようになってからも「まだまだ自分はちゃんと教えきれていないんだ」と、いつも謙虚な姿勢をお持ちでした。

近光 私の在校時にも荻村さんが練習を見に来てくださって、試合をしていただきました。緊張して頭の中は真っ白。海外の選手をお連れになることもあって、まさしく西高卓球部ならではの貴重な経験だったと思います。

15期

遠藤 孝子さん

高校時代は第3学区の団体戦で優勝。その後早稲田大学に進学し、関東学生リーグで活躍、全日本学生選手権などにも出場。結婚・子育てを経て指導者の道へ。30年以上小中学生に卓球指導をしている。



文武両道の精神で “考える卓球”を

——他にも、西高卓球部ならではの特徴や思い出はありますか。

近光 それはやっぱりトレーニングでしょう。私立の強豪校とは違って練習環境が良いとは言えない



16期
中村 明彦さん
小学生から卓球を始め、西高時代もエースで活躍、東京教育大学でも主将。ユニシスに就職し、米国出張時に卓球を再開しミネソタ州で種々の大会に優勝、帰国後、卓球部と実業団バドミントン部を創部、現在は地元の卓球連盟の会長、小中高生への卓球の指導が日課。

し、やっぱりしっかり勉強もしなくちゃならない…。振り返ってみると、卓球をするよりも、とにかく走ってトレーニングをしていた記憶があります。

中村 確かに“走るのだけは欠かすな”というのが、西高卓球部の伝統的な教えでしたよね。卓球台も限られていて全員が使えるわけではないので、1年生や2年生は一日中走っていたような気がします。

遠藤 そういう意味では、女子は人数が少なかった分、多少は優遇されていたのかもしれませんが。私は男子の先輩が相手をしてくださった覚えがありますが…坂岸さん、いかがですか？

坂岸 私は走っていた記憶しかありませんが…（笑）

小川 夕方になると下校時刻があって、それ以上練習をしていると守衛さんに「早く帰れ！」って叱られたんですよ。木刀を持っていてかなり怖かったんですけど、いなくなったらまたこっそり戻って練習を続けていました。今から思うとすごいことをやっていたものです。

近光 でも、そんな環境下だからこそ、西高卓球部では限られた練習でいかに強くなるかという“考える卓球”が根付いていると思います。それは、荻村さん達をはじめとする諸先輩方が築かれてきた伝統でもある。むやみに練習を重ねるのではなく、勝つために、うまくなるためにどうすべきかと、常に考えることが習慣になっていました。

坂岸 「自分たちは限られた時間しか練習できないか



ファシリテーター：23期 吉田さん

ら、いかにして練習するかよく考えるべきだ」と、当時の部長もおっしゃっていました。練習時間や練習場所の制約があったとはいえ、勝つためにはやっぱり筋力トレーニングや走り込みが大切なんですよ。しっかり走って足腰を鍛え、基礎練習を繰り返し、“考える卓球”を実践する。これは、西高卓球部ならではの特徴だと思います。

限られた時間を 精いっぱい大切に

——では最後に、次世代に向けたメッセージをお願いします。

遠藤 今ではすっかり足が遠のいてしまい、なかなか高校の練習を見に行くことができていません。現在の教え子の中には西高に進学して卓球部に入る子達もいるので、常々気にかけてはいるのですが…。でも、私達の時代とは違い、今では

24期
坂岸 裕子さん
中学から卓球を始め、高校時代は体力作りに専念。卒業後津田塾大学に進学、3年次卓球部のキャプテンに。結婚・子育てを経て地元でクラブチームを設立、地元連盟の理事をしつつ世代を問わず卓球愛好者を集めて活動中。



西高に入学すること自体が大変になっているみたいですね。

中村 西高に限らず、高校全般に言えることかもしれませんが。受験勉強をしっかりとしないと入学できないし、高校に入っても大学受験があるのでほとんどの子達が高校2年の秋で引退してしまうらしいですし。

小川 時代が変われば環境も発想も変わっていくものですが、卓球を好きな気持ちは大切にしてほしいですね。卓球が好きだからこそ、負けたら悔しいし勝ったら嬉しい。高校時代の一時だけでも卓球バカになって練習に打ち込むことは、決して意味のない経験ではないと思いますから。

近光 確かに、負けず嫌いの根性は卓球以外でも大切なことだと思いますよ。失敗してもいいやと思っであきらめるか、次は絶対に成功してみせると思うか。社会に出てからもそういった負けず嫌いの気概が求められることは多いですね。

中村 それに、今こうして話していても思いますが、高校時代の部活動は何物にも代えがたい素晴らしい経験になると思いますよ。かつての仲間は大変な宝物ですし、とにかく頑張った記憶が自

25期
近光 護さん
高校3年間は3学区戦で西高はシングルス・ダブルス・団体完全制覇。個人戦では2年で全日本ジュニア、3年でインターハイ出場。高校卒業後は慶應義塾大学に進学体育会卓球部に所属、全日本選手権等に出場。



分自身の支えにもなる。今は中学生に卓球を教えています。「高校で卓球部に入ったら楽しいことも苦しいこともあるだろうけど、仲間と一緒に頑張ることが素晴らしい財産になるはずだ」と伝えています。

田中 現在でもOB会の年中行事として、先輩と現役高校生がダブルスを組んでトーナメント戦を行っていますよね。こういうつながりは、これからも大切に育んでいきたいものです。我々先輩の側から積極的に働きかけて、次世代につながる取り組みを残していきたい。そして、西高卓球部にはこれから80年、90年、ひいては100周年と、さらなる歴史を紡いでほしいと思います。



荻村伊智朗氏を語る

西高卓球部においてはもちろん、日本が世界に誇るプレーヤーが荻村伊智朗氏です。

高校時代に卓球を始め、強い意志とたゆまぬ努力を以て世界一の座に輝いた実績、卓球の普及に向けて尽力された功績には、語りつくせぬ偉大さがあります。共に卓球をされた方々やITS三鷹卓球クラブ代表、五輪出場選手など多彩なメンバーが集い、荻村氏とのエピソードや教えをお話いただきました。

それぞれの出会い

——まずは、皆さんと荻村さんとの出会いから、エピソードをお聞かせください。

田中 西高卓球部の話になりますが、もともとは私の友人が「ぜひとも卓球部を作りたい」と言い始めたのが創部のきっかけでした。学校での呼びかけはもとより、時には校長室まで直々に赴いて創部希望の貼り紙をしたこともありでしたね。その結果、1948年の4月頃に卓球部が発足し、当時1年生だった荻村君が入部してきたのです。中学時代には体操、野球で頭角を現していた彼ですが、卓球を始めたのは高校生になってから。当時はまだ無名で、高校3年生の時に関東大会のベスト8に残ったのが、高校時代最高の戦績だったのではないのでしょうか。日本大学進学後の栄光は、皆さんご存知の通りですけどね。

織部 私と荻村さんの出会いは、卓球のクラブチームでした。荻村さんが大学卒業時に初めて作られたクラブで、中学2年生の時に入会しました。特に、若い選手を育てたいという強い想いがありだったようなのを覚えています。そこからあっという間に20年近くが過ぎ、三鷹通りの拡幅工事で国際卓球会館の建て直しを迫られた際に「同じような卓球場を作っても面白くない。テニスやゴルフのような会員制卓球クラブを作ろうじゃないか」と荻村さんがおっしゃって。「社長は織部だな」という荻村さんの一言で、私はクラブを運営する株式会社ITSの代表取締役

役にほぼ強制的に就任させられました。そして1988年にITS三鷹卓球クラブが誕生しました。

若山 五期の若山です。私と荻村さんとは、3年ばかりのつきあいでしたが、大変中身の濃いものでした。私は2年後輩でしたが、なぜかウマがあい友人のようなつきあいをさせていただきました。荻村さんが卒業してからは、毎晩、武蔵野卓球場で二人で遅くまで練習をしましたが、二人ともオーナーの上原さんのおばさんには大変お世話になりました。荻村さんは筆まめな人で、卒業後もよく手紙をくれましたが、今日はその中から珍しいハガキを持って参りましたのでご覧ください。



高校時代に荻村さんからもらったハガキ

クリスチャン 私は、1957年にストックホルムで開催された第24回世界卓球選手権で、初めて荻村さんにお会いしました。その2年後に荻村さんはスウェーデンの公式コーチとなり、以後5年間にわたり指導者としてスウェーデンにいらっしゃいました。当時私は16歳でしたが、荻村さんの指導は本当に厳しかったのを覚えています。体力増強を重視する彼の指導はスウェーデンの選手にとって未知なるもので、練習の前にランニングをしようと「僕は卓球をしに来たんだ」と言って帰ってしまう選手もいました。

仲村渠 確かに、荻村さんは身体を鍛えることを非常に

重視しておられました。私は高校時代に全日本選手権ジュニアの部で優勝し、強化対策本部に声をかけていただきました。その時に本部長を務めていたのが、荻村さんだったのです。静岡県御殿場で開催された合宿に呼んでいただいたのはうれしかったものの、早朝から10キロのランニングも珍しくなかった。嫌で嫌で仕方なかったんですが（笑）、体力をつけること、技を磨くために考えることを重視されていた荻村さんの思想は、参加した選手に深く刻み込まれたように思います。

加々美 私は西高卓球部7期生ですが、荻村さんと一緒にしたのは1953年の全日本選手権でした。私はジュニアの部に初出場したのですが、初優勝を賭けた荻村さんの鬼気迫る様子は今でも忘れられません。荻村さんは周囲から非常に期待されているながら2度も予選敗退されていて、その大会が背水の陣だったんですね。半月から1ヶ月程度ではありましたが、一緒に練習させていただけただけことは、とても良い思い出です。

古川 私は小学5年生の時に卓球を始めました。『卓球レポート』で荻村さんのインタビューなどを読むのがとても楽しみだったのを覚えています。その後も卓球を続けて日本大学に入学してみると、夜の11時近くにもなって練習しに来る人がいたんですね。「あの荻村さんが!？」と驚きと喜びにあふれ、手合わせもさせていただきました。その頃私は“古川フェイント”という独自の技を武器に、世界チャンピオンを倒したこともあったんです。私が意気揚々と仕掛けたその球を、荻村さんは失敗されました。そのとき顔色一つ変えない、堂々とした風格に、私はさすが世界チャンピオンになった人だなと思いました。

斉藤 今でも西高は進学校ですが、私が通っていた頃

もそれは同じ。試験期間になるとみんな部活動を休んでしまうんですね。私はとにかくスポーツがやりたくて入学したものだから、試験期間中にここぞとばかりに練習していました。荻村さんがみっちり教えてくださったおかげで、試験期間が終わるとフォア打ちができるようになっていて（笑）。周りには驚かれましたが、とにかく卓球に打ち込んだ高校時代でした。全日本選手権や国体にも出場することができ、ありがたいなあと思っています。

遊澤 私は中学の3年間ITSに在籍していました。荻村さんとはとにかくお忙しく、接点と言っても年に数回練習を見ていただいたくらいです。ある時「僕はどうしたらいいですか」と、今思えばいぶん生意気な質問をしたのですが、荻村さんはたった一言「君は好きなように、思う通りにやればいい」とおっしゃったんです。そのアドバイスが今でもすごく心に残っていて、自分の思うことをやり遂げる大切さを学ばせていただきました。

卓球で世界に革命を——強い意志と驚異の行動力

——皆さんさまざまな関わりをお持ちですが、荻村さんのお人柄や姿勢についてもお聞かせください。

加々美 何と言っても“革命児”ですよ。きっと、卓球を通じて世界に革命を起こすんだと思っていたんじゃないでしょうか。たとえば、ラケットにスポンジが登場したことで、卓球に革命的な変化が起こりましたよね。それをリードされていたのが荻村さんだったと思うんです。だから今ご存命だったら、中国勢のラバーについてどのように思われるか、どんな戦法で挑まれるかをぜひ伺ってみたいものです。



西高卓球部2期生 田中 恒夫さん 初代の主将、荻村さんの1年先輩。卒業後、日本卓球協会の委員を歴任し全国ホープス卓球大会を立ち上げる。



西高卓球部5期生 全日本軟式卓球選手権優勝 斉藤 友希子さん 荻村さんに高校時代に卓球を教わった2年後輩。1955年から全日本軟式卓球選手権のシングルスで2連覇。



西高卓球部5期生 若山 望さん 荻村さんの2期後輩で西高五期主将。毎晩武蔵野卓球場に通い二人で練習をした。当時をよく知るひとり。

仲村渠 なかなだ かけ 私が全日本代表選手だった時に、日中対抗戦という試合があったんですよ。荻村さん独特の訓練を受けたのですが、中国選手がやってきた途端に練習はストップ。当時から相手チームには練習を見せない徹底ぶり、中国に勝つ戦法を実践されていたわけですね。加々美さんもおっしゃいましたが、現在の卓球界における日本と中国の差を目の当たりにされたら、叱咤激励なさるんじゃないですかね。

古川 あと、意志の強さとか決心の強さは圧倒的だと思います。西高の卓球部が出来たばかりなのに「自分は卓球で世界一になるんだ」と語っておられたらしいですよ。その頃はまだ卓球を始めただけの高校生ですから、決心の強さとそこに伴う結果の素晴らしさには、奇跡的なものがあると思います。息子さんから伺ったことがあるのですが、荻村さんはいつも「決心したら、その日から決心した目標に一歩近づけるんだ」とおっしゃっていたそうですよ。

加々美 1952年にイングランドからリーチやバーグマンらが来日した際、当時の日本代表だった林忠明・藤井則和選手はこてんぱんにやられてしまいました。その試合を見ていた荻村さんが「俺なら絶対に勝つ」と呟いたんです。断っておきますが、まだまだ卓球初心者の方ですからね。隣にいた私は「この人、大丈夫か？」とさえ思いましたよ。結局、その言葉は現実になっていくわけです。それがきくと、古川さんもおっしゃっていた決心の強さによってなせる業だったんだと思います。また、荻村さんはとてつもなくグローバル志向の強い方でした。高校生の私が練習している時にも「そんなことでは世界一にはなれない」と厳しく言われたものです。

斉藤 本当に、荻村さんの目はいつでも世界に向けて

いたと思います。私は、過労で熱を出してしまい、一週間ほど練習できないまま全日本選手権に出場したことがあったんです。その時に思い出したのが、高校時代に荻村さんが見せてくださった一冊の本。そこには、陸上やボクシングなどさまざまなスポーツの選手が、ケガなどでやむを得ず休んだ後に世界記録を出していると言われていました。それがきっかけで心も体も軽くなったのか、軟式卓球の全日本選手権で初優勝。読書家でいらっしゃいましたが、本当にお若い頃から世界レベルで卓球に挑む姿勢をお持ちだったんでしょうね。

クリスチャン スウェーデン人の目からすると、荻村さんの練習や卓球に対する姿勢は非常に日本的だと感じていました。確かに、スウェーデンに赴きアマチュア選手として試合をしながら公式コーチも務めるという行動力は、間違いなくグローバル志向のなせる業です。しかしながら指導に関して言えば、国柄に合わせて変更するという事は一切なかった。強くなるためのトレーニングは普遍的なものだと思われていたのでしょう。先ほど述べたランニングもそうですが、たとえば「ミスをしないう練習」というものがありました。内容は単純で、ミスをしたら、しなくなるまで家には帰れないのです。こうした練習方法やその根底にある荻村さんの考え方は、非常に新鮮なものとして私たちの目に映りました。スウェーデンにとって、荻村さんは“卓球の父”です。私に至っては、息子のセカンドネームを“Ichiro”としたほどで（笑）。長きにわたり師弟として、良き友として荻村さんとかかわりを持っていたことを、喜ばしく思います。

古川 本当に世界を飛び回られていましたよね。私は荻村さんの設立された荻村商事へ入社し、様々な国の選手の指導や海外での指導機会を経験さ

せていただきました。一番の思い出は1970年文化大革命が終わった中国で1万8000人の首都体育館で友好試合をしたことです。この訪問は荻村さんが周恩来総理に面会され、71年ピンポン外交の舞台になった名古屋の世界選手権に参加要請をされた歴史的な訪問になりました。荻村さんのおかげで、私は世界44ヶ国も訪れるきっかけをいただき、まさに「出会いは人生の宝」です。

卓球の発展に賭けた奇跡のアスリート

—— 思い出話は尽きませんが、最後に改めて荻村さんへの想いをお聞かせください。

田中 私は高校時代の最初の頃しか付き合いはありませんでしたが、『卓球ジャーナル』を始め、雑誌やニュースなどで彼の活躍を知る機会はたくさんありました。いつでも卓球のことを考えていて、たとえば11点ゲームへのルール変更などにも尽力されていましたね。

加々美 私が思うのは、西高卓球部の存在感です。それは、卓球選手としての荻村さんの原点。進学校ということもあってか、当時から運動部的な規律や上限関係はあまりなかったですよ。個人を尊重するというか、勉強も部活動も自律して自由に挑戦できるのは、とても良いところだと思います。荻村さんのように世界で活躍される選手を輩出した一端には、西高のそうした雰囲気も関係していたのかもしれない。現役の世代でも、生徒たちは自ら練習メニューを考えて、タイムキーパーも自分たちで分担し、自律して部活動に励んでいるそうですよ。西高らしさというのは、荻村さんの時代から今に至るまで受け継がれているんだなと思いました。

織部 また、クラブチームの重要性も強く主張されていましたね。当時の卓球は学生と社会人とでずいぶん環境にギャップがあり、全日本選手権などは軒並み学生ばかりが優勝していたんですよ。でもクラブチームがあれば、幼少時から始められるし、社会人になっても続けられる。学校という組織にとらわれず、長く卓球に携われる場を作ることで、日本卓球を強くしていこうという想いがありだったのではないかと思います。

若山 そういえば、荻村さんは色々トレーニングを考えて実践されてました。例えば通学途中の電車のなかでは、つり革につかまって、つま先立ちするとか、通り過ぎる電信柱を追いかけ見て動体視力を鍛えるとか…。

遊澤 実は、自分は動体視力が良い方で、アトランタ五輪に出場した際にも選手の中でかなり高水準の動体視力があると認めていただけました。

古川 「卓球をするなら、相手のサーブの回転が見えないとダメだ」とよく言われていましたよ。

遊澤 荻村さんもそうした基礎的なトレーニングで動体視力を鍛えられていたのかと思うと、僥越ながら親近感がわきました。

仲村渠 なかなだ かけ 小さな努力を積み重ねる一方で、視線は常に世界を向いていたのが荻村伊智朗という偉大なるアスリートだったのだと思います。その姿勢はきつと、我々を始め世界中の卓球を愛する大勢の人たちに影響を及ぼしてきたのでしょう。

加々美 そんな逸材を輩出した西高卓球部がこれからも永続していくことを期待したいですね。

—— ありがとうございます。



西高卓球部 7期生
加々美 信光さん

7期主将。荻村さんの4年後輩。昭和28年度関東選手権複東京都代表、同年全日本男子ジュニアで都代表。



全日本選手権優勝
77世界選手権出場、79,81男子コーチ
仲村渠 功さん

荻村強化本部長時代全日本ジュニアで優勝。恐怖の御殿場合宿に呼ばれ、卓球に取組む姿勢が一層深くなった。



全日本選手権3位
(71,75世界選手権出場)
古川 敏明さん

一度しかない人生に、荻村さんと会え、ピンポン外交に関わったことは私にとって宝。出会いは人生の宝！



元スウェーデン代表
クリスチャン ヘイダール
Christian Heyerdalsさん

1957年からすべての世選手権を見てきたスポーツジャーナリスト。自身も代表選手。息子の名はイチロウ。



ITS三鷹卓球クラブ代表取締役
織部 幸治さん

荻村伊智朗が主宰した青卓会一筋の卓球人生。1983年世界選手権東京大会代表。会員制卓球クラブITS-三鷹代表。



アトランタ五輪、アテネ五輪出場
ITS三鷹卓球クラブコーチ
遊澤 亮さん

小、中をITS三鷹で卓球修行。全中、インターハイ全日学で単優勝。チャンピオンチームヘッドコーチ。

第一章 1948-1965

創生期 第一期黄金時代



執筆

3期 市川 功嗣

4期 平川 進次

5期 久保田 四郎

5期 若山 望

6期 佐藤 安弘

7期 加々美 信光

9期 森 篤行

10期 城川 昂雄

11期 高村 則夫

12期 高尾 弘

12期 佐野 建一

13期 中林 由行

15期 遠藤 孝子(旧姓 木村)

15期 瀬井 勝公

16期 中村 明彦

19期 養老 民雄

3期 市川 功嗣

憲法大会の思い出

創部70周年本当に御目出度う御座います。

私にとっても一生のスポーツ（卓球70周年）心より感謝してます。

甲子園の高校野球100周年に比べ勝るとも劣らない記録です。

その頃は金も組織（学校、県、名声）の支援も少ないまま部を作り上げ、間もなく東京都の憲法大会で優勝でき、部の基礎固めが出来ました。

創部当初は、2期の田中さん、世界でもまた有名な3期の荻村さん、小生、4期の甲子さん、亀田さん、原田さん等々が集まり、卓球台無し、ラケットは木の手作り、ボールは貴重で、割れれば酢酸ビニールで修理しやり繰りしながら（バックハンドを使わないで全て右ロングドライブで回って打つ西高打法）習得の猛練習で、過労から入院したこともありました。

戦後間もない時期でしたので、不満はありませんでした。むしろどうしたら練習時間を長くとれるかに苦勞し、授業の終わり間際は、心は卓球に行き数学の岡田先生に暖かく注意されたのも懐かしい思い出です。

あちこち横道にそれダブることとなりますが、部を作ってから数年にして、東京都の憲法大会優勝は思いがけない奇跡でした。その少し前、都のダブルス大会があり、荻村市川組が3位入賞で少し自信をつけてきました。この時代のサーブは、球の握りしめ、左右のぶつけ合いOKでしたから、右サーブは左よりスピードで圧倒的に有利でした。これと、荻村兄のスマッシュとつなぎの市川の組み合わせが効果を発揮しました、優勝までの6回戦を見て驚きました。このうち逆転勝利が3回はまさに奇跡。

これも藤崎先生、田中先輩、当時の男子部員に、斉藤さん達女子の応援有ってこそと感謝の思いを新たにして

ます。

今このときの選手の生き残りは、私一人となったことは感無量です。

この後日談ですが、高校インターハイがあり、西高は第Iシートで京都に行けるものと頑張りましたが、決勝で高千穂の富田選手にやられ負けました。一方西3年の卒業旅行も同じ京都で卒業旅行を先に不参加の返事してたので、小学校は戦時中で無し、中学は学制改革でスルーパスで無しで、一生卒業又は修学旅行は無しで、楽しい思い出が一つ消えています。

だいぶ余談が多くなりましたが、西高卓球部の老年組の（卓球やろう会）は、16期中村さんが長年幹事また70周年でも世話役をと、これを助けて12期の佐野さん、斉木さん等々感謝にたえません。表には出ませんが5期の若山さんの克明な貴重な対戦記録は、荻村ノートにもひけを取りません。これに惹かれて何とかこの寄稿をしたためている次第です。

年始やろう会には、毎年遠方の広島より4期（病で5期）の久保田さん、紅1点の5期斉藤さん（全日本優勝2回）がみえ、昔話に花を添えています。

最後に、やろう会現況は、毎週木曜18時過ぎより三鷹ITS（電話：0422-49-8629、荻村兄自宅の下）卓球半分 飲み会半分楽しんでますが、4期加納さん、5期斎藤さん、12期斉木さん、15期瀬井さん、市川と、（2期田中さんは脳血栓で日常生活は少し不自由。卓球不可）倒壊危機に陥っています。近くの人また始めようかと思う方は是非見に来てください。

感謝 市川

4期 平川 進次

西高卓球部の思い出

昭和24年4月、六三三制の施行を機に、私は私立の旧制中学から、都立第十新制高校に入学した。1年後に都立西高校に改名されたと思う。

入学して目にした卓球部員募集の貼り紙を見て応募したとき、前を歩いていたのが同時に入部した藤田君だった。旧制第十中学校から進学した同学年の部員が10名位と、上級生には3年生の田中さん、2年生の市川（功）さん、荻村さん、岡崎さんら、部員合計20名ほどの所帯でした。田中さんが、薄板にラバーを貼り付けた私のラケットを見て、ご自分のラケットを私に下さった思い出もあります。

古い体育館内をベニヤ板で仕切った教室跡に、まともと云える卓球台は1台。

当然ながら、練習は早い者勝ち。昼休みのゲームはノータッチ方式（1回でも空振りしたらカウント無関係で敗退）。強烈なスマッシュが最大の武器。

そんな中で、卓球台が寄贈（払い下げ？）されるとの話があり、ある日、1～2年生数人で水道道路（現井の頭通り）をリヤカーを引き代々木方面まで、汗だくになりながら受取りに行ったことを思い出します。

それでも、練習の待ち時間は結構長く、顧問の加藤良作先生が傍らに見えたとき、市川（功）さんが台横の床面に、チョークで因数分解の数式を書いて質問されていた風景があったり、あまり将棋の強くない荻村さんが、自分の王様が詰まれると、持ち駒で相手に王手をかけ、「一手負けただけだ」と云って悔しがっていた光景を思い出します。日の出屋のおばさんが、荻村さんの顔色が悪いと云って心配していたこともありました。

同学年部員は、亀田、甲子、原田、藤田、大橋らの一軍、準一軍に続いて加納、中村、竹内、加藤、久保田、三玉、私と云った二軍部員でした。

荻村さんは、二軍部員にも目をかけて、加藤君をカットマンに、私をショートマンに仕立てようと指導してくれました。ある時、部誌をみたら「加藤、平川は何をやっているんだ」と書かれており、進歩しない二人を嘆いている様子でした。（後年、やろう会で対面したとき、「君にはショートばかりやらせて済まなかった」と言われて、記憶の良さに圧倒され、答えようがなかった。亀田君は「ショートマンがいたから、ショートへの対応ができた」と良いことを言ってくれた。）

さらに、荻村さんは二軍部員には対外試合の経験が無かろうと、ある日杉並高校との親善試合に引率してくれた。徒歩で行く途中、天祖神社前の道路で一列に並んで放水をした記憶があるが、試合の勝敗は記憶がない。罰当たりなことをしたものです。

2年生への進級とともに新人が入部してきた。斉藤さん、荒瀬さん、吉武さんの3名の女性と若山君らの顔ぶれだった。4期生に比べて少人数の5期生だ。私は、3年生への進級と同時に退部してしまったので、6期生にはやゝなじみが薄い。

2年間の部活ではあったが、良き恩師・先輩・同輩・後輩にめぐまれ、毎日が楽しく青春を謳歌した時期であった。残念ながらOBの何人かは、すでに天に帰った者もいて寂しさは禁じ得ないが、脈々と続く「卓球やろう会」を通して、この伝統ある西高卓球部が永遠に栄えることを祈っています。

西高卓球部創部70周年に向けて

暑中お見舞い申し上げます。暑い最中、西高卓球部70周年の歩みの企画、編集にご多忙のことと存じ、昔、係った人間としてそのご苦勞に感謝いたしています。

正式の部の創設からするとまだ70年は経っていないと思います。

私は旧制10中に入学（昭和21年）旧制中学の最後の人間です。西高卓球部に入ったのは西高になってからですから、その時は部として出来たホヤホヤの時代だったと思います。田中さん3年、荻村さん2年、市川さんも2年、亀田さん、原田さん、藤田さん、平川さん、加納さんは同期生です。荻村さんは後輩の指導よりも当時は御自分のレベルアップに努力されていました。私が指導を受けたのは田中さんです。2年になって、1年下に新制中学出身の齊藤さん、若山さん、その他の方々が入部され、田中さんは卒業されました。この時代から指導的立場を発揮されていたと思います。

高千穂商高に富田というサウスボーが確か荻村さんと同時代でした。今まで負けっ放しの荻村さんが彼に勝ったこと、そして東京都の憲法記念大会で団体優勝したこと、（メンバーは荻村、市川、亀田、甲子）、そして、私は3年で休学し、復帰した年に荻村さんが都立大に入学されていて軟式の日本チャンピオンになられて、祝勝会を西高の教室を借りてやった記憶があります。田中さん、市川さんがお詳しいと思います。西高をトップで卒業した頭のよい藤田さんが覚えているかどうか？お互い年齢をかさねて、記憶が薄れていきます。沼口氏の相棒の内田氏が亡くなられて、ウッチャンの思い出とか、ほかにも一度、何か文章を書いた記憶があります。

歴史を残すことの大切さを、こうやって面倒を見て下さることは、本当にありがたいことです。感謝、感謝！

2015年7月14日

部誌より抜粋

荻村さん優勝の報に部員諸君の反応は——佐藤君、三浦君、齊木君、僕の四人はラジオを聞いて、その模様を身振り手振りで一生懸命話し合った。「すごかったぞ。スマッシュの連続だった」「荻村さんもカットに追い込まれたらしいぞ。」等々。沼口君はラジオを聞かなかったのが残念残念。「新聞で見た。聞きたかったな」とも。それから僕達の話の聞き役。……社員後輩兼先生が来て「荻村君が優勝したそうじゃないか。勝つ先生に知らせたかい？ だめじゃないか、真先に知らせなくちゃ。それから祝賀会を聞こう。あまり月日のたたないうちにね。」やっぱり大人は大人だけのことはある。

昭和二十七年六月十六日



「内っちゃん —内田英彦追悼集—」より抜粋

西高体育館の思い出

西高に二回入ったのは私達だけだろう。私の入った宮前中学は、名ばかりで発足時には校舎がなかった。仕方なく最初は高井戸小学校の講堂を借りて、四隅に黒板をおいて授業をうけた。次に移ったのは高井戸第二小学校で、ここはふつうの教室であった。そこを追い出されて移った先がなんと西高の体育館である。体育館をベニヤ板で仕切り教室を作ったので天井はなかった。上がないから声は筒抜けであったし、隣の教室に向かってドングリを投げあったこともある。まさかまた西高のお世話になるとはその頃は思っても見なかった。

高校進学が一番家から近いという理由で、西高をえらんだのだが、入ってみて驚いた。よそから入学してきたのは、みなそれぞれの中学のトップクラスで、天下の秀才揃いであった。我々の中学からは60人も入ったのだから、私のような出来の悪いのも入学できたのである。もともと勉強が大嫌いのうえ、周りは秀才ばかりなので、早々に勉強はあきらめた。そして中学でも多少はやっていた卓球でもやるかと卓球部の門をたたいた。なつかしい体育館の重い鉄の扉を開けてしばらく見てから、当時のキャプテン、荻村さんに恐る恐る入部したい旨つげると、XXXと言われた。変なことを言う人だと思ったのだが、後になって聞いてみると私の聞き違いであった。しかしこの会話の内容は誰にも教えられない秘密である。

それからは毎日卓球づけで、勉強などは見むきもしなかった。同時に入部した富田、川口などは既に中学でも

名の知られた連中で、私などは相手にもされなかった。当時はペングリップが主流で、グリップの親指の位置で二派に分かれていた。

私は親指をふちの角にに掛ける派だったが、だれも教えてくれるわけではなく、上級生の真似をしておぼえるしかなかった。

そんな時たまたま田中先輩が来校され教わったのが、唯一受けた指導である。卓球に夢中になるうちに、ますます授業がいやになり、時々さぼっていたが、ついには今で言う不登校児になってしまった。しかし夜になると吉祥寺の武蔵野卓球場を訪れ荻村さんと夜中まで練習を続けた。それでも夏休みになると授業がないので登校し猛練習にあけくれた。3年の夏には、もう卒業していた荻村さんと、なぜか当時の東京の高校ナンバー1の米倉が来て猛練習をしたのが、西高における卓球の最後である。結局、勉強はもちろん、卓球ものにならず卒業してしまい、それから70年馬蹄を重ね今日に至っている。

その後60年たったある日、私の地域の自治会で卓球部が創設された。早速かけつけると、昔取ったきねづかの老人が二三人であとは素人ばかりだったが、それでも運動不足解消にはよいと思い始めることにした。不思議なことに体はどこも痛まず、すぐに高校時代に戻った感じで、空白を感じられなかった。この調子なら、運動神経と反射神経を競うような現代の卓球は無理としても、温泉ピンポン程度なら死ぬまで続けられそうな気がしている。

西高卓球部のある思い出

西高卓球部の思い出として私の記憶に今でも残っているのは、二つのことである。一つは昭和27年であったように思う。この年私は高校2年生でした。ある日、部活終了後帰途につきました。校門から水道道路に出たところで後ろから呼び止められました。自転車に乗った荻村さんでした。その日、都立大から卓球の練習に来られ帰るところだったのです。私はすすめられるまま、西荻南口商店街を五日市街道の交差点まで乗せてもらいました。水道道路の西方向へ進行して行く時の沈む夕陽がきれいなあと思ってました。

その時、荻村さんが「ポーのアッシャー家の崩壊に出てくる景色のようだ」と言われました。私はその本を読んでいませんでしたので、ただ、黙っているだけでした。英語の教科書の授業で「黒猫」が難しかったせいもあったような気がします。いずれにしろ先輩の文武両道の一面を見た気がします。

二つ目はそれから何十年も過ぎてから、2000年頃だったような気がします。荻村さんに関する話をされた事がありました。当時日本サッカー協会の会長、岡野さんからでした。岡野さんと荻村さんの接点はJOC、IOCの委員だったからと思います。岡野さんが年も少し上だったような気がします。

岡野さん曰く、「日本は惜しい人を亡くした。彼は国際的に通用する数少ない日本人でした」と語っておられました。また、サマランチ氏の信頼も大変に厚かったとも云っておりました。その時、私は内心、誇らしい気がしたのを今思い出しております。

終わりにになりましたが、西高卓球部70周年記念を機に今後の活躍をお祈りします。



佐藤

日本経済新聞社 私の履歴書に執筆
2005年9月1日～9月30日(キリンビール相談役)

スポンジ革命の最先端で (世界を夢見て紡ぐ人の輪)

草創期を受け継いで

昭和27年4月から30年3月までの3年間、僕は西高卓球部に在籍した。長い人生から見ると、非常に短い時間だったが、それでも僕の人生のうちで最も誇りに思える時であり、またこよなく楽しかった一時期だった。思い出は書きだすとときがない。60年以上も前の話なのに、思い出の一コマ一コマが鮮明に蘇る。この時期、西高卓球部は、「草創期」を過ぎ次の発展を目指して「助走」をはじめた時期であった。卓球界全体が激動に見舞われる中で、一人の天才が生まれ、技術面だけではなく理論面でも精神面でもわれわれの支柱となってくれた。世界を夢見て、未来を信じて、ひたすら走り続ける毎日だった。

「草創期」にあったような、卓球台をリヤカーで運ぶなどと言う事はもうなく、一応3台の卓球台が確保されていた。練習場としては体育館がほぼ毎日使うことが出来た。体育館はバスケットボール部、バレーボール部と共用だった。練習場が確保されていたことがたまたま嬉しかった。中学2年で校舎の入口の三和土で始めてラケットを握った。週に1～2度、教室の机を片隅に押しやって、ボールを打ち合うのが精一杯だった。西高に入学後、体育館での練習をみて、「やっぱり高校は違うな」と深く感銘した。とは言え、体育館の窓ガラスはいたるところで割れたままで、風の強い日などは風が入って大いに悩まされたものだった。

照明設備もなかった。確か2年の時に天井に照明がつけられたように思うが、普段は電気がつくことはなかった。冬には午後4時半ごろになると暗くなるため、練習を切り上げなくてはならなかった。校外に出て周りの畠のあぜ道を駆けたり、吉祥寺の武蔵野卓球場に出歩いて、練習不足を補うような事も多かった。

常連の部員は10名程度だったと思う。学年のはじめには新生で部員数はふくれるが、学年が進むにしたがい数は徐々に少なくなった。10名の選手に対して3台の卓球台があるのだから、練習環境としては恵まれていた。試合形式の練習のウエイトは低く、ラリーの打ち合いが中心だった。1台に4人がフォアクロス、バッククロス

で打ち合った。昨今のように2人で1台を占め、ボールも一時に何球も使うなどと言う事は想像もできなかった。

卓球のスタイル、戦法と言う点では、僕が入学した当時には、もう草創期の名残は数少なくなっていた。草創期の西高のスタイルは、後陣に下がって大きなドライブで打ち合うというものだったと聞いている。卓球部の創始者である中田さんという方が、大変きれいなフォームの持ち主で、この影響を受けて皆さん、非常にきれいなフォームで打たれていたと聞く。この西高の伝統的なスタイルは、僕が入学した年に卒業された4期生(昭和26年卒)までで、5期生以降になると少し変化が現れて来ていたように思う。後に述べるようにスポンジ・ラバーの登場で、卓球の中味に根本的な変革が生じはじめていたからである。それでも先輩の選手たちはスポンジラバーを使いながらも、美しいフォームは保っておられていた。僕もフォアハンド・ドライブのフォームにはそれなりにこだわった。

もう一つ、草創期の面影を残していたものがあつた。ユニフォームの色である。当時は昨今のように何枚もユニフォームを持って、次々に着替えるということは出来なかった。1枚だけのユニフォームを毎日のように洗って着るのが普通だった。当然色は急速に褪せてしまう。オリジナルな色がどんな色だったかは知らない。僕の目に残っているのは色あせた紺色のユニフォームで、これが西高伝統のユニフォームだと先輩から教えられた。今でも僕は色あせた紺色のポロシャツを数枚持っている。妻は時々処分しようとするがこれだけは僕は許さない。何ともいえない思い入れがこのユニフォームの色にはある。

「スポンジ革命」の始まり

僕が西高卓球部に在籍した時期は、世界の卓球界も大きな激動期にあった。この歴史的な激動を一言でいうならば、「スポンジ革命」とでもいうべき事ではないかと僕は思っている。これ以前の世界の卓球界の主たる潮流はラバーでは薄いゴムに小さい粒をつけた表一枚ラバーで、戦法は日本ではペンホルダーのドライブ、欧州を

中心とする世界では両面一枚表ラバーのシェークハンドでカットボールの守備型の卓球であった。ピンポンという言葉に代表されるような、どちらかと言えば牧歌的な世界であったように思う。

昭和27年、インドのボンベイで開かれた世界卓球選手権大会で、突然彗星のように現れたわが国の佐藤博治選手が個人優勝を成し遂げた。当時、わが国では藤井則和選手の全盛時代で、このほかにも林忠明選手や富田芳雄選手が活躍をしていて、佐藤選手はむしろ無名に近い存在だったと思う。海外でもこれまで世界を席卷していたイギリスやヨーロッパ諸国では、佐藤選手の優勝は大きなショックであった筈だ。その証拠に同じ年の後半には、イギリスからバーグマン、リーチの両選手が早速リベンジに日本を訪れ、各地で交流試合を行っている。この時には英国勢が日本サイドを完膚なきまで打ちのめした。

佐藤選手のこの降って湧いたような世界制覇は、彼がおそらく世界で最初に使い始めたスポンジ・ラバーに負うところが多かったと思う。佐藤選手はこの後、左程の成果を取める事もないまま消え去ってしまった。だが彼が世界の卓球界に革命的な大変革をもたらしたその功績は永遠に燦と光り輝いている。卓球界はその後今日まで、数多くの種類のラバーの登場をみているが、強い弾性と強烈なスピンを求めるといふ点では、最初に登場したスポンジの延長線にあると言える。また今日、中国の男子選手たちや我が国の水谷選手が見せる軽業師が格闘技を行うような卓球は、この「スポンジ革命」が行き着く究極の姿ではないかと僕は思っている。

佐藤博治選手によって幕が切って落とされた「スポンジ革命」は、次いで世界に躍り出た我らが誇る荻村伊智朗選手によって、一つの完成した姿に作り上げられた。荻村さんは昭和28年に全日本選手権を制すると、翌年には英国で開かれた世界選手権で堂々と世界一の座に着かれた。とは言っても佐藤選手や荻村選手の赫々たる戦果をみて、すべての選手がスポンジ・ラバーを取り入れた訳ではない。日本大学で荻村さんの1年後輩で、同じく1年遅れで全日本と世界を制した田中利明選手は裏ソフト・ラバーの使い手だった。田中選手は丸太棒のよう

な腕を振り回して火の出るようなスマッシュを連発、胸のすくような卓球を見せてくれていた。また全日本の代表の常連だった専修大学の富田芳雄選手は、瘦身ながら流れるようなフットワークと華麗な流しボール、変幻自在なオールラウンドのラケットさばきで僕たちを魅了してくれたが、彼はずっと旧式一枚ラバーを使い続けていた。

この後、スポンジ・ラバーの使用が禁止されたため、スポンジだけのラバーは姿を消した。だが、この禁止措置によって「スポンジ革命」が引き起こした動きが止まった訳ではない。より強く、よりスピンのかかったボールを打つためのラバー改良競争は続き、この動きは今日、さらに激しくなっていると言えるだろう。裏ソフト、表ソフト、粒だかなど様々なラバーが登場し、さらにラバーの機能を強化するために接着剤にも様々な工夫が施されていると聞く。これに伴い卓球の中味も大きく変わった。世界選手権や全日本選手権で随処にみられる台上の奇術のようなプレー、後陣に下がっての激しいラリー、相手のスマッシュを瞬時に反撃して息の根をとめるブロックなど、僕たちには想像も出来ないプレーばかりだ。今日、一流選手同士で繰り広げられる卓球は、僕たちの世代が行っていた卓球とは、もはや異なる種類のスポーツと考えた方が良い。

荻村伊智朗さんとの出会い

荻村さんがいつスポンジ・ラバーに転向されたかは、僕は知らない。だが僕が西高に入学した昭和27年にはすでにこの「スポンジ革命」のリーダーとしてその最先端に立っておられた。その影響もあってか、僕が入学した時の2年生、3年生は殆どすべてがスポンジ・ラバーを使用されていた。逆にこれ以前の選手は、殆どみんな一枚ラバーの使い手であった。僕も中学時代は一枚ラバーを使っていたが、西高に入るや否や当然の如くスポンジ・ラバーに転向した。スポンジ・ラバーは比較的容易に強力なボールを打つ事を可能にしたが、一方、ボールのコントロールが難しく、特に相手の回転の変化に敏感であると言う大きな弱点を持っていた。当時、われわれの最

大の課題は、このスポンジの持つ弱点を如何に克服するかであったと言って良い。

僕が西高に入学した当時、荻村さんは都立大の2年生だった。大学の卓球部には入らずに、吉祥寺の北口にあった武蔵野卓球場を拠点とする「吉祥クラブ」に所属されていた。すでに東京都の卓球界では頭角を表されつつあり、将来を期待され始められていたと言うものの、総じて言えばまだ無名に近い選手と言って良かったのではないかと思う。だが、西高の現役部員にとってはすでに神格化された存在で、僕などにとっては雲の上の人だった。時折、西高の体育館にお見えになって練習をされる時など、僕などは遠くから見るだけであった。それでも荻村さんがボールを打たれる姿を遠くから見るだけで、何となく荻村さんの体全体のリズムが自分に乗り移るようになって感じて、卓球が急にうまくなったような気がした事を覚えている。

都立大学に入学されながら、卓球部には入らず吉祥クラブで卓球を続けられるという決意をされた事情については僕は知らない。ただ、これで荻村さんがご自身の将来を卓球に賭けると決断されたのではないかと思う。この後、荻村さんは都立大学を2年で中退され、日本大学芸術学部2年に転入学された。世界への雄飛を目指して、荻村さんの本格的な卓球人生が始まったと言えるのではないだろうか。

昭和27年(1952年)、僕が1年生当時、荻村さんは西高に週1～2回は練習に来られていたと記憶している。まだこの時分には僕は荻村さんにボールを打ってもらった事は殆どない。2年生の内田さんや沼口さん、3年生の若山さんや女性の斉藤さんが練習相手を務められていた。この年、荻村さんは仙台で行われた全日本軟式卓球選手権で優勝された。軟式の公式試合には大学卓球連盟に登録されている選手は出場が禁止されていたので、当時の主力選手は参加していない大会だったが、それでも日本一は日本一、決勝戦がラジオで中継されたこともあって、われわれは大いに興奮した。だが、この年の日本一を決める全日本卓球選手権には、荻村さんは残念ながら東京都の予選で敗退されると言う悲哀も味わっておられ

る。矢張り相手はカット系の選手だった。

それでも荻村さんの世界を目指す視線はますます確固たるものになっていった。この年の秋、前述したように英国からバーグマン、リーチの両選手が来日、日本各地でわが国の一流選手を完膚なきまで打ちのめしていった。忘れもしない、当時の後楽園のアイスリンクで開かれた日英対抗戦での事だ。藤井則和、林忠明の両選手の速射砲のような相次ぐ強打を拾いまくって勝利を取めたバーグマン、リーチの両選手、僕は信じられない思いで、目前で展開された妙技にうっとり酔い痴れるだけだった。この時、僕の前の席で「俺なら勝てる」。一球たりとも見逃すまいと大きな瞳をさらに大きくして、行き交うボールを凝視していた荻村さんの一言。荻村さんに言わせれば、「絶対にミスをしたくないバーグマン」。この時点で、世界一のバーグマンを倒す秘策がすでに荻村さんの頭の中では練られていたのかと思うと空恐ろしい。

次の年の昭和28年、若山さん、斉藤さんなどの3年生が卒業し、内田さん、沼口さんなどの2年生も受験勉強のために部活動から離れられた。一人残された感のある僕は主将に祭り上げられてしまった。幸いに新人として浜田、村田、遠藤、大久保などの諸君が入って来てくれた。この頃になると荻村さんが練習においでになる頻度も少し落ちたようにも思う。荻村さんの実力が卓球界で非常に高く評価され始めてきたこと、関東リーグの強豪、日本大学に移られ、いよいよ世界制覇を目指して多忙な毎日となったことなどがその理由ではないかと思う。

この年の春にアジア卓球選手権が、相撲協会に返還される前の両国国技館で開かれたが、荻村さんが日本代表の1人に選ばれた。この大会での荻村さんの活躍には目を見張るものがあった。個人優勝こそ、ベトナムのマイ・バンホァというバーグマン、リーチクラスの超一流のカット選手に譲ったものの、団体戦では日本選手では唯一、荻村さんがこのマイ・バンホァ選手を撃破した。僕も新人の浜田、村田、遠藤などの諸君を誘って、授業を抜け出して両国国技館に応援に出掛けた。卓球部員の集団サボである。新人諸君はこのサボ行為が担任に見つかり、あとで大いに油を搾られたようだ。

西高卓球の変革

「スポンジ革命」の進行に伴い、西高の卓球も基本的な戦法の変革に取り組み始めた。伝統的な後陣からの大きなドライブ、すべてのボールをフォアハンドでまわり込んで打つというようなスタイルでは、もはや通用しなくなってきたからである。スポンジの威力を抑えるために、相手方もボールの回転を微妙に変化させながら前陣から速攻で攻めてくるようになってきた。

僕たち西高卓球部員が極めて幸運であったのは、この卓球界全体の歴史的な変革期に、その先覚者であった荻村さんから直接の薫陶を受ける事が出来た事である。「相手のボールをスポンジで一回掴め、そして包み込むようにして持ち上げ、そのボールをネットより高いところから相手のコートに押し込むように打て」というような指導も受けた。サービスを相手のネット際に落とし、第3球目を一気に強打する練習も重ねた。守備型の相手のバックスピンのボールを、こちらバックスピで返球(いわゆる突っつき)し、チャンスを見て回り込んで一気に強打するなどと言う事も徹底的に練習した。また「51%戦法」と言って、決定的な強打が成功する確率が50%以上あれば、すべて思い切って強打せよとも言われた。

以上のような事は今では当たり前になっているのかも知れないが、60年前の常識では到底考えられない事であった。対戦相手の他校の選手たちもおそらくどう対応して良いか判らずに困っただろうと思う。勿論、われわれにとっても最初からうまく行った訳ではない。だが3ヶ月、半年と研鑽を積むうちに次第にこれらの戦法が身につき、それに伴い対外試合でも結果がでるようになってきた。

荻村さんが本当に凄かったと思うのは、彼がスポンジと言う新しいラバーを単に目前の勝負だけのための武器とは考えておられなかった事だろうと思う。スポンジ・ラバーの本質的な特性を徹底的に分析し、これが将来の卓球の姿を根本的に変えるものであるという洞察があった。そこから新たな戦略論、戦術論の構築に邁進された。この後、わが国は「卓球王国」として1970年代半ばま

で世界に君臨する事になるが、こうした長きにわたって、世界の頂点に立ち続ける事が出来たのも、荻村さんが構築された戦略論、戦術論の裏付けがあったからだと確信する。

僕たちは、こうした荻村さんの偉業のおこぼれにあずかると言う幸運に恵まれ、見様見まねで時代を先取る卓球をしていたと言う事になる。草創期を受け継いだ僕たちの時代の西高卓球部は都内では常時、ベスト4～8ぐらいのところには位置していた。個人戦でも1～2人の選手がベスト8～16ぐらいのところまでは進出していた。屈指の進学校の常として、無茶苦茶に強い選手が新人として入ってくる訳ではなかった。そして大抵の人は2年の2学期で部活を終了するので、卓球に本気で取り組める期間は精々1年半ぐらいに過ぎない。にもかかわらず、東京都の卓球界で一応、強豪校としてその位置を保つ事が出来たのは、いま振り返ってみると、戦略、戦術面で他校に一步先んじていたからではないかと思っている。

全日本卓球選手権ジュニアの部

昭和28年、僕は西高2年生に進学したが、当初はこれと言った戦果は何も上がらなかった。もともと不器用な僕にとって、スポンジを使いこなす事は至難の業であった。春の憲法記念大会では、1年上の内田さんや沼口さんが部活を停止されたため、僕が新人3人をかかえて臨んだが、早々に敗退、悔しい思いをした。その後、関東高校選手権予選、全日本高校選手権(インターハイ)予選、国体予選と続いたが目ぼしい結果は出せなかった。関東選手権で内田さんと組んだダブルスで東京都の予選を通過したが、本戦では一回戦で簡単に負けてしまった。

国体予選では4回戦ぐらいで城南高校の左利き裏ラバーでシェークハンドの攻撃型の選手に歯が立たなかった。回転の速い、くせ球の持ち主で僕が苦手とする左利き、加えて会場となった城北体育館の午後3時頃の採光状態は最悪だった。僕は荻村さんに向かって、少しは慰めの言葉でもと期待しながら、色々言い訳をこぼしたのだと思う。これを聞いた荻村さんの顔色が変わった。「お前は相手のボールが伸びるだの縮んだだのと言っては負ける。

誰がお前に打ちやすい都合の良いボールなど打ってくれるものか!」と一喝された。荻村さんは西高卓球部仲間では非常に怖い人とされていたのだが、僕が荻村さんに叱られたのはこの時だけだった。

だが荻村さんのこの一喝は応えた。この年の夏休みには必死になって練習をした。毎日のように体育館に出掛けた。1年後輩の浜田、村田、遠藤君なども頑張ってくれた。これまで試みていた事が段々出来るようになってきた。もともと後陣からの強いドライブには自信があった。加えて3球目攻撃や台上でのカットボールの応酬から回り込んで一気に強打で決めるなどという技術も大分ものになってきたように思う。今では誰でも使うが、当時は画期的なボールだった。接戦の勝負所でかなりの確率で、ショートサービスから3球目を強打出来るようになり、余裕を持ってゲームの展開をはかる事が可能になった。

秋に入ると思わぬ好機が訪れた。全日本卓球選手権ジュニアの部の東京都予選である。東京都代表となる最後のチャンスであった。東京都の代表枠は6人だったと記憶する。組み合わせは6つのブロックに分けられ、僕は第1シードの都立4商の富田選手のブロックに入れられた。当時の富田選手は東京都では無敵、インターハイでも国体でも大活躍をされた選手で、彼に僕が勝つなどという事は誰一人予想出来なかったと思う。

だが、勝負はやってみなくては判らないものである。この大会、僕は極めて好調だった。特にうしろに下がってのロングのドライブで、威力のあるボールが打てていた。代表決定戦までにも何人かの強敵を比較的容易に倒していた。一方、富田選手は連戦の疲れもあったのだろう、また3年生と言う事もあってか少し練習不足気味の様子だった。どこか僕などは簡単に鎧袖一触と考えられていたような節もあった。勢いに乗った僕は1セット目を圧勝、2セット目は失ったが、最後の第3セットも富田選手を圧倒し続け、思わぬ勝利と東京都代表と言う栄誉を手にした。夢のような思いだった。

この年は荻村さんも何の問題もなく東京都の代表に選ばれておられた。全日本の会場は奈良県の天理市、天理教の総本山のあるところである。時期は10月、2学期の

中間試験の直前だった。大会を前に、僕は学校の練習を終えると吉祥寺の武蔵野卓球場に出掛けて夜も練習を続けた。荻村さんも姿を見せられ、2人で夜遅くまでボールを打ち合った。当然の事のように天理には荻村さんと御一緒することになった。

昭和28年当時であって、東京を離れて天理まで全日本の大会に出掛けると言う事は、今日で言えば外国に遠征する以上に大変な事であった。個人の資格での参加だから、旅費も宿泊費もすべて個人負担。だが僕は非常に幸運だった。同級生の諸君が一人50円ぐらいカンパをしてくれ、また中学校時代の仲間も別にカンパをしてくれた。お陰で我が家の負担は微々たるもので済んだが、それでも3,000～4,000円の資金を手にした。極めてリッチな気持ちに浸りながら一躍、天理に向かった。

大会初日の5日ほど前に、荻村さんと僕は天理に向けて出発した。荻村さんにとっては、この大会は優勝以外の事は考えられない大切な大会だった。「絶対に勝つ」ための周到な準備が進められ、僕はそのお相手を務めさせて貰った。鈍行(各駅停車)の夜行列車で東京を立ち、翌日昼頃に天理市に着いたように思う。まだ会場は準備されていなかったが、宿舎にあてられた天理教の巨大な宿泊施設に案内された。会場の一部を練習に使わせてもらった。天理市には天理教の様々な行事に全国から集まる大勢の信者を収容する大きな宿泊施設があり、それらがこの大会の参加選手の宿舎にあてられた。

荻村さんはこの大会で念願の初優勝を逃げられた。4回戦では苦手とする守備型・シェークハンド・カットマンの岩手大学の藤井基男選手に快勝、準決勝では五百部義平選手に大苦戦となったが何とか勝利を収められた。そして決勝戦。相手は同じ日本大学の1年後輩に当たる田中利明選手だった。これまた大接戦となったが、セットカウント3-2で荻村さんが田中選手を下し、念願の栄冠を射止められた。これまでもその実力は関係者の間では高く評価されながら、今ひとつ実績が伴わなかった荻村さんがこの優勝によって名実共に日本一の座につかれ、これ以降、長きにわたって日本の、そして世界の卓球界をリードされる事になる。この大会における荻村さんの

試合を身近に観戦出来ただけではなく、事前練習の相手を務める事が出来たのは僕にとって終生忘れる事の出来ない思い出である。

ジュニアの部に出場した僕は1回戦、2回戦と相手が自分と同じスタイルの選手であった事もあって、接戦ではあったが順調に勝ち進む事が出来た。長いラリーでは僕の方が有利であったし、勝負どころでは短いサービスから3球目攻撃が功を奏したように思う。だが3回戦では青森県代表の成田静司選手に完敗した。成田選手は後に日本大学に進み、昭和32年、33年と全日本卓球選手権を2連覇したほどの実力者で、ペンホルダー・表一枚ラバーの典型的な守備型の選手だった。僕に攻撃する隙は一つもなかった。

思い出の人々

西高卓球部時代の3年間(昭和27年～30年)には多くの人々との出会いもあった。僕の人生にとって、最も大切な財産である。これらの出会いの思い出を通じて、この時期を振り返ってみたい。

どうしても最初は荻村さんとので出会いになる。前にも述べたように昭和28年の全日本卓球選手権前までは、荻村さんとの接点は左程強いものではなかった。だが荻村さんを遠くから眺めながらも強い影響を受けた事は間違いない。いま荻村さんを思うとき、第一に思う事はその桁はずれた国際性である。戦後、わが国が生んだ最高の国際人と言って差し支えないだろう。卓球やスポーツ界だけにとどまらず、政治、経済、社会、文化のどの分野をとっても荻村さんほどの国際人は見当たらない。

まだ無名の頃から荻村さんは、絶えず世界を念頭に置いておられた。西高に練習に来られても、二言目には僕たちにも「そんな事では世界一になれない」と叱咤激励された。無名どころか、やっとピンポンに毛の生えたぐらいの事しか出来ない僕たち初心者に対してもこの点は容赦なかった。今は残念ながら喪失してしまったが、この当時、僕たちは毎日持ち回りで「部誌」を書いていた。その中には「世界一」という言葉が氾濫していた。目の前にその事を言い続け、実現した先輩がいるのだから、

単なる夢物語ではなかった。

荻村さんとの出会いは天が僕に与えてくれた最高の恵みだったが、荻村さん以外にも僕はこの3年間に、多くの素晴らしい人達との出会いを持つ事が出来た。年次順で言えば、第一に2年先輩の若山望さん(5期)。素晴らしく美しいフォームの持ち主で、当時の西高の選手には珍しく、横への動きが早く、比較的、台の近くでボールをさばける人だった。強いというよりは高い打球点から早いボールを打っておられたが、僕たちを相手にされる時には易しいボールを打ちやすいところに打って頂いた。少しニヒルな感じがあって、今にも皮肉の一言二言が出てきそうな感じの顔つきが印象に残る。

同じく2年先輩の斉藤友希子さんとの出会いも忘れられない。僕の卓球の基礎を作って下さった。昭和27年、1年の時の夏休み、2人で何時間も徹底的にボールを打ち合った事が昨日の事のように思い出される。斉藤さんは大学受験のご予定がなく、3年の時も部活を続けられていた。僕もほぼ毎日のように体育館に出掛けたが、いつも斉藤さんがきておられた。物凄く強い選手で、当時の僕なんか全く歯が立たなかった。厚さ1センチのスポンジ・ラバーから繰り出されるフォアハンド・ドライブは男勝りの威力があった。当時の西高では、男子のドライブ選手はすべてのボールをフォアハンドで打つと言う縛りが課せられていた。それ以前の牧歌的なロングドライブ・ラリー戦の時代の名残である。だが斉藤さんには、女性であったからか、この縛りがなかった。卓球台の中央にでんと仁王立ちされると、僕なんか攻め口が見つけれなかった。フォアハンドからは強烈なドライブ、バックハンドサイドからは目にもとまらぬブッシュで攻められ、手の打ちようがなかった。

全国高校選手権(インターハイ)の東京都代表、全日本卓球選手権ジュニアの部での東京都代表で、ともに上位に勝ち進んでおられた事からも明らかなように、すでに全日本クラスの選手であられた。卒業後、昭和30年、31年と全日本軟式選手権で2連覇されている。不幸にして、間もなく病に冒され競技生活からは引退されたが、もし元気に飛躍を続けられていたら、荻村さんに次ぐ西

高出身の日本代表選手として、世界の檜舞台で大活躍をされただろうと思う。

僕のすぐ上(6期生)には内田英彦さんと沼口元彦さんのおふた方がおられた。沼口さんが190センチ近い長身瘦躯であるのに対し、内田さんは160センチそこそこの豆タンク型の体型、お二人とも井荻中学以来の親友同士でご自宅も近く、いつも一緒におられた。絵に描いたような「でこぼこコンビ」だった。登校時にうしろから眺める事が良くあったが、沼口さんが自転車をゆっくりこがれるその脇を、内田さんがいつも左腕で素振りしながら歩いておられた姿が目には浮かぶ。

内田さんは典型的なサウスポー、厚さ5ミリ前後の固めのスポンジを使われ、台上のプレーがお得意だった。そして追えば追うほど離れていく流しボール。フォアサイドへの動きが遅い僕には大の苦手で、サウスポーに対する苦手意識を徹底的に植え付けられてしまった。そのせいかどうかは判らないが、僕は「左」と聞いただけで勝てるような気がせず、また事実あまり勝った記憶がない。また、内田さんはダブルスの名人、1年の後半からダブルスを組ませてもらった。東京都では10戦以上戦って無敗、2年の春には一緒に関東選手権の東京都代表にも選ばれた。ただ、茨城県水戸市の茨城大学体育館で開かれた本戦では一回戦で敗退、僕が詰まらぬミスを重ねた結果で内田さんには申し訳なかった。

振り返ってみても、内田さんほど卓球が好きで好きでたまらなかった人を僕は知らない。勿論、卓球の好きな人はたくさんいる。だが内田さんの卓球の愛し方は通常のものとは全く違ったものだった。おそらく内田さんにとっては卓球が初恋の人ではなかったのだろうか。何度も卓球からはなれようとされては、卓球の魅力に抗しがたく、結局は卓球と心の中されるようにして、若くして早逝されてしまった。2年生の2学期を終えたところで、部活の中止を宣言されたところまではほかの同期生と同様だった。だが、3学期になっても、3年に進学されても、授業が終わると体育館に姿を見せられる。当時、受験生は授業終了後、予備校に通われるのが通例だったし、近くに城西予備校などというのがあった。内田さんはい

つも、「まだ少し時間がある、15分ほど」と言っではボールを打ち始められる。だが15分たっても、30分たっても1時間たってもやめる素振りはいみえない。そして最後の最後まで僕たちの練習につき合ってしまうのが常だった。

沼口さんは、その長身から繰り出すドライブに驚異ともいえる威力を持った選手だった。特にバックサイドにぎりぎりに回り込んで、相手のフォアサイドに巻き込むように打ち込むストレートとボールは超弩級で、荻村さんとも互角に打ち合える力をお持ちだった。

沼口さんは2年3学期で受験準備のため退部されたので、西高卓球部で御一緒出来たのは僅か2学期に過ぎなかったが、その後の僕の人生には大きなそして決定的な影響をもたらされた。

進学を選択に当たって、沼口さんの「一橋に来いよ、俺とダブルスを組もう」というお誘いほど魅惑的な言葉はなかった。若さというものだろうか、人生の大きな選択を「一緒にダブルスが組める」という要因だけで決めてしまった。沼口さんはまた英語の達人。受験の指導も頂いた。「単語を覚えようとするな。文法は気にするな。英作文に集中しろ。Somerset Maughamは読み尽くせ」などと助言を頂き、忠実に実行した。

だが大学に入って沼口さんと組んだダブルスは期待通りとはいかなかった。4～5回御一緒したと思うがごとく負けてしまい、間もなく解消した。ともに攻撃型の卓球を得意としたのだが、ダブルスを組むと何故か「俺が、俺が」という気持ちが先立ち、競うようにミスを重ねた。だが、人生におけるこの選択は、いま振り返ると大正解だったと確信している。好き勝手にしたい放題の事をしながら、長年海外で生活する機会を与えられ、国際業務に専心する事が出来たのは、ひとえにこの選択の結果であった。いまだに沼口先輩に金魚の糞のように付いて回り、甘えまくっている。

同じ1年上の学年に佐藤安弘さんと斉木隆さんという先輩がおられた。入学直後、おそろおそろ体育館の入口の鉄の扉を開いて中を見たとき、すぐ目に入ったのが佐藤さんと斉木さんが打ち合っている姿だった。「高等学

校に入るとあんなボールが打てなくてはならないのだな」と緊張した。佐藤さんには何となく居場所が判らずにいる僕たち1年生に色々気を使って頂き、面倒を見て頂いた。斉木さんはスポンジが主流となった当時の西高卓球部で、唯一の裏ラバーの使用者で、物凄い回転とキレのあるドライブボールの持ち主だった。強い手首を活かして、ちぎっては投げ、ちぎっては投げるように打たれる強打は、一たんつぼにはいると手がつけられない威力があった。またバックハンドからのドライブサービスは強烈で、左利きの内田さんなど、絶えずノータッチを食らっていたのを覚えている。僕は1年の夏から秋にかけて、斉木さんと練習をする事が多かったが、僕の不安定なドライブボールを丁寧に返球して頂いた。僕が始めてノームスのラリーを150回以上続ける事が出来たのは斉木さんとの練習中だった。右腕が硬直して動かせなくなったのを覚えている。これ以降、僕は自分のドライブに自信が持てるようになり、自分にとっての最強の武器にする事が出来た。

己の不徳のせいも、同期で長く卓球部で活動し続けた人は今野(旧姓正田)純子さん以外に殆どいない。しかし1年後輩には非常に恵まれた。浜田泰行君、村田久君、遠藤毅君、大久保君、久米好文君など多士済々であった。この中でも特に関わりが深かったのが浜田泰行君で、僕はここで刎頸の友を得る事になる。浜田君との出会いは中学時代に遡る。天沼中学3年だった僕が松浜中学2年の浜田君と杉並区の大会で顔を合わせた。試合の内容は覚えていないが、腕前はそこそこだったように思う。何事にも動じないような風情で、如何にも度胸のありそうな顔つきをしていた。何故か彼の印象が頭から消えなかった。僕が2年に進学した時、浜田君が西高に入学した事を知った。是非卓球部に入ってくれるようにと、同じく松浜中学から入ってきた大久保君を通じて早速勧誘した。次の日浜田君が体育館に来てくれた。それ以来、彼が1999年に亡くなるまで彼との交友が続いた。

浜田君は荻村さんの指示もあり、最初からショート主戦の選手として急速に成長した。相手の強打を素早い動きでブロック、そしてカウンターアタックにつなげるバツ

クハンドのショート、フォアサイドからのプッシュ、そして強い手首を活かした変幻自在のスピンを持つサービスが彼の武器だった。勝負強く、どんな時にも心の動きを表に出す事はなかった。相手の心理を読むのが上手で、彼の心理作戦に狐につままれたように、崩れてしまう相手も数多くいた。

試合では練習時の50～70%ぐらいしか力がでないのが普通なのに、浜田君の場合は120%近い力を出していた。だからどんな相手と当たっても勝ってくれそうな気がした。だがそんな彼も心の動揺から勝っている試合を落としてしまった事が一度ある。彼が1年生の時の新人戦決勝戦である。順調に勝ち上がり、決勝で対戦したのが当時の強豪、都立一商のエース、武井選手。第一セットは浜田君の圧勝で第二セットを迎えた。サイドが変わると正面に燦然と輝く優勝杯。これに目がくらんだのか浜田君は勝ちを焦り、タイミングを狂わせてしまい第二セットは落とす。第三セットに入って何とか頹勢を覆そうとしたが、一度狂ってしまったタイミングは如何ともしがたく、長蛇を逸してしまった。

浜田君の思い出はつきない。その中でも最も驚かされたのは、彼が僕のあとに続いて一橋大学に来てくれた事だ。もともと彼は理系の人で、数学、統計学などを得意としていた。僕は彼は東京工大でも受けるのではないかと思っていた。だから彼を一橋に誘うなどと言う事は全く頭になかった。だが試験が近づくと彼はただ一言、「加々美さん、一橋を受けるよ」。そして見事に現役合格。報告に行った担任の中野先生に「嘘でしょう」と一笑に付されたという話を、のちに彼から聞いた。彼のこの決断で、彼と僕との生涯を通じた交友が続く事になる。1年先輩の僕に絶えず厳しい事を言い続けてくれた彼。いささか自虐趣味かも知れないが、彼の厳しい言葉が僕にとっては何にも代え難い心の糧となっていた。60年少々の短い人生を早々に閉じて、沼津、千本浜の松林に囲まれ安らかに眠る彼、毎年11月には彼の墓碑を訪ねてその前で手を合わせるのが僕にとって最大の心の安らぎとなっている。

西高卓球部の仲間との思い出

私は中、高、大の10年間卓球部で過ごしました。当時卓球は根暗な運動とからかい半分に言われていて、今日卓球がメジャー・スポーツとして扱われるなど、全く想像もしていませんでした。但し、昭和29年入学の9期生としてすごした高校時代は、29年に荻村さんが世界チャンピオンになられ、卓球部に在籍することを誇らしく感じたりもしました。同学年の部員は、キャプテンの内山、服部、鬼塚の諸氏。一学年上の8期には浜田さん、村田さん、遠藤さん、久米さん、一期下の10期には城川、大橋、柴野、矢波、木原などの諸氏がおられました。城川さんがいつも鉢巻をしていたのを覚えています。

当時は足腰を鍛えるためにウサギ飛びをやり、練習中は水を飲むのはご法度、バック・サイドも出来るだけ回り込んでフォアで打てと言われた時代でした。

練習はフォア、バック・サイドのラリー、フット・ワークの練習、など一通り行った後、試合形式の練習ということルーティンの様にやっていて、今思うと練習に工夫がなかったような気がします。

【部誌】が存在していて、部員間の練習試合も含めて試合の記録や戦略や技術的な問題点とその対策等、たまには部員の態度に関する事が書かれていることもありました。

我々9期生の時代には誇れるような実績もなく、記憶に残っているのは、早々と試合に負けて、会場の千住の体育館から帰りの駅までの道がとてつもなく遠くに感じた事です。

しかし、今になって見ると卓球に10年かかわったことで、大勢の方と知り合うことが出来ましたし、このために豊かな人生の後半を送ることができていると感謝し

ています。

西高OBの「卓球をやろう会」の恒例の新年会に、市川先輩にお誘いを受け、この5・6年夜の部に出席させて頂いています。卓球部誌でしかお名前を知らなかったLEGENDの様な先輩方にお目にかかり、又大勢の後輩の方々にも出会い、改めて創部70年の歴史の重みを感じました。その中の何人かの方が直接日本卓球の指導者として今日の隆盛の基を築かれたこともこの夜の部会で知りました。

卓球を通しての色々な方がたとの出会いで、今でも忘れることの出来ない方の一人が、早く亡くなられた先輩の浜田泰行さんです。浜田さんとは小、中、高、大と同じ学校の卒業です。私立の一貫校ならともかく、公立学校、しかも同じ体育部では珍しいのではないのでしょうか。浜田さんのお付き合いは社会人となっても続きました。浜田さんは大手鉄鋼会社の日新製鋼に入社され、2年遅れて私は商事会社に就職、鉄鋼の貿易関係の部署に配属され、今度は仕事を通して日常的に顔を合わすようになりました。更に日新製鋼が米国に合弁会社を立ち上げ、浜田さんがその会社の責任者として赴任された時に、私も米国に駐在をしていましたので、米国での再会となりました。

このようなお付き合いは、浜田さんが日新製鋼の社長となられてからも続いて、色々貴重なアドバイスを頂くなど大変お世話になっていたのですが、志半ばに亡くなられてしまいました。本当に残念です。正しく、『cool headed, warm hearted』と言う表現そのものの様な先輩でした。浜田さんは今でもお会いしたいと思う方の一人です。

西高卓球部の思い出

先日、高尾さん（12期）から投稿依頼のお電話をいただき、一気に61年前の西高卓球部在籍時代にタイムスリップしました。思い返すと西高卓球部の思い出が西高の思い出とほぼ重なります。私は昭和30年4月入学前、3月の春休みから卓球部の練習に参加していました。西高卓球部在籍していた4歳年上の兄、英雄（6期）から卓球部の活動状況、中でも荻村さんの話を繰り返し聞かされました。同期の内田さん、沼口さんとは家も近かったので、学校の行き帰りや卓球の練習などいつも一緒でした。兄の時代には荻村さんが頻繁に来校して、練習と体力強化訓練を相当厳しく指導されていました。その結果、東京都の団体戦、個人戦ではベスト4～8位の強豪校に仲間入りし、昭和28年の全日本ジュニア選手権大会には加々美さんが東京都代表に選ばれました。大晦日も元旦も練習に熱中している様子を見て、これは面白そうだ、なんとか卓球部に入りたいと考えていたので、フライング気味の入部となりました。

荻村さんは昭和28年に全日本選手権大会で優勝、翌昭和29年4月、ロンドンで開催された世界選手権大会で個人優勝し、新聞などで大きく報道されるなど、まさに雲の上の人が西高卓球部を指導されることにもあがれました。

そうはいつても、中学生時代に卓球経験が殆どなかった怖いもの知らずの初心者がいきなり練習に参加してきたので、9期の内山部長、森さん、服部さん、8期の浜田さん、村田さん、遠藤さん、久米さんなど皆さんは随分と面食らわれたことと思いますが、練習の最初から親切に教えていただきました。

10期の入部者は当初は多かったものの、夏休みが始まるころには、男子では大橋、鎌田、柴野、矢波、酒井、木原、女子では林、津々良に絞られて、2年2学期までの部活動を続けることができました。ただ、ほぼ全員が初心者レベルからのスタートだったので、教える方も教わる方も大変でしたが、卓球大好き人間が集まり、ほぼ

毎日（週7日）の練習には多数が熱心に参加しました。

練習が休みの日には、有志で山中湖、奥多摩湖、秋川などへ自転車で遠出したことも楽しい思い出です。

兄の時代にはオールフォアのドライブ練習に加えて、荻村さんが勧めるうさぎ跳び、ランニングなどの体力強化などの猛訓練のため、1か月もしないうちに運動靴の底に穴が開いて母親がよくこぼしていました。我々の頃は体力強化訓練は、当時、車が殆ど走っていない水道道路で、毎日練習の終わりに往復2km位のランニング程度でした。

先輩方が連日熱心に指導してくれましたが、残念ながら対外試合の成績は一向に振るわず、申し訳なく思っていました。特記すべき戦績はありません。

個人的なハイライトは、ほんの短時間でしたが、荻村さんから直接ご指導いただいたことです。1年生の夏休み練習中に、荻村さんが見えて、バックハンドのショートを練習後、バックハンドのラケットの握り方を解説して、さらに荻村さんが私の右手の上に手を重ねて掴んで数本ショートの実習をした時の感触が、本原稿を書いているときについ昨日の出来事のように蘇りました。その際に、荻村さんの有名なラケットもじっくり見させていただきましたが、指の形、動きに合わせて、ラケットのグリップも表裏もきれいに、精密にチューニングされていることが良くわかりました。

もう一つのハイライトは卓球部長を務めていた昭和31年4月に、東京都体育館で開催された世界選手権大会での荻村さんの優勝の場に居合わせたことです。

卒業後は西高卓球部の活動から遠ざかっていましたが、10数年前に三鷹の大黒屋で開催された正月の卓球やろう会に数回参加して、楽しく過ごさせていただきました。最近の西高卓球部は有力選手も多く、活動もますます盛んな様子を見聞きしております。今後の一層のご発展を祈念いたします。

西高卓球部の思い出

私が西高に入学したのは今から60年前の1956年で、この頃の日本卓球は、世界卓球選手権男子団体3連覇、男子個人戦4連覇中で、まさに全盛期真っ只中でした。その日本代表の第一人者が我らの先輩荻村伊智郎選手でした。中学時代は野球をやっており、西高入学式当日と一緒に戦った他中学のエースと会った際に一緒に野球部に入ろうと声をかけられたのですが、迷わず部活動に卓球を選びました。

当初の新入部員は90名を超える人数でしたが、練習に参加しても卓球台に向かえる時間はほんの僅かで、練習時間の殆んどが基礎体力強化の体操、ランニング、ウサギ飛び、壁を前にしての素振りなどに費やされました。このような状況下だんだんと新入部員が減り始め、夏休みの練習に真面目に参加したのは、後に団体戦のレギュラーメンバーになった男女合計10名程度でした。男子メンバーのうち、小長谷君、菊池君、黒川君の3名はカット主体のシェイクハンド、大塚君は西高伝統のショートマン、私は攻撃型のペンホルダーでした。団体戦のダブルスは変則的でしたが小長谷―高村で対応しました。女子メンバーは谷さん、比護さん、山本さんなど皆さんペンホルダーであったと記憶しています。当時進学校として有名となってきた西高で、メンバー全員文武両道の精神で部活動を頑張っていました。

一学年の新人戦で予想以上に勝ち進むことができたためか、翌年の春にキャプテンに指名されてしまいました。先輩から受け継いだ東京都団体戦8位以内、悪くても16位以内の確保は私にとって一番の重荷でしたが、何とか後輩にバトンを渡すことができました。また、杉並区民大会での思い出ですが、この団体戦は一つの会場に集まって行うのではなく、勝ち残った対戦高校が互いに連絡を取り合ってどちらかの高校で試合を行うという方式でした。準決勝で強豪国学院大付属高校に3-2と競

り勝ち、決勝戦は当時東京都で最強の中大付属杉並高校でした。会場は西高体育館ということで準備を進めたのですが、試合当日が西高記念祭と重なっていました。顧問の藤崎先生の許可は得ていたものの記念祭責任者の先生の許可を取り忘れ、相手チームが来てくれたにもかかわらず試合を行うことができずに不戦敗となりました。キャプテンとして相手チームと我がチームメイトに申し訳なく、未だにこの不祥事は忘れることができません。

卓球部在部中に荻村先輩に何度かお越しいただきコーチを受けました。絶頂期の世界チャンピオンにラリーをしていただいたことは私の一生の良き思い出です。ある時、田んぼの畦道でランニング後、二人ずつ背中合わせで腕を組み、片方が背負いウサギ飛びをするよう指示を受けました。我々は皆一度か二度で潰れてしまいましたが、先輩は楽々と何回も続けられました。強靱な筋肉と体力があってこそそのあの軽快なフットワークと俊敏さであったと思います。また、田中利明世界チャンピオンをご同伴され、西高体育館で模範試合をしていただきました。田中選手の世界に名だたる強打とオールラウンドプレイヤーの荻村先輩のミスのない粘り、数多くの観客が驚きと共に大満足した長いラリー、きちんと21-19、19-21の引き分けで終わられたことも世界チャンピオンお二人の技の内であったのでしょう。

大学時代は理系で実験実習が多く卓球はできませんでしたが、卒業して就職した会社の埼玉県の同じ部署に県の国体卓球代表として活躍された先輩がおられ、20代半ばからまた卓球を始めました。県南部の団体戦や戸田市、川口市の個人戦、団体戦で優勝の経験をさせてもらったのは高校時代に無我夢中になって卓球に没頭できたお陰と感謝しています。

末筆ながら西高卓球部のますますのご発展を祈念いたしております。

卓友

2015年8月15日、日本の70年目の終戦記念日、靖国に行きました。西高卓球部が共に歩んだ戦後70年に思いを馳せ、猛暑の中、長蛇の列に並んで参拝しました。

私は1957年(昭和32年)の西高入学です。入学当初の教室の黒板に書かれてあった「卓球部新入部員募集、体育館に来られたし！」につられて見学に行ったのが最初です。(もちろん、当時すでに世界チャンピオンになっておられた荻村さんの事は心の中にありました。)それまで私は町の卓球場で遊んだことしかありませんでしたので、上級生の本格的な練習風景には気圧されましたばかりか、その中で二人の新入生が一緒になって華麗に打ち合っているのを見てさらに気後れしました。後の12期主将隅田と川久保(2014年没)です。

気を取り直して入部しました。初めに戸惑ったのは男子の上級生を「〇〇さん」と呼ぶことでした。中学時代、それは女生徒への呼称でしたから。でもそれはすぐ慣れました。そして、荻村さんをととても誇らしい気持ちで「荻村さん」と呼びすることも。

たくさんの新入部員がいましたね。その中に凄い女子がいました。完成されたフォームから繰り出される鋭い打球を初めて見たときは目を見張りました。さらに分かった事です、彼女は卓球のほかに学習面でも優秀で、実力テスト成績優秀者50人の常連さんにとどまらず、上位10番にも名を連ねるまさに才色を兼ね備えた人、上野淑子でした。私など尻込みするだけでしたが、無謀にもそんな彼女を好きになってしまう者がいました。そいつは今でも酔うと「酒と泪と男と女」を背中歌いながら当時を振り返り、その種の事を口にします。

最後まで部に残ったのは前述3人の他に、実力者佐野、ショートマン斉木、スマッシュ堀川(そいつ)、プー伊藤そして私です。この8人は長じてからもゴルフや食事会と交流を欠かしません。残念ながら2014年に一人亡くしましたが、最近では毎年4月の観桜会を恒例にしております。今年(2016年)もさくらの頃、われわれ7人は亡き川久保が眠る霊園に令夫人と一緒に墓参りしました。この会はきっとこれからも長く続くことでしょう。

同級生には功利も損得もありません。社会的な上下関

係も存在しません。そんな私たち12期生は今年(2016年)後期高齢者になります。来し方を振り返りますと一見どうでもよさそうなこの仲良しが、各自の家庭や実生活にもたらした貴重な知恵とその恩沢は計り知れません。本稿のタイトルを「卓球」から「卓友」にしたのはそんな訳です。

話変わりますが、40期の高尾健一は私の長男です。親子での西高卓球部は珍しいかなと思って報告します。彼も荻村さんと面識があったそうで、浪人時代にK塾に通っていた頃、千駄ヶ谷駅付近でお会いした折りに「がんばれ」と励まして頂いたそうです。1994年12月、荻村さんとのお別れの日の護国寺、私ども親子はそろってお見送りしました。



昭和33年(1958年)12期の皆さんが2年生の時(後列左より)蔵多 淑子(旧姓:上野)、高尾 弘、隅田 献、川久保 洋(前列左より)佐野 健一、斉木 篤、伊藤 英徳、堀川 靖晃



2013年 新宿御苑 12期 同期会 観桜会
車椅子の川久保(2014年没)との最後の集合写真です(2013年4月)

桐のラケット

それは、桐のラケットから始まりました。

昭和20年代中ごろ、まだ戦争の匂いの残る中、父が突然お土産と言って、ピンポンボール1個と桐の板のラケット2枚を渡してくれました。もちろん、それにはラバーも貼ってなければ、コルクもないものでした。

当時はおもちゃなんかほとんどなく、さっそく机を並べてピンポン玉を打ち始めました。初めてなのでうまくゆくはずもなく、すぐに球はあらぬ方向に飛んで行ってしまのですが、それもまたおもしろく、何度も何度も飽きずに遊んでいました。

私の卓球人生の始まりでした。小学校を卒業するまでは、そのラケットで遊んでいました。

中学生になり、さっそく卓球部に入り初めてラバーの貼ってあるラケットを買ってもらい、学校が終わると卓球場に寄ってから帰るのが日課となりました。高校(もちろん西高)、大学、社会人、そして会社を引退してからも、弱いながらも続けておりました。

卓球をやっている何が良かったかと言えば、年も、性別も、地位も、身分も、地域も関係なく、人との繋がりが出来、人の輪が広がったことです。

学校のチームメイト、社会人の仲間、地域の仲間、そして対戦相手、またその応援団と、どんどんその輪が広がって行きました。

ある時、こんなこともありました。群馬県のある村の長年続いている卓球大会(団体戦)に飛び入りで出場したときには「勝ってはだめ。楽しんでくるんだよ」と言っていたのが、いざ試合になると熱くなってしまい、ついには優勝してしまいました。村長さんには冷やかされるし、後始末が大変でしたが、そのかわり友達がたくさんできました。

また会社を引退してからも、地域の人に溶け込むこともできました。

桐のラケットから始まり「卓球が好きだ」「卓球をやりたい」その一念で続けてきて60数年。よき友達・仲間恵まれ、今も人生を楽しんでおります。

追: 中学時代毎日のように通った卓球場が「武蔵野卓球場」で、大先輩の荻村さんが根城にしていたことは、後から知りました。上原のおばちゃんには大変お世話になりました。西高の受験に受かった時に「へえ、西高に受かったの、おめでとう」と言ってくれたお兄さんがいました。嬉しかったことを覚えております。後になってから上原のおばちゃんが「あのお兄さんは西高の卓球部の先輩だよ」と教えてくれました。そんなこともあった思い出の卓球場でした。



卓球に熱中したあの頃

私は熊本市の熊大付属中学で卓球を始め、熊本高校に進学したが、1年の夏休みに転入試験を受け、2学期から西高に通うことになった。田舎から大都会に来てしまっただけで友達も無く不安であったが卓球という技能があったので早速卓球部に入れてもらった。幸い先輩も同輩もいい人たちが暖かく迎えてもらい、いじめられることなく楽しく活動することができたことを今でも感謝している。これは西高全体の校風なのだろうが、有数の進学校でありながらぎすぎすしたところがなく全体として自由闊達な雰囲気を保っていることに感銘を受けたものである。

その当時は本当に卓球が好きで毎日やっても飽きることはなかった。今振り返って考えてみると卓球の練習と言うのは他の球技に比べて独特のものがあるように思われる。例えばフォワードハンドのラリーであれば同じリズムで同じフォームで何百球も打ち合う訳であるが、上手くなればボールの落ちる位置の誤差は少なくなり何時間でも同じ形で打ち合うことが可能になる。これは何を練習しているのかといえば、無意識でも正確にボールを打てるように体にリズムやフォームを覚えこませているのである。それが身についてくると選手は一定のリズムで、ボールを打つという意識無しにラリーを無限に続けられるような気分になる。その没入状態は「ピンポンハイ」と呼んでもいいような気分でありそれが自分が卓球の虜になった理由だったかもしれないと思うのである。その後、バドミントンもやりテニスもやったが練習でそのようなハイな没入気分を味わうことはなく、卓球独特の魅力を改めて感じるのである。

転校する前は世界チャンピオンの荻村伊智朗さんが西高の先輩であることは知らなかったが、ある時荻村さんが指導にきてくれてラリーの相手をしてもらった。厚いスポンジのラバーから繰り出されるボールは弾んでからぐんぐん伸びてきて対応するのに苦労したが、これが世界レベルの球かと大きな刺激を受けたことを思い出す。

在学時が丁度「60年安保闘争」と重なっており、同級生も結構デモに参加していた。西高に入ったときに男女生徒が手を取り合ってフォークダンスをやるのにも驚いたが、この時は東京の高校生は政治的意見を持ちデモにも参加するのか、とさらに驚いたことを記憶している。

卓球部在籍時に特筆するような実績があったかどうかについては残念ながら思い出せない。同期には結構多くの部員がいたが、キャプテンはシェイクハンドの池野直志（故人）、私とダブルスを組んだのが御子柴雄二（最近卓球を再開しているとのこと）、中でも小川敏夫は卒業後も教師としてずっと卓球に関わり、現在は東京都卓球連盟の理事長という要職にあるので現在も日本の卓球界に大きく貢献しているといえる。他には柿谷宗敏、国分光輝、西山雅隆、渡辺貢、佐藤良樹、徳田紘司などがいて、女子には田中絢子、角倉啓子（故人）、軽部愷子などがいた。

私自身は大学まで熱心に卓球をやったが卒業後は他のスポーツに移り、現在はテニスを中心である。近年、西高OB会に誘われて年に1度卓球のプレーするようになったが、OB仲間とプレーする楽しさに目覚めつつある。70周年を機会にまた多くの人と卓球で交流できるようになりたいと思っている。

私の卓球人生

昭和30年代の日本は今のように豊かではありませんでしたが、中学校卓球部に所属した私に、世界卓球選手権日本代表の壮行試合の観戦の機会がありました。日本を代表する一流選手の迫力あるプレーを目の当たりにし、初心者であった私は大きな衝撃を受けました。

進学した西高では、当時卓球部は体育館をバスケットボール部や剣道部と同時に使用、ボールの音がほとんど聞こえない中での練習でしたが、女子部員が少なかったこともあって、先輩たちがよく練習してくださいました。インターハイ予選や都立大会などにも参加しましたが、都立大会の団体戦での優勝以外これといった成績も残すこともなく、高2の秋には引退。西高ではどの部もこの時期から受験勉強に入るのが一般的でしたから、何の疑問も持たず、卓球から離れても特にストレスを感じることなく勉強の日々を過ごしました。

早稲田大学入学後、毎日の練習や大会での思い出は数多くありますが、夏休みに早大監督の森先生の助手として新宿区夏休み小学生卓球教室のお手伝いをさせてもらったことは忘れられません。卓球経験のない子供たちが、最後はラリーや試合を楽しめるようになるのです。企画した方や学校関係者も素晴らしかったのですが、森先生の指導と子供たちの笑顔が強く私の心に刻まれた時でした。このことも今の活動の原点になっています。

当時世界チャンピオンになられた荻村さんが10月の記念祭に来校され、華麗なるプレーを見せてくださいました。その時は卓球部の一員として観戦し、全体でお話を伺うだけでしたが、早大入学後は関東学生1、2部リーグの大学で卓球を続けている西高卒業生が私以外にいなかったこともあって、全日本学生卓球選手権大会の際などには“元気にやってる？”などと声をかけてくださり、雲の上のような存在であった方が、多少なりとも気にかけてくださっているということだけで大きな励みになりました。

その後、西高卓球部OBのオーバーフォーティーの会に参加するようになってからは、親しくお話する機会も増えました。当時荻村さんは世界卓球連盟会長として多忙を極める中でも、西高OBとのつながりを大切にされ、スポーツでの国際交流をという熱い思いを語られま

した。日中国交回復前の日中卓球交歓会の開催やピンポン外交で知られる米中の国交樹立、1991年世界選手権幕張大会での韓国と北朝鮮の統一コリアチームの実現など卓球を通じて世界の平和に尽力され、幅広く活躍されていました。荻村さんの世界観、卓球に対する姿勢を強く意識した時でした。

そんな中、1980年に調布市への転居をきっかけに、1982年つつじヶ丘スポーツ少年団を設立、活動を開始しました。地域の大会から東京の大会に参加するようになって西高卓球部OB会会長の田中先生が長年東京都卓球連盟の役員をされていることを知りました。それから大会のたびにお会いし、いろいろお話を伺うことができ、励ましをいただき今日に至ります。

近年は小中学生の卓球環境も大きく変化してきています。豊富な練習量を誇るクラブや個人コーチの元で力をつけている選手などに、追い付けないのではと思うことも正直あります。しかし、目標が違っても一緒に卓球を楽しみ、お互いの成長を喜び、私たち大人もその活動を支援して、少なくとも地域に根差した底辺拡大には貢献しているかなと自負しています。この活動を荻村さんの精神が受け継がれていると言ってくださった西高OBがいました。来る者拒まず、数々の出会いを大切に、与えられた環境で最善を尽くす、等々知らず知らずのうちに受け継いできたのかもしれない。

自分を振り返る時間もないまま過ごしてきましたが、西高卓球部70周年の原稿を書く機会をいただき感謝しています。考えてみれば選手時代以上の人生の半分近くをこの活動とともに歩んできました。西高での3年間、早稲田大学での4年間その後の何十年、いろいろな方々との出会いがあり、力添えがあって今の自分があるということに改めて感じています。これまでご支援ご協力いただきました方々に感謝しつつ、これからも出会いを大切にしながら歩んでいきたいと思っています。



つつじヶ丘スポーツ少年団創立30周年記念大会祝賀会

西高卓球部第二部の記

30年ほど前から毎週木曜日の夕方、三鷹にある荻村さんの卓球場「ITS」に、2期の田中さん5期の斎藤さん他数人の西高卓球部OBが集まり卓球をしている。早い人は6時頃からサーブやマシンで練習し、6時半頃には全員集合、個別練習の後ダブルスのゲームをして、8時半頃からラウンジでビールを飲んで雑談、写真を撮って散会する。

この会は40歳以上を要件として始まったが後輩の参加はなく、小生はずっと一番若い最下級生である。交通の便や地方勤務の関係で初めは殆ど行けなかったが、退役後は参加の機会が増えた。ボールを打つと無心になり諸々の悩みから解放されるし、一回りも歳の違う先輩達だが連帯感があって、共通の価値観人生観で組み立てられた非常に楽しい会である。

何人かはペンホルダーをシェークに変えた。高齢でラケットの変更は大胆とは思いますが、先輩達のチャレンジ精神は半端ではなく、白髪の老人が鏡の前でフォームを確認する姿は圧巻であったし、全日本卓球選手権などを観戦した後には新しいことに挑戦する人がいた。荻村さんも「技の工夫」を言っておられたが、意欲と熱意を持つ生き方は西高卓球部のメンタリティかもしれない。

シェークハンドでカットボールを打つのは田中さん一人しかなく、他のメンバーは時間を区切って順番にカット打ちを練習する。卓球を続けている人は昔のことなど考えないだろうが、20年のブランクがあると在校間の卓球と比較する。カットを打ちながら、昔はもっと打てたはずだ、もっと鋭く返せたはずだ、など考えてしまう。若い頃の自分との格闘だが、なに、本当は昔だってそんなに打てなかったのかもしれないのに。

小生はペンホルダーを変えなかった。在校中に多少打てたバックハンドが何とかかなりそうだったからで、斎藤

さんの「フォアバックをやろう」との一言により、斎藤さんのバックのショートに対しフォアのストレートとバックのクロスを交互に打つという練習が始まった。少しづつ上達し、台に近づいたり離れたり、更に台上で返すなどかなり自由にバックハンドが打てるようになったが、これは全く斎藤さんの示唆と彼女の正確な返球で得られたものである。

カット打ちでは「昔はできたはず」と考えたが、バックハンドでは「今できることがなぜ昔はできなかったのか」との疑問がわいた。練習に熱意が欠けていたか、そんなことはない、寒い冬同級生と二人で早朝練習を続けたこともある。練習のやり方がうまくなかったのか、そうなのだ。西高在校間は、初心者でもあり概ね他人に言われたことをやり、思いつきで練習していたように思う。今回のバックハンドの練習では斎藤さんの示唆とサポートと励ましを得て主体的に練習ができた。在校間とは練習のやり方が進歩変化したのだ。これがITSで確認できたことであった。

木曜日のITSではOBが集まって昔の卓球していたのではない。40ミリボール、11ポイント制、プラスチックボールなどの変化を取り入れた。しかしチームで大会などに参加することはなかった。もし外部と試合をしていたならば、シェークへの挑戦はなかったかもしれない。そこでは、西高卓球部にいた人達がなお各々の卓球を追求する、いわば西高卓球部第二部であったのだ。小生には、多少なりとも卓球が上達し、人生を顧みる機会でもあったのである。実は小生、事情があり昨年8月以来三鷹に行っていない。30年の間には、ITSに来られなくなった方もあるし、荻村さんをはじめ亡くなられた方もいる。仕方のないことだ。卓球も西高卓球部もそれぞれの人生の一部なのだ。

私と卓球

私が初めて卓球のラケットを握ったのは、小学校の5年生の頃でした。近くに武蔵野卓球会館というラケットとボールを貸してくれて、1時間30円で卓球をやらせてくれる施設があり、同じクラスの石田君に連れて行ってもらったのが始まりでした。石田君は家族でよく遊びに来ていたということで、私を連れて行ってくれたのですが、いい音をたてて弾んだ球がコートにたまたま入った時の楽しさに、いつしかはまってしまったのを覚えています。

武蔵野第一中学校に入学しましたが、中学校に入ると卓球部があるということで、迷いなく卓球部へ入部しました。当時世界を制覇した荻村さんの使っていたというスポンジラバーでの卓球に挑戦、教室の机を片付けては、卓球台を運んで、仲間と11本勝負の勝ち抜き戦をやっていた記憶が残っています。教えてくれる人もいない中でとにかく仲間とわーわーやっていたことが多かったと思いますが、暇があると武蔵野卓球会館に行って、椅子を相手にサーブ練習をしたり、上手な大人の人が来ると、練習をしてもらったりしていました。大晦日もお正月も開けてくれていた卓球場で新年を迎えるのが当たり前になった頃、武蔵野市の中学生大会で優勝したり、東京都の大会で上位に進んだりできるようになり、卓球が中心の毎日になっていきました。卓球場で知り合った1年先輩に、近くの中学で武蔵野市のトップだった第三中の西島さんがいて、当時、難関とされた名門校の西高に進学されたと聞きました。その後いつしか、西高に行けたらいいなと思うようになった気がします。私の武蔵野第一中も、国立高校時代に国体代表になって、外語大へ進んだ先輩の杉本選手が時折、指導に来てくれる素晴らしい環境でしたが、本気になって卓球をやりたいと思わせてくれたのは武蔵野卓球会館で知り合った岩崎通信や武蔵野美術大学の選手の人たちでした。

運よく西高に入学できると分かった時に、西島さんが、西高の練習に連れて行ってくれました。最初におーいやろうと声をかけてくれたのが、やっぱり希望した大学に入学が決まったということで西高に練習に来ていた中林さん、同じペンホルダーでしたが、懐の深いロングが

上手で、何をやっても流されて一蹴された記憶があります。他にいろいろな人に試合をしてもらいましたが、こんなに卓球が上手な人が大勢いる高校に来られてよかったと思って帰ったのを覚えています。残念ながら、か、幸せなことにか、すってんてんにしてくれた中林さん以外の人との対決の記憶は残っていません。

西高の卓球部に入ってびっくりです、東京都で団体戦準優勝の阿佐ヶ谷中学のメンバー、村上君と渡辺君がいました。他に、中学校で卓球してたという安東君、吉田君、田中君、野崎君と大勢の同期生達、いきなり1年生チームで10都立で団体優勝、ダブルスは中村・渡辺組が優勝、混合は中村・高村組が優勝、シングルスで中村準優勝のスタート、2年生の皆さんには、出番を奪ってしまって、結果的にはご迷惑をおかけしてしまいました。

とはいえ私は西高に入って、高校の卓球に歓迎されたスタートが切れたと思っています。

今でも、国公立の大会では西高が大活躍とのこと、とてもうれしいお話を顧問の先生からお聞きして応援したい気持ちで一杯です。

先輩たちが東京都で団体戦優勝したという歴史を知って挑戦した東京都の新人大会の団体戦、残念ながらベスト8、優勝した関東商高(今の関東一高)と2-3の大接戦、もし、オーダー間違えなければ、歴史が変わっていたはず、という悪夢、まだ続いています。

私は、同期のみんなが受験勉強で練習から去る中、高校三年の秋の国体予選まで部活動をして高校の試合に出ていました。お前は大学に行くつもりがないのか?と体育の先生が心配して、体育館にいと声をかけてくれました。例年2年生の秋で引退、新しい2年生が部長になります。やめない元部長が練習にいて、みんなは部長、大部長と使い分けていました。17期の皆さんには迷惑かけたかも知れないと今、思います。おかげでいくつかの大学から無試験で入学して卓球をしないかというお誘いも受けることができました。

進学は卓球でと思って秋から受験勉強を始めました。慶応大学は当時体育会推薦ありで12期の先輩の隅田さんがお世話してくれました、おかげで商学部合格、東京

教育大学は13期の小川さんのお世話で、数学で受験、学科選択は荻村さんの助言でした。卓球やりたければ、文科系に行け、理科系は避ける、で文系に近い実験のない数学を受験しました。慶応も教育大も当時は関東学生卓球リーグの2部、どちらかに行きたかったというのが本音です、結果は両方合格、月謝が安い国立を選択することになりました。東京教育大学理学部数学科というよりは教育大卓球部に進学した気持ちでした。この偶然の選択が私の生涯のパートナーとの出会いになりました。もし、慶応を選んでいたら、どんな人生になっていたのでしょうか？やりなおせるなら、やり直してみたいと思うこともあります(笑)。

入学当初からいきなりリーグ戦でシングルスとダブルスに抜擢され、高校生の卓球のイメージの中で大学生と対戦、パワーと技術にびっくりさせられました。シングルス1勝、ダブルス1勝、あとは全部負け、貢献度ゼロ、ここで今までの卓球のすべてを捨てて大学の卓球という、新しいスタートが切れればよかったのにと50年たって気が付くとは、なんとまあ浅はかな自分なのかと反省です。

大学では毎日卓球、終わった後は先輩と麻雀、授業は単位を取りに行くだけ、あっという間の4年間でした。春と秋のリーグ戦で8回のうち5回が入れ替え戦、2部に残れば大成功、3部に落ちたら、2部に上がる、大学に入ったときは2部でした、そこで最下位、3部に落ちて秋に上がって2部になって、又、落ちて、又、上がって、リーグ戦以外に入れ替え戦の試合があるのでたぶん教育大か筑波大から一番試合で頑張ったで賞ももらえるかも知れません。大学時代の関東リーグの出場試合数はたぶん私が歴史上一番多いと思います。

そして、大学を出て就職しました。最先端のコンピューターの会社でした。日本ユニバックです。今は日本ユニシスに名前が変わっています。この会社の卓球部、私がお友達と一緒に作りました。今も、東卓のリーグに参加しています。日本ユニシスはバドミントンで有名ですが、このバドミントン部も私が立ち上げをお世話しました。私が筑波大学の体育会卓球部の監督をしていた時に、会

社で実業団バドミントン部を立ち上げる話が出ました。次期オリンピックのバルセロナでバドミントンが正式種目に採用されたのと、パロースとユニバックが合併してユニシスが誕生したのがきっかけになりました。平成が始まった年です。実業団が持てる会社になったら是非バドミントン部を作りたいと考えていた社員の提案でした。会社にはスポーツに詳しい人がいなかったこともあり、親しかった人事部長から提案書を見てほしいとの依頼があり、私は、やめた方がいいと、助言しました。外資系の会社で数年ごとに社長が入れ替わり、変わるたびに、方針が180度変わる会社の実業団活動はそぐわないと思ったからです。日本の財産ともいえる選手の皆さんを預かって、育てていくのは、とても決意のいることで、継続性が必要とお話ししました。しばらくすると、人事担当役員のご判断で、選手を3名採用したのだが、会社としてどうしていいかわからない、助けてほしいと、人事部長から相談がありました。私としては、おやめなさいと言ったのに、はありましたが、バドミントン部長を引き受けることになりました。役員会での実業団活動の承認、予算の申請、監督、コーチの人選と勧誘等で本業のプロジェクト管理の仕事が影響を受けなかったといえは嘘になります。10年間通った筑波大学の医学部のコーチや体育会卓球部の監督とも決別せざるを得ない状況でした。以来27年の月日がたち、バドミントン部の部長から後援会の幹事と立場は変わりながらユニシスのバドミントンを応援することになりました。そのかいもあって、2014年には男子のトーマス杯の日本初優勝、女子のユーパー杯の銀メダルの主力メンバーたちをユニシスから送り出せるまでになりました。2015年にはスデイルマンカップ(男女混合の団体戦)で世界2位に輝いたメンバーにもユニシスの選手たちが大勢輝いていました。そして、2016年、リオのオリンピックのバドミントンの代表選手9名のうち7名を日本ユニシスから送り出し、日本バドミントン界初の金メダルまで獲得してくれました。これも卓球のおかげです。老後の楽しみがひとつ増えました。卓球に感謝、感謝の毎日です。

西高卓球部の思い出

私が西高に入学して卓球部に入った理由としては、何かスポーツをと考え、また偶々、兄が高校時代に卓球をやっていたことが影響していたような気がする。兄は私立高校でかなり厳しい運動部活動をしていて、当時家にあった卓球台で遊ぶような時は、桁違いに強かったと記憶している。一方、当時の西高は勉強だけの進学校とのイメージであり、母親などは、「勉強に差し障りないように、卓球ぐらいならば」と思っていたのかもしれない。とは言え、中学時代にクラブ活動を経験していないものにとっては、高校の運動部はと、当初、かなり緊張したのを覚えている。実際入部してみると、恐い(恐そうな)先輩は居るし、先輩OBにはあの有名な「荻村さん」が居るということも判明してやはり緊張して臨んだものであった。

入部すると、早速恐そうな先輩が卓球部の伝統の準備体操はこれだと言って、独特の体操を教えてくれた。確か週二回のクラブ活動で一番きつのが井の頭公園へのランニングであったが、これも今考えるとさほどのものでは無かったような気がする。

同期の部員は、高戸部長以下、木村さん、白井さん、菅原さん、根岸さん、浜部さんの男子と広瀬さん、大木さん、森さんの女子だった。

試合の成績はあまり芳しくなかった。特に男子は、年に何回かの外部での大会に出ても決勝戦などとは無縁で、一回勝てば大勝利で、朝早く家を出て直ぐ帰途に着くようなことが多かったように思う。これは、伝統ある卓球部として恥ずかしい代であったのかもしれない(合宿の時に見た先輩方にとっては、不甲斐ない現役であったかも)。

それでも、当時の私にとっては、合宿は厳しいもので、かなり体重も減り、筋力等の体力作りを行えたのだと思う。

そういった具合でめざましい活躍をする卓球部員ではなかったと思うが、校内での年に一度のクラス対抗の卓球試合では、やはり他の人たちよりは強く、「卓球部」を意識したのである。

男女共学校であったことから、コンパなどもたのしい

思い出で、長屋と呼ばれた部室に時間があれば出かけて、部員仲間との雑談に興じたりして、その時間を楽しんでいた(練習後に「目の出屋」と呼んでいた校門向かいの雑貨屋でアイス・キャンディを頬張るのも楽しかった)。

当時は、体育館を半分に使って、卓球の活動を行い、隣にはバスケットボール部と剣道部が時々活動を行っていた。卓球部の顧問をして居られた女性の古川先生(オキャン)が時々、短パンで練習に参加されていたことも懐かしく思い出される。

また、合宿の時、一度、有名な荻村さんのお姿を遠くから拝見したような気もする。3年位上の熱心な先輩が、時々指導に来てくれたりもした。

最近、西高卓球部は都大会に出場したり、国公立大会で団体優勝したり、大活躍されているとのうれしい噂も耳にする。益々の西高卓球部の発展を祈念しています。

西高卓球部70周年、おめでとうございました。



体育館写真(30年史より)

1948-1965 都立西高卓球部の歴史

		卓球部の出来事	卓球界の出来事	世の中の出来事
1948	1-3期	都立第十新制高校に卓球部 創部 2期 田中(2年生)初代キャプテンに。 3期生の荻村伊智朗氏をはじめ2年後の憲法大会の優勝メンバーが入部。 卓球台無し ラケットは木の手作りボールは貴重で割れば酢酸ビニールで修理しやりくりして練習、顧問に藤崎先生、川島先生		01.26 帝銀事件。行員12人毒殺 03.21 第1回NHKのど自慢始まる 05.01 10歳の美空ひばりデビュー 06.28 福井震災、死者3895人 07.29 第14回オリンピック・ロンドン大会開催。日本の参加は不許可 08.17 プロ野球初ナイター
1949	2-4期	新制高校への転入(平川、藤田)と旧制第十中学校からの進級(亀田、原田、甲子、久保田、加納他)で 4期生は12名が入部、2年生に3期生の荻村、市川他、3年生に2期生の田中さん(初代主将)で部員約20名		01.01 GHQ、国旗の掲揚を許可 01.01 大都市への転入抑制解除 01.01 家庭裁判所発足 01.26 法隆寺金堂が火災。壁画12面焼失 02.16 第三次吉田内閣成立
1950	3-5期	名称が東京都立西高等学校となる。都立西高の誕生 05.03 憲法施行記念都民体育大会卓球男子高等学校之部 決勝戦で小石川高校に3-2で勝って優勝 準決勝 西高3-1北園高校 4回戦 西高3-2高輪高校 3回戦 西高3-0巢鴨高校 2回戦 西高3-2武蔵丘高校 1回戦 西高3-0千才高校 5期生の入部 斉藤、荒瀬、吉武の女性部員と若山、1年休学で5期生に合流した久保田他計10名 3期 荻村伊智朗 関東高校選手権大会(横浜市)東京代表 ベスト16 東京都下選手権大会・少年の部優勝 一般の部3位		02.13 都教育庁、教員246人をレッドパージ。以後反対闘争激化 03.01 自由党結成 03.01 池田蔵相「中小企業の一部倒産やむなし」と発言、問題化 03.24 旧制高校最後の卒業式 04.13 熱海で大火。1461戸焼失 04.15 公職選挙法公布
1951	4-6期	6期生の入部 佐藤、沼口、内田(故)他計10名 荻村伊智朗 都立大に進 9月東京卓球連盟秋季新人戦男子単優勝 11月東京都下硬式選手権大会 男子単優勝 荻村伊智朗(決勝阿木選手)、少年の部 優勝 若山 望		01.03 第1回NHK紅白歌合戦放送 02.14 東京に猛吹雪。交通機関ストップ 03.04 第1回アジア競技大会、インドで開催。日本は5競技に参加 03.09 三原山大爆発(4.16再爆発)
1952	5-7期	7期生の入部 大石、加々美、河村、今野他計7名 3期 荻村伊智朗 6月全日本軟式選手権に初出場で優勝。(決勝中田選手) 全日本(硬式)予選で負け泣く(20歳)「笑いを忘れた日」		07.21 破壊防止法公布 08.01 新行政機構発足 08.28 衆議院抜き打ち解散 09.24 電産・電源スト開始(〜12.18) 10.01 第25回総選挙 10.13 炭労スト(〜12.18)
1953	6-8期	8期生の入部 村田、内山、浜田、遠藤他計7名 7期 加々美信光 関東選手権複代表および全日本ジュニアで東京都の代表選手になる 3期 荻村伊智朗 日本大学芸術学部映画科に転学 アジア選手権団体優勝(優勝の原動力の功績で読売新聞「日本スポーツ賞」受賞) 12月全日本に初出場で単(決勝田中)・複(山田)とも優勝・混合2位(関澄子)		01.04 秩父宮雍仁死去 02.01 NHK、東京地区でテレビ本放送開始(1日約4時間) 02.14 東京・府中で火薬工場爆発、死者21人 02.28 吉田首相、衆院予算委でバカヤローと暴言 12.31 NHK、紅白歌合戦放映(以後大晦日に)
1954	7-9期	9期生の入部 内山、森、鬼塚、服部他計5名 3期 荻村伊智朗 第21回世界選手権ロンドン大会に初出場。 団体(荻村・富田・田外・川井)と単(決勝フリスベルグ)に優勝 5月フランスオープン(パリ) 単(決勝シド)複(富田)優勝 7月台中市国際トーナメント 単(決勝田中)優勝 8月アキレス腱損傷6か月休養・速攻からオールラウンドに 11月〜12月スウェーデンの招きで単身渡欧。ユーゴ、西ドイツ、オーストリア、デンマーク、スウェーデンを転戦。 コペンハーゲン国際リーグ戦などで優勝 荻村の選手としての活動を支援する目的で、武蔵野卓球場に集まる有志で「青卓会」が設立される (会長 上原功三)	04.14 世界卓球選手権ウェンブレイ大会で、荻村伊智朗がフリスベリ(スウェーデン)を破って初優勝。 【日本選手決勝記録】 男子団体:日本5-4チェコスロバキア 女子団体:日本3-1ハンガリー 男子シングルス:荻村伊智朗3-1フリスベリ(スウェーデン) ※日本は54年以降の世界卓球選手権にて、25年連続世界タイトル獲得の快挙	02.01 ジョー・ディマジオ、マリリン・モンロー夫妻が来日 02.22 テレビ受信契約1万台突破 03.01 日本の遠洋マグロ漁船第五福竜丸が米国の水爆実験によって発生した多量の放射性降下物(いわゆる死の灰)を浴びる 04.05 初の集団就職列車(青森・上野間)が運行される 04.20 第1回全日本自動車ショー開催 09.26 洞爺丸事故 11.03 「ゴジラ」が公開される 11.24 日本民主党結成 12.22 プロレス初の日本選手権。力道山が木村破る
1955	8-10期	10期生の入部 荒川、大竹、木原、斉藤、城川他計15名 3期 荻村伊智朗 第22回世界選手権ユトレヒト大会 団体優勝(荻村・富田・田外・田中)複(富田)3位 都市対抗優勝・単複全勝 関東大学リーグ優勝・単複10戦全勝(監督・矢尾板氏 パートナー・笠原選手) 東日本学生選手権大会・単優勝(決勝・野平選手) 7期 斉藤有希子 全日本軟式卓球選手権で優勝	世界卓球選手権 ユトレヒト大会 【日本選手決勝記録】 男子団体:日本5-3チェコスロバキア 男子シングルス:田中利明3-0ドリナー(ユーゴ)	05.14 ワルシャワ条約機構結成、冷戦激化 08.24 森永ヒ素ミルク中毒事件が発覚 11.01 ユナイテッド航空629便爆破事件 12.13 日本の国際連合への加盟にソ連が拒否権を行使
1956	9-11期	11期生の入部 菊池、黒川、高村、長橋、比護他計11名 3期 荻村伊智朗 第23回世界選手権東京大会で団体三連勝(荻村・田中・富田・角田)単(決勝・田中利明)複(パートナー・富田芳雄)優勝 全日本選手権大会 複(田中利明)・混合(大川とみ)優勝 単3位 荻村伊智朗卒業作品「日本の卓球」イタリア国際スポーツ短編映画コンクールで銀賞 7期 斉藤有希子 全日本軟式卓球選手権で優勝 2連覇を飾る	02.02〜02.11 日本初の世界選手権「第23回世界選手権東京大会」開催。 世界20の国と地域から166人が参加。 男子シングルスで、優勝:荻村伊智朗、2位:田中利明、3位:野平明雄・富田芳雄と、日本人が表彰台を独占。 【日本選手決勝記録】 男子団体:日本5-1チェコスロバキア 男子シングルス:荻村伊智朗3-2田中利明 女子シングルス:大川とみ3-2渡辺妃生子 男子ダブルス:荻村伊智朗・富田芳雄	01.16 パルモア病院開院 01.19 東海道本線の全線電化 01.28 万国著作権条約公布(Cマーク) 01.31 猪谷千春スキー回転で五輪銀メダル 02.06 「週刊新潮」創刊 04.14 NHKテレビ人形劇「チロリン村とクルミの木」がスタート 07.01 気象庁、中央气象台から改称 09.13 IBMがハードディスクを開発 11.22 メルボルン五輪 12.02 水俣病と初めて認定 12.18 日本の国連加盟承認 12.28 新宿コマ劇場オープン・任命制教育委員会発足

1948-1965 都立西高卓球部の歴史

		卓球部の出来事	卓球界の出来事	世の中の出来事
1957	10-12期	12期生の入部 伊藤、上野、斉木、佐野、高尾、隅田、堀川他計12名 3期 荻村伊智朗 第24回世界選手権ストックホルム団体四連勝(荻村・田中・角田・宮田) 混合複(江口)優勝 単(決勝田中利明)2位・複(パートナー田中利明)2位	世界卓球選手権 ストックホルム大会 【日本選手決勝記録】 男子団体：日本 5-2 ハンガリー 女子団体：日本 3-0 ルーマニア 男子シングルス：田中利明 3-0 荻村伊智朗 女子シングルス：江口富士枝 3-2 ヘイドン (イングランド) 混合ダブルス：荻村伊智朗・江口富士枝	01.29 昭和基地設営 07.21 自然公園法制定(記念日) 10.01 聖徳太子肖像の五千円札発行 10.07 NHK朝のテレビ体操 11.04 「きょうの料理」放送開始 12.11 百円硬貨発行 12.17 上野動物園モノレール開業
1958	11-13期	13期生の入部 小川、国分、中林、御子柴、西山、渡辺他計15名 3期 荻村伊智朗 アジア競技大会(東京)混合(江口富士枝)優勝 団体2位 単3位	「第1回 ヨーロッパ選手権」が開催される。	02.24 国産映画第1号「月光仮面」 03.09 関門国道トンネル開通 06.24 阿蘇山、25年ぶり大爆発 08.25 日清食品「チキンラーメン」発売／国産ステレオレコード(ビクター) 11.01 東京大阪間こだま号運転開始 12.01 一万円札発行 12.23 東京タワー完工式 12.27 国民健康保険法公布
1959	12-14期	14期生の入部 新井、堀、中村、早田、加藤他計12名 3期 荻村伊智朗 第25回世界選手権ドルトムント大会 団体優勝(五連勝)(荻村・村上・星野・成田) 全日本軟式 単・混合(大川とみ)優勝全日本硬式単2位(決勝渋谷五郎)複(村上輝夫)、 混合複(江口富士枝)優勝 単3位 全英オープン 単・複(村上輝夫)優勝 12月招かれて約半年、スウェーデンでコーチ活動	0701 国際卓球連盟総会が用具制限案を可決。スポンジが禁止され、ソフトラバーは厚さ4ミリ以内、1枚ラバーは厚さ2ミリ以内となる。 世界選手権ドルトムント大会 男子団体：日本 5-1 ハンガリー 女子団体：日本 3-2 韓国 男子シングルス：田中利明 3-0 荻村伊智朗 女子シングルス：松崎キミ代 3-1 江口富士枝 男子ダブルス：荻村伊智朗・村上輝夫 女子ダブルス：難波多慧子・山泉和子 混合ダブルス：荻村伊智朗・江口富士枝	01.10 NHK教育テレビ開局 02.11 ザ・ビーナッツ、デビュー 03.01 フジテレビ開局 04.10 皇太子(今上天皇)御成婚 04.16 国民年金法 06.03 シンガポール独立 07.24 児島明子、ミスユニバース 08.21 ハワイが米国50番目の州に 10.05 「おかあさんといっしょ」放送開始 12.27 第1回レコード大賞
1960	13-15期	15期生の入部 木村、安田、塩谷、瀬井、高村、山田他計17名 3期 荻村伊智朗 全日本軟式 混合(大川とみ)優勝 全日本硬式 単2位(決勝・星野信彌) 第4回アジア選手権ボンベイ大会4冠王 団体(荻村・村上・星野・渋谷)単(決勝李国定)複(村上輝夫)混合(松崎キミ代)優勝(日本は7種目完全優勝)	60年代～高性能裏ソフトラバーの開発が進み、主なラケットに使われるようになる。	09.10 カラーテレビ本放送開始 06.17 新安保条約自然承認 08.10 国産インスタントコーヒー発売 08.25 ローマ五輪 09.14 OPEC結成 12.01 日銀「1円玉回収運動」開始
1961	14-16期	16期生の入部 阿部、安東、梶、中村、渡辺、村上、吉田他計16名 3期 荻村伊智朗 第26回世界選手権北京大会 混合(松崎)優勝 団体2位(決勝中国) 全日本軟式(豊岡市) 単優勝 16期生が入部 10都立戦で 男子団体(中村、渡辺、村上、田中) 優勝、男子複(中村・渡辺)優勝、混合複(中村・高村)優勝、男子単(中村)準優勝 東京都新人戦で男子団体の部 ベスト8(中村、村上、渡辺、安東)準々決勝で優勝校の関東商工と2-3	世界卓球選手権北京大会 【日本選手決勝記録】 女子団体：日本3-2中国 男子ダブルス：木村興治・星野展弥 混合ダブルス：荻村伊智朗・松崎キミ代	01.20 J.F.ケネディー大統領誕生 04.01 ニールセン社日本進出 04.03 NHK朝の連続ドラマ「娘と私」スタート 04.06 NHK「みんなのうた」放送開始 04.25 大阪環状線全通 08.13 ベルリンの壁建設 10.01 多摩テック開園 12.10 伊豆急行開業
1962	15-17期	17期生の入部 青木、岩田、片野、小林、山廣、入江、坂梨他計16名 3期 荻村伊智朗 第4回アジア競技大会(ジャカルタ)団体(荻村・木村・三木・小中)混合(松崎)優勝 単2位(決勝三木圭一)日本は7種目完全優勝 周恩来首相の招きで訪中、各地で指導・交流		06.01 「てなもんや三度笠」スタート 07.11 戦後初国産旅客機YS-11誕生 08.12 堀江謙一日本人初小型ヨット太平洋横断成功 09.15 ビデオリサーチ社設立 09.26 若戸大橋開通
1963	16-18期	18期生の入部 酒井、熊本、田巻、関、中山、広川他計21名 3期 荻村伊智朗 第6回アジア選手権マニラ大会 団体優勝(荻村・三木・福島・高橋)日本は9種目完全優勝 第27回世界選手権ブラハ大会 団体(荻村・木村・三木・小中)二位。(決勝中国 荘・徐・張)単ベスト8 荻村初めて無冠 コーチとして北欧4国・西ドイツに10週間滞在	世界卓球選手権ブラハ大会 【日本選手決勝記録】 女子団体：日本 3-0 ルーマニア 女子シングルス：松崎キミ代 3-2 アレキサンドル (ルーマニア) 女子ダブルス：松崎キミ代・関正子 混合ダブルス：木村興治・伊藤和子	02.10 北九州市発足 04.25 日本初横断歩道橋(大阪駅前) 05.01 狭山事件 07.16 名神高速道路開通 11.01 伊藤博文新千円札 11.08 ミロのヴェーナス日本初公開 11.22 ケネディ暗殺
1964	17-19期	19期生の入部 広瀬、高戸、木村、白井、養老他計9名		06.06 新潟地震(M7.5)死者26人 09.17 羽田空港―浜松町間で東京モノレール開業 09.23 巨人軍の王貞治 ホームラン55本の日本記録達成 10.01 東海道新幹線営業開始(東京―新大阪間4時間) 10.10 第18回オリンピック東京大会開催 女子バレー、男子体操などで16種目に優勝
1965	18-20期	20期生の入部 伊藤、今井、大家、杉山、角川、西井他計14名 3期 荻村伊智朗 第28回世界選手権リュブリアナ大会 団体二位 この後現役を退く	世界卓球選手権リュブリアナ大会 【日本選手決勝記録】 女子シングルス：深津尚子 3-2 林慧卿 (中国) 混合ダブルス：木村興治・関正子 この年の世界卓球選手権から「ぶっつけサービス(※最大のスピードでボールを投げ上げ、ラケットに激しくぶつけるサービス)」が禁止される。	01.11 東京に初のスモッグ警報が出され「公害」が社会問題になる 03.06 戦後最大の倒産「山陽特殊鋼」負債総額480億円 06.06 日本で初のサッカーリーグが開幕 07 政府、戦後初の赤字国債発行決定 09.24 国鉄「みどりの窓口」開設 12.26 さつき賞、ダービー、菊花賞、天皇賞、有馬記念で初の5冠馬シンザン優勝



座談会 Part.1



1948(2期)～1965(19期)

荻村伊智朗氏が世界選手権で優勝を飾り、日本には卓球ブームが到来。
西高卓球部でも部員が殺到しました。

2～19期の皆さんには、当時の部活動や荻村氏とのエピソードなどを伺いました。

卓球ブームにわいていた頃

— 皆さんが西高に在籍されていた頃は、荻村さんの活躍から卓球ブームになっていた頃でしょうか。

●高村 そうですね。私の時は1学年が約400名で、そのうち92名が卓球部に入部したんです。でも卓球台は4～5台しかなくて到底打たせてもらえるわけもなく、来る日も来る日も壁に向かって素振り。その結果、6月を過ぎる頃には10名近くにまで減っていました…。

●隅田 私は高村さんの1期下ですが、30数名が入部し、最終的に残ったのは男女合わせて8名でした。一人亡くなりましたが、残り7名は今でも親交を深めています。荻村さんが世界選手権に出場するための費用を集めるために、校内で募金活動もしていました。

●高尾 西高卓球部のOBということで、後輩の我々は世界の荻村伊智朗を“荻村さん”と呼べる。それをとても誇らしく感じていたのを覚えています。

●中林 私は中学まで熊本県におり、高校1年の夏休みに試験を受けて西高に編入しました。中学から卓球部だったのですが、入部するまで荻村さんが先輩だとは知らず…。転校生ながらすぐに部になじめたのは、西高ならではの自由な雰囲気があったからかもしれません。

●安東 私も高校入学前に上京しました。初めて卓球の試合を見たのですが、カットマンの打った球の軌道があまりに美しく見とれてしまったんです。そして、高校に入学したら絶対に卓球部に入ろう！と決意しました。

厳しいながらも楽しかった 青春の思い出

— 当時の練習や試合の思い出はいかがですか。

●石上(旧姓:入江) 練習でコート周りをうさぎ跳びしていましたよ。あとは、地獄のランニング(笑)。ダッシュを織り交ぜたインターバルだったので、血を吐く思いで走り、結局いつも脱落していました。

●小川 私も、ランニングのつらさが忘れられません。最後は歩いて学校まで戻るので、そうすると卓球の練習はほとんどできない(笑)。それなのに、就職してからも教職員の卓球大会にはずっと参加していて、連続50年も出場しています。

●村上 私は16期生ですが、12～13期生の先輩方がコーチとしてよく練習に来てくださったのを覚えています。合宿にも顔を出して下さって、卒業されてもつながりがある西高の伝統を非常にうれしく思っていました。

●安東 試合の思い出と言えば、高校2年の新人戦。団体戦に出場し、2対2で自分の出番が回ってきて、何とか勝ってベスト8に入れたんです。ところがベスト4で全く同じ状況になり、次はこてんぱんに打ちのめされました。帰り道の夕焼けが燃えるように赤く「僕の青春、終わったな…」と思ったことを鮮明に覚えています。天気とともに(笑)

●石上 私はミックスダブルスの試合ですね。16期生の渡邊先輩と組ませていただいたのですが、サイドスピンのサーブに手も足も出ずぼろ負けでした…。試合後、何も言えずおいおい泣いていたら、渡邊先輩がタオルを差し出してくださったんです。でもそれがラケット用の使い込まれたタオルで(笑)、青春の悲しい思い出です。

— ちなみに、荻村さんとのエピソードなどはありますか。

●中山 私は記念祭で荻村さんのエキシビジョンマッチで手合わせしていただきました。我々の時代の特権と言いますか、荻村さんが西高によくおいでになっていましたから。

●久保木(旧姓:広瀬) 合宿にもお見えでしたね。トレーニング方法から打ち方に至るまで、説明が非常に論理的でした。当時の合宿は顧問の先生もいらっしやなくて、何かから何まで生徒主導でした。今思えば自由というか放任というか…いかにも西高らしいですね。



●隅田 そうそう、伝統の卓球台の話もありますよ。荻村さんが紫綬褒章を受章された時に、西卓会主催の祝賀パーティーが開催されました。その会の残金で、ソウルオリンピックで使用された卓球台を購入したんです。裏側には荻村さんの直筆で「集中」の文字を書いていたいただきました。今でも現役で活用されていると聞きましたが、偉大なる記念品なんだということをぜひ知っていただきたいですね。

高校時代は人生の宝物

— 最後に、後輩へのメッセージをお願いします。

●森 高校3年間の中でも、部活動に打ち込めるのはもっと短い期間です。しかし、その時間をともに過ごした“同じ釜の飯を食べた”仲間との付き合いは、卒業後もずっと続いていきます。私自身が実感していることですが、そうした結びつきはその後の人生をきっと豊かにしてくれるはずです。

●菊池 西高は本当に自由な気風の特徴的な高校だと思います。その自由さを、ぜひとも3年間活用してほしいですね。私は2年間卓球を続けた後、3年生の時は新聞部で活動していました。たくさん仲間と出会ったことは私の財産ですし、いろいろなことに挑戦する姿勢を大切にしてほしいと思います。

●青木 そうですね。卓球について、西高は都立高校の中でも一番の伝統ある高校だと自負しています。私の代はみんな練習が好きで、仲良く一生懸命頑張ったイメージが残っています。この良い文化が未永く受け継がれていくことを期待しています。



(後列左より) 13期:中林 由行、16期:中村 明彦、12期:高尾 弘、17期:青木 建、18期:中山 雅彦、13期:小川 敏夫、16期:村上 克男、16期:安東 守仁
(前列左より) 9期:森 篤行、12期:隅田 献、11期:高村 則久、11期:菊池 禎二、19期:久保木 崇子(旧姓:広瀬)、17期:石上 千鶴子(旧姓:入江)

第二章 1966-1975

充実期 第二期黄金時代



執筆

23期 吉田 詠一

24期 小林 俊之

24期 志賀 朗

24期 山岡 雅博

25期 近光 護

25期 坂上 みつ子

27期 前田 和子

28期 川端 秀雄

29期 杉田 明子(旧姓 白山)

29期 徳重 克年

西高卓球部での出会い

昭和43年4月、桜の花満開の日。憧れの西高の入学式の後、卓球部入部の手続きをしました。

先輩から「自己流のフォームで直しようが無い」と言われ、カットマンを目指しましたが性格的に守りは嫌いでした。高校現役時代の個人戦では、1回戦で負けるか遅刻して棄権という始末。団体戦は、今野亘部長、瀬戸擁さん、谷本至さん、磯崎育男さん、法貴弘志さん、吉村浩さんらが常連で、私はメンバーに入れませんでした。

一方、女子は最強メンバーで、内山圭子(旧姓宗)さん、松本幸子(旧姓河口)さん、近藤マヤ子(旧姓大橋)さんが在籍していました。先輩には卓球の道を究めようとされていた、前陣速攻の道正幸信さんがいらっしゃいましたし、1年後輩に山岡雅博部長、小林俊之君、2年後輩に近光護部長、庄司裕君、小林彰君が入部するなどで、西高の第二期黄金時代に立ち会えた事は至福の極みでした。

萩村さんの思い出もあります。合宿に来ていただいたときに、汚れた卓球台、ピンと張っていないネットに失望され帰られた日があったこと、練習後のコンパで、ゲームをたくさん教えていただき、コンパに出ずに一人夜間練習をしていた先輩が叱られていたこと等々、誉れには遠くとも、私にとっては懐かしく大切な記憶です。

高校生活では落ちこぼれそのものでして、授業の代返は日常茶飯事でしたし、実力テストでは最下位クラス。無免許運転で警察に補導され、担任の増田先生に交番まで身柄の引き取りに来ていただいた事、オートバイを乗り回し、記念祭をさぼって軽井沢や志賀高原に泊まりでツーリングに行った事、西萩窪の麻雀倶楽部に入りびたった事。修学旅行先の宿での飲酒どころか、授業中にお爛されたワンカップが回ってきた事もありました。現代では考えられないような高校生活を送っていましたが、きっと先生方は生徒を信頼し、温かい目で見守ってくださっていたのだと、今も感謝しております。

高校を卒業してからは、西高に恩返しをしたいとの気持ちでOB会活動をしました。創部30年記念事業では、田中恒夫会長、萩村伊智朗副会長、小川敏夫幹事長、26期の塚田祐次君らと、催しの企画や記念誌の作成をし

ました。慣れない仕事ばかりで目の回るような忙しさでしたが、あの多忙を極めておられた萩村さんから、何事も「人と同じ事をしてはダメだ」と叱咤激励され、なんとか30年記念事業をやり遂げた事を覚えております。

その精神で慶應義塾大学では、スポーツ愛好会卓球部のキャプテンを務め、100名近くの部員をまとめ、東京卓球連盟3部で活躍できました。これも西高卓球部で鍛えていただいた賜物であります。

石川島播磨重工業(現IHI)に入社後も卓球部に所属し、卓球部部長をしております。会社で経営と営業の責任者を永年務められたのも、西高卓球部での訓練・練達・人脈のお蔭であると確信をしております。

現役の皆様方も失敗を恐れず、NEVER GIVE UP、TRY AGAINの精神で、数々の高い壁を乗り越え、学友歌にもあるように、光の子となって下さい。



1994年1月 三鷹大黒屋で萩村さんの還暦のお祝い(左より)4期:亀田さん、3期:萩村さん、23期:吉田



1994年1月 卓球やろう会 ITS

西高卓球部の思い出

私が西高に入学したのは昭和44年です。当時は大学紛争のピークの時期でした。西高でも3年生のクラスで学生の自治拡大を求めて授業ボイコットと集会が行われていたように記憶しています。

中学時代から卓球をやっていたので迷わず卓球部に入部しました。ずいぶん前なので全部は覚えていませんが同期の男子には山岡さん(キャプテン)、大庭さん、川田さん、志賀さん、青木さん、高久さん、野口さん、平野さん、山川さんなどがいました。女子は足達さん、浜田さん、大矢さん、佐藤さん、笹本さんといったメンバーでした。書いていて思い出したのですが、足達さんはバックハンドのコンパクトなショットが得意でスナップを利かせて上から押さえつけるようにパシッと叩くのですが、同じペンホルダーの私にはどうしてもできずいつも感心していました。

1年先輩には、今野さん(キャプテン)、瀬戸さん、吉田さんといったとても気のよい先輩たちがいて、そのおかげで部の雰囲気がとても明るかったように記憶しています。

練習前の井の頭公園へのランニングは最初とてもきつかったですが、1年経つころは半分楽しんでいた時期もありました。夏休みの合宿は、1日中卓球ができるので楽しかったと思います。たしか一度萩村大先輩が合宿に来られたことがあり、短い時間でしたが全員を集めて指導していただいたような記憶があります。自分でボールをコートに弾ませ、それを全力でスマッシュする練習法などを教えていただきました。私には大変有意義でした。

1年後輩で近光さん、庄司さん、小林(彰)さんといった強い選手が入ってきて部の力が段々上がっていきました。私はそれほどの成績も残せませんでした。3年間で一番充実していた試合は3年ときのインターハイの団体戦の予選でした。すでに主力はそのとき2年の近光

さんたちになっていたと思いますが、どこの学校に対しても気おくれすることなくベスト8まで勝ち上がることができました。当時はベスト8になると日にちと会場を変えて、また試合形式もインターハイの本戦スタイル(6単1複)にして代表校を決めるようになっており、雰囲気もずいぶん違っていました。そこで強豪、高輪高校に破れましたが私としてはやった感のある試合でした。部全体としても自信がついたのではないかと思います。その後は、後輩の近光さんが全国大会出場など大活躍されました。

私は大学卒業後、地方勤務(関西、名古屋等)が多く、同期の仲間に会うチャンスが少なかったのですが、24期の絆は強く、仕事で東京に行ったときは、声をかけて集まり、昔や今の話に花をさかせてきました。本当に一番リラックスして話せる仲間です。現在は北九州に居ついでしまいましたが、昨年秋、大庭さんの発案で京都在住の山岡さんを訪ね、彼の案内で紅葉の京都観光をしました。お互い見た目は歳相応ですが気分は高校のときに戻ったようで本当に楽しい旅行でした。いつか西高卓球部の現役、OBの方とお会いして昔や今の話ができる日を楽しみにしております。



小林

高校時代の思い出

昭和44年4月西高の入学式。父は岩手県盛岡市に転勤、私は東京に残って一人生活が始まりました。父は1年半後には大阪へ転勤して、中野の下宿で3年間を過ごしました。

西高卓球部の歴史も知らないままに入学直後の部活の募集で卓球部を選びました。当時には珍しかったシェークハンド・ドライブマンの長谷川信彦さんが活躍されており、私の憧れでした。

「君はシェークハンドか。教えてあげよう…」眼鏡をかけニコニコと親しみやすい笑顔の先輩。これが、吉田先輩との出会い、私の西高での卓球の始まりです。「右手を上から下に下す。手首も上から下に。」?? 私のイメージしていた下から上への強打は?…全く逆の動きでした!! こうして2年間カットマンとして卓球を続けることになりました。

ボロボロの体育館でしたが、トレーニングも、腹筋・腕立て、井之頭公園までのランニング、インターバルなど、今野部長、瀬戸先輩についていくのも大変でした。先輩に励まされ、同期の仲間にも恵まれて頑張れたと思います。夏休みは盛岡の家族の元に戻ったため、夏合宿は1回だけの参加。もっと強くなれたかもしれませんが、学生生活の資料は、父の転居のために行方不明になってしまい、私の戦績は記憶の中に埋没しました。新人戦、都大会、第三学区戦…勝った記憶もあまりなく、華々しさに乏しい卓球部活動でした。とはいえ、私は、中学2年から高校1年の3年間で毎年10センチと急速に身長が伸びたものの、体力不足で体育はどちらかというと不得手。西高では基礎体力が向上したお陰で、クラスマッチや運動会のリレーにも出るなど、楽しい思い出も残りました。三年間の一人暮らしでは下宿先のご夫婦や先生方には大変お世話になりましたが、卓球部や同期の仲間を支えてもらったり、本当に充実した高校時代を過ごすことができました。

近況と先輩に託すメッセージ

私は、大学を卒業して、製紙会社に入り、テニスに転向しました。真夏でも体育館の中よりは、外で汗をかきたいという気持ち強く、卓球台とは離れた人生になりました。

最近では、世界卓球などのTVの観戦を楽しんでいます。華やかな攻撃力も魅力ですが、カットマンが出てくると思わず手に力が入って応援してしまいます。

同期の仲間も卓球から離れ髪の毛が白く薄くなっても、相変わらず皆個性が豊かです。社会に出てもそれぞれの道で活躍しています。「体育館」が「居酒屋」に、「ラケット」が「グラス」に、「ピンポン球」が「会話」に替わっても、相変わらず楽しく「ラリー」を続けることができます。毎年のように男性では集まりを持ったり、四年前には女性部員とも集まる機会がありました。二年間の「縁」が「絆」に、四十年以上も続く私の財産です。

昭和63年4月の写真が手元にあります。もう30年近く前になりますが、同期の小林、川田、大庭、高久君の5人で鎌倉に1泊した時のものです。高久幸雄君は温厚で、広島県大竹市に在住でしたが、その5年後に早逝したのは本当に残念です。出張した折に御自宅に伺って、奥さんと御長男にご存知なかった高久君の高校時代（卓球部）をお話する機会がありました。その後も西高卓球部のHP紹介などをさせてもらったりしています。

西高卓球部は、他の伝統校と違って受験校という制約の中でも、頑張って立派な成績を残したり、私のようにそれなりに過ごしても良い。一人一人の個性を大切にしてくれることが素晴らしいと思います。後輩の皆さんには、西高時代を精一杯楽しんで新しい歴史を創ってください。卒業後も、卓球を愛する仲間が人生の大きな財産となるでしょう。



昭和63年4月 鎌倉にて 川田、志賀、高久、大庭



平成27年8月 志賀、山岡、大庭、川田

「僕が僕になれた時代」

西高に合格し、入学手続きに行ったときのことだった。事務室の窓口で女子の上級生が何かの事務手続きをしていた。彼女は、その当時流行の短めのスカートに、ストッキングをはいていた。大人の女性がそこにいたことを鮮烈に覚えている。その足で体育館に向かった。練習していた先輩に入学式前から練習に参加して良いか聞き、春休みから練習に参加するようになった。

「オール・スマッシュ」、その当時は本気でめざしていた。ペンホルダーだった私はオールフォアで動き回り、ネットを超えた高さのボールはスマッシュしていた。声を出し、汗をまき散らし、気合だけは人一倍の練習を繰り返していた。相手のミスを期待せず打ち抜いて勝つことは、自らの体力を強化し、技術を研ぎ澄ますことで実現すると信じていた。自分に対する挑戦が僕の卓球だった。練習では「強かった」が、試合では勝てなかった。中学の時から一人で練習方法を考えて練習していたが、西高では練習計画や練習メニューは仲間と話し合っ決めていくのが当たり前になっていった。同期の卓球部の仲間とは、何かと論議を繰り返していたことを記憶している。私の卓球は「自己の限界への挑戦」が目的だったが、「アマチュアスポーツは勝つことが目的だ」と主張する仲間がいた。僕は勝つことにこだわり、彼は負けないことにこだわっていた。この「卓球観」の違いは戦績の差になっていた。部内のエレベーターマッチでも、彼には圧倒的に負け越していた。僕は打ちミスで自滅し、前陣速攻の彼は後ろに下がってカットしてまでボールをつないできた。自滅した僕は自分の力不足を責め、さらに気合いを込めた練習にのめり込んでいった。

2年の時、転勤で両親が大阪に行き、僕は国領にある父の会社の独身寮でひとり暮らしを始めた。その独身寮には若い会社員と大学生が住んでおり、僕は唯一の高校生だった。ひとり暮らしを始めて間もなく、大学生から麻雀の面子が足りないからと声をかけられた。その時勝ってしまったのが運の尽きで、頻りに麻雀に誘われるようになった。そこで、生まれて初めて目が回るほど酒に酔い、ギターを弾きながら大声で歌い、夜中まで語り合うようになった。自他共に認める「よい子」はあっという間に「問題児」になった。僕の状況を案じた担任の原誠先生が、「山岡君の様子が変わる」と両親に手紙を書いたほどだった。ゴミ箱をひっくり返したような部屋

で暮らす大学生と話しているとき、僕のなかの「当たり前」が崩壊した。灰皿や食べかけのお菓子、水割りのコップなどが混在するテーブルの前に、彼はたばこを吸い、その灰を灰皿に落とした。ところがその灰は灰皿には落ちることなく、水割りのコップに落ちていた。その直後、僕が「あっ」と言う間もなく、彼は水割りを飲み干していた。「それ、灰が入ってる」と言うと、彼は「山岡、これ飲んで死ぬか?」とことなげに言い放った。早寝早起きをし、三食きちんと食べる。遅刻せずに学校に行き、勉強をして良い大学に行く…。僕の中の「当たり前」が崩れ始めた。疑問を感じていた勉強をやめる口実になった。テスト期間中にわざと遅刻して、必死に答えを書くクラスメイトを見下すような薄ら笑いをして教室に入っていったこともあった。「ちょっと悪」を演じながら、なんで学ぶのか、何のために生きるのか、もがき始めた時期だった。

この時期、勉強は休止状態だったが、卓球には打ち込んでいた。そこにはいつも仲間がいた。みんなで海や山に遊びに行ったこともあった。ひとり暮らしが寂しいと感じることはなかったが、生きることの孤独は感じ始めていた。同時に人を愛する意味をも考えるようになっていた。親や教師の言葉に縛られていた僕が、彼らの言う「当たり前」を排除するとき、僕の中にいた大人たちをも排除していた。「お父さん、お母さん」と呼んでいた人々を「親父、お袋」と呼ぶようになった。その代わりに僕の心には、西高の仲間や寮の大学生たちが居座るようになった。みんなが僕に与えてくれたまなざしや卓球部での役割が、「僕が僕であっていい」と感じさせてくれた。

やがて、「自分への挑戦」だけをめざし、空回りしていた卓球のスタイルが、ボールを介した相手との関係の変化を楽しめるようになっていった。そして、僕は教師になった。



西高時代の山岡

白球を追って

私達が西高在学中は決して恵まれた練習環境ではありませんでしたが、面倒見の良いトレーニング好きの先輩、本気で強くなることを目指していた同期、我々に追いつこうとして切磋琢磨する後輩と周りには恵まれていた3年間だったと思います。私は、在学中、幸運にも2年の時の全日本ジュニア、3年の時のインターハイで東京予選を突破でき、ジュニアでは3回戦まで進出できました。2回の全国大会出場はその後大学を体育会生活と導き、その縁もあって現在の職場に繋がっていますので私の運命を変えたと言っても過言ではないかもしれませんが、その運命の変革期は、同期の庄司君の存在なしには語れません。

私は、小学校から卓球を始めてましたので、中学時代もそこそこの戦績があり、高校入学時でも先輩に負けないう力はありました。しかし、西高という受験校では、正直全国大会というのは夢のように感じてましたが、高1の夏に茨城県中学チャンピオンの庄司君が編入してきてその環境は一変します。庄司君と勝ったり、負けたりを繰り返しながら、徐々に力がついてきて、3学区戦では出た試合は単・複・混合複・団体全て西高が取りましたし、単の優勝は常に庄司君と分け合っていました。

東京代表は、先に私が全日本Jrの代表になりましたが、私が予選で負けた関東大会では庄司君が東京代表になっています。東京都新人戦は記憶が正しければ、団体でベスト4に入り、神奈川県との対抗戦、東神大会に出て浅野高校と対戦したと思います。

当時西高卓球部は単なる受験校の卓球部ではなく、東京の強豪校になっており、2年の時はベスト8に入りこれはインターハイ団体出場も夢ではないと思っていましたが、層の薄い公立校には不利な試合形式（6単1複）でしたし、庄司君が関東大会を最後に部活を引退しましたので、残念ながらシングルスだけの出場となりました。

た。今でも皆でインターハイ会場の山形に行きたかったと思っています。

当時に語る面白いエピソードがあります。仲の良かったバスケ部の人間が豊多摩高校に試合に行った際、体育館の更衣室に「打倒 西、打倒 庄司、近光」と書いてあったそうです。それなりの存在感のある我が西高卓球部だったと思います。

私がやっていた時と今とは卓球の質が違うので、一概に比較は出来ませんし、今は幼少期からコーチを付けて練習している子が一般の部で活躍する時代ですので、益々西高のような卓球部で勝っていくのは難しいと感じます。

でも、現役の皆さんには是非工夫と集中力で西高卓球部を盛り上げて行ってもらいたいと思います。私の会社生活も終盤になりましたが、今更ながら工夫と集中力は社会人として最も必要なことだと思っています。漫然と球を打つのではなく、その1球に意味を持って白球を追いかけて下さい。その1球が未来を開きます。



昭和45年 記念祭模範試合(近光、庄司)

卓球部

卓球を始めたのは中学1年の時だが、小学校当時やや虚弱体質だった事もあり体育が苦手で、それを克服するために運動部、そして会社の卓球部の部長だった兄に教えてもらえると当てにして卓球部を選んだので、卓球が上手になりたいとかはあまり思っていなかった。中学時代はウサギ飛びの記憶しかなく、西高時代は素振りと球拾いの記憶がもっばらだ。それでも部活が嫌だとか辛いと思った事が無いのは、基本的に体を動かすのが好きなのだろう。兄にもラケットを選んでもらったり、練習の相手をしてもらった事はあるが、結婚して愛知県に住んでいたのも、年に数回の事であり、何より、本人に上手になりたいという向上心が無いから上達する訳が無かった。いや、上手くなりたくない訳ではなく、勝ちたいという闘争心が弱かったのだと思う。だから試合は苦手だったが応援するのは好きだったので、西高の卓球部は楽しかった。都立高校の運動部で応援し甲斐のある機会にあんなに恵まれると言うのはなかなか稀有な事だろう。

最初の応援で一番記憶に残っているのは試合そのものではなく、私とダブルスを組んでいた祖父江さんが持ってきた輪切りレモンのはちみつ漬けである。水筒の水にそれを入れたらとても美味しかった事が今でも鮮明に記憶に残っている。昨今ならペットボトルのはちみつレモンを買って、特に感動する事もなく終わってしまうだろう。バレンタインデーが誕生日の祖父江さんは同期の女子6人の中では一番若かった(?)訳だが、一番大人びていた気がする。祖父江さんとは読書の趣味が近かったので、卓球の話よりもSF関係の本の話ばかりしていた。その祖父江さんが翻訳家になって、もっと色々な本について話をしたいと思っていた矢先に癌で亡くなられてしまった。最後に会ったのが、同期の女子の部長だった小堀（旧姓 浦久保）さんが事故で亡くなられたお葬式の日で、その時に残った5人は年に1回位は会おうね!と約束したのに、中々その約束が果たせないうちに祖父江さんまで逝ってしまい、30年余りで同期の女子は現役時代の2/3になってしまった。

大学でも卓球部に入った。建築学科だったので、課題に追われて1年しか続けられなかったが、1年間は紅一点で男子部員に揉まれて頑張った。西高に入学した当時は、

体育で校舎の周りを1周するマラソンも完走できなかったのが、合宿で井の頭公園まで走れるようになり、大学の合宿では八王子の山の麓を10km走り、持久力だけは進歩していった。35歳の時にこれが最後の機会だと思って、青年海外協力隊に応募したのだが、その2次試験で、専門に関する面接試験のはずが心外な事に専門的な事は殆ど質問されず、「事前訓練で毎朝マラソンしますが、走れますか?」と聞かれた。自信を持って「走れます」と言えたのは、卓球部時代に頑張った経験があったからだった。3カ月間毎朝、広尾の街を約5km、最後に河口湖の合宿で30km完走して、任地に赴いた。

今は年に一回、富士山に登っている。走るのも山登りも趣味ではなく、仕事も趣味もどちらかと言えばコンピュータに向かっている事の方が多い。10年ほど前、肥満で成人病の黄信号が灯った時に、毎日1回は職場のビルの地階から12階の屋上までスローピングして減量に成功したのだが、そこから後戻りしていない事を確認するために富士山に登っている。スポーツと言うよりも、頑張った達成感が病みつきになっているのだろう。お陰でこの10年、健康診断以外ではほとんど医療機関のお世話になっていない。仲の良い友人に囲まれて、手に入れた達成感が私の人生の土台になっていると言っても過言ではないだろう。卓球上達のアドバイスは出来ないが、どんな職業でも体力と精神力が最後にものを言うし、歳を重ねる毎に、友人の会話において健康の話題が占める比率が高くなっている事を考えると、運動で頑張った達成感を高校時代に養っておいて正解だったと思っている。余談だが、青年海外協力隊OBからのアドバイスとしては、卓球の職種の募集が毎回有るわけではないが、スポーツ系の職種ではコーチとしてオリンピックに出た方も何人もいる。もしもオリンピックを目指される時はそういう方法もご一考されては如何だろうか。

最後に祖父江さんが亡くなる少し前にネットに投稿していたイラストを載せて彼女を偲びたいと思う。彼女が好きだったアーティストの似顔絵である。



西高時代の思い出

30周年記念誌に寄稿してから恐ろしいことに40年という年月がたってしまいました。来年還暦を迎える年になり、西卓会の大半の方の先輩という立場なのかと思うと不思議な気持ちです。卓球部ではいつでも先輩の方たちを見上げる視線だったので。

先輩——とはじめたので、先輩たちのことから。卒業生の吉田先輩や瀬戸先輩には、新入したての私たちのコーチとして本当にお世話になりました。15歳の私たちには先輩たちは大人(おじさん＝失礼!)に見えて、高校の部活はすごいなと思いました。女性の先輩たちもたくさん来てくださって、熱心にご指導いただきました。27期の女子は、ほとんど4人だけで終始した弱小の学年でしたが、それでも、頑張れたのは先輩たちのおかげです。(旧姓 浮洲さん、長谷さん、渡辺さん)

3年生の近光、庄司両先輩は、卓球の技術だけでなく、背が高く手足が長く、大人に見えて遠い存在でした。その先輩部長を恐れ多いことに、ブーチョ(長ーい感じ)、一年上の刈谷先輩は一回り小柄な方だったのでブッチョ。われらが女子部の藤並先輩は、ブブンチョとお呼び申し上げておりました。誰が言い出したのか、もう、忘れてしまいましたが——(私じゃないです)。

荻村さんも高校に来られる機会があって、ドキドキしながら球拾いをしました。球拾いといえば、拾い損ねると腕立て伏せ10回だったのですが、同期の浮洲さんが、腕立て伏せをしながら飛んできた球を華麗に止め(ように)ていて感心したことを覚えています。

それから、西高会館での合宿。一年のときの合宿は特に印象深いです。30周年の記念誌にもあるカルピス一気飲み大会(同期の渡辺さん優勝)を含め、学校への泊まり込み、皆で銭湯に行ったり、夜布団の中で同期でおしゃべりをしたり、懐かしい体験が山積みです。最後の反省会で、私たちのことを親身になって考えてくださる一年上の先輩たちの思いに感激してみんなで泣いてしまいました。少女らしい感傷的な出来事ですが、思い出す

と暖かい気持ちになります。私も卒業後合宿に行きました。練習の後みんなで飲みに出かけたので、こういう目的もあって先輩がたくさん来てくださっていたのだなと納得しました。

試合ではほとんど勝てない私たちでした。早い時間に終わってしまうので、江古田の駅前の東宝パーラーでパフェをよく食べました。他の場所でも試合があったはずなのに、やけに東宝パーラーだけ覚えています。そんなに弱かったのにもかかわらず、私以外の3人は大学でも卓球部でした。本当に、卓球が好きだったんですね。長谷さんは、高校の先生になられてからも顧問として卓球にかかわっていらっしゃいました。

私が進学したお茶の水大学は、当時3年生の森田先輩が主将で、2年生の田口先輩が次期主将と、西高の伝統が続いていました。私は、中学(練馬の開進第三中)でかなり真剣にやったので燃え尽きてしまった感じで、根性が続かずすぐ辞めてしまいました。先輩方に申し訳なかったです。

現在は、縁があって米国に移住し、テキサスに住んで25年以上たちます。最近、会社(IBM/Austin)のレクリエーションでピンポンをする機会が増えました。皆あくまでレクの腕前なので、真剣にやるのも「はしたない」ので、ショートで適当にごまかしていますが、それでも60お婆さんの勝利です。たまには思いっきりラケットを振りたい気分になってきたので、ペンのラケットが使いたくて昔のラケットを出してみたら、ラバーが真っ黒になっていました。この夏に日本に一時帰国したときに、40年ぶりに国際卓球へ行って、ラバーのチョイスがたくさんあるのに驚きました。昔のように自分で貼ろうと思ったら、難しいからと詳しく説明してくれました。難しかった記憶はないので、何か変わったのでしょうか。浦島太郎です。まだ、時間がなくて挑戦していませんが、どうなることやら。

西高ファイト! オー!

西高を卒業したのは1976年の春、今年は何と40年も経ったことになります。今更ですが、光陰矢の如し学なりがたしとはよく言ったものです。高校生活の中で、卓球部の存在は全てと言っていいほど、高校生活の思い出は全て卓球部とともにあったと言っても過言ではありません。記憶はだいぶ薄れていますが、卓球部の思い出をキーワード毎に綴ってみたいと思います。

■ 夏合宿

何と言っても、卓球部生活でのメインイベント。夏合宿は西高会館、学校の中に寝泊まりするのはある意味新鮮でした。夜な夜な先輩方の面白い?歌など聞けたものでした。今はやっていないんでしょうね。

■ 1000回ジャンプ

私たち世代の夏合宿では恒例のひたすら大変なトレーニングメニュー。輪になって1から10まで数えながらジャンプをします。一人10カウントで100人分、10人のメンバーなら10周分、気が遠くなります。一年生の時は、本当に苦痛だったな～。でも、二年生からは不思議と平気になるものです。

■ 冷水機ダッシュ

これは、夏の風物詩。今では考えられませんが、暑苦しい締め切った体育館でダラダラ汗を流しながら練習しても、水を飲むことは許されませんでした。結構、ヤバイことをしていたんだな～と思います。今ではあまり見かけませんが、冷水機(足で踏むと冷たい水が噴出する機械)が少し離れた廊下に設置されていて、練習が休憩になると、どんなに疲れていても猛ダッシュで冷水機に向かうのでした。

■ 井の頭公園までのランニング

卓球部は、とにかくよく走ったのを覚えています。陸上部じゃないんだからと思いつつ、イヤイヤ走っていました。すごく早い先輩もいましたね。『西高ファイト!オー!』と叫びながら、井の頭公園まで行って帰ってくるのが日課でした。途中、某女子高の前を通るんですが、ここは目一杯元気に走るんだよね～。たまに、女の子が手を振ってくれ

たりして…、いっそう速く走る西高卓球部でした。ちなみに、某女子高とのロマンスは聞いたこともありません。

■ クラスマッチ

一年生の時、クラスマッチの卓球で優勝したこと。当時の私のクラスには何人か卓球部がいて、一年生ではありましたが総合力で勝ち上がり、三年生のやはり卓球部の小沢先輩がいらしたクラスとの決勝戦になりました。確か相手にマッチポイントを握られ、私のスマッシュがオーバーしたかに見えてエッジで入るといふ奇跡が起き、そこから挽回し優勝したように記憶しています。不思議なもので、このエッジのシーンは今でも鮮明に覚えています。

■ サウジアラビア高校生との交流試合

荻村さんがサウジアラビアの高校生を引連れ交流試合に来て頂いたことがありました。私も試合をしたはずですが、結果は全く思い出せません。ただ、お国柄から体育館は女人禁制で、女子卓球部員は中に入れて貰えませんでした。

■ 荻村さん

荻村さんの思い出は、本稿以外でもたくさん語られるものと思います。私が卓球部に在籍していたとき、確かOB戦でお会いし試合をさせていただきました。元世界チャンピオンと試合をできたなんて、中々無い経験です。一生の思い出です。

西高卓球部の益々のご活躍と青春の一頁を胸に刻んで欲しいと願って止みません。



荻村さんとの試合風景

29期 杉田 明子(旧姓 白山)

西高卓球部の思い出

1974年春、西高生になった私は、迷わず卓球部に入学しました。中学校の3年間、中野区立の中学校で3年間卓球部であり、シングルスでもダブルスでも中野区の大会で優勝したことがあり、高校に進学して卓球を続けることは希望どおりの選択でした。

卓球部の同期女子部員には私を含めて恩田さん、菅さん、橋本さん、倉員さん、飯田さんがいました。また、1期上の先輩にも、女子部員は、井出さん、但馬さん、田中さん、大場さん、相田さん、森田さん、福島さん、深井さん、清水さんがいました。部活は、卒業したばかりのOBの先輩が時々指導に来てくださいました。今思えば、大学生になっていろいろ遊びたい盛りの時期に、母校の後輩の指導をしてくださったことは、大変尊い行為であり、ここに荻村卓球の源流を継ぐ精神が脈打っていたことを感じます。

週2-3回の部活では、体育館をまず半分に分けてネットを張り、バスケ部が半分を使い、もう一方の半分以上を卓球部と剣道部が使っていました。親友が剣道部員だったので、卓球をやりながら竹刀を振っている彼女の姿を見ながら、頑張っているなと思って自分も頑張っていました。

1年の夏合宿も思い出の一つです。1年上の先輩たちが朝から夕方までのおおまかな練習プログラムを作ってくれて、うさぎ跳びを含めた体力づくりトレーニング、井の頭公園の近くまでのランニング、体育館で思う存分の空間を使った玉打ち練習などがありました。

西高会館の2階の和室での雑魚寝合宿も楽しい思い出です。朝から晩まで、卓球のために過ごす合宿は、技能の習得や体力づくりには効果的だったのではと思います。

卓球部創部30周年記念部誌の中に同期のエースであり女子部長だった橋本ユキ子さんが執筆された「オール

マイ・ピンポン」との寄稿文が掲載されています。2年生の都大会で橋本さんと組んだダブルス戦で強豪私立高校のチームを破り、5回戦まで勝ち進んだことが書かれています。その時の相手チームにはコーチが細かく指導しており、2人だけで参加した私たちとは対照的でした。相手チームのコーチのことばが聞こえました。「あんなへたくそな卓球に負けるな」という屈辱的な言葉でした。橋本さんと私はその言葉にさらに奮起して、お互いを励ましあいながら勝ち上がっていきました。橋本さんの文章には、「試合前に二人で納得がいくまで練習した」と書かれています。練習をして勝ちたい気持ちがあったからこそ5回戦進出という成果に結びついたのでしょう。高校2年の夏、夏休みが終われば自然退部が決まっていた時期に、悔いのない思い出を刻むことができました。

大先輩荻村伊智朗氏はその礎を築き、代々の部員がその想いを受け継いできた西高卓球部の歴史があることを、この機会にあらためて思い起こしたいと思います。



2016年7月にユタ州のHorseshue Bendで撮影

29期 徳重 克年

西高卓球部の仲間との思い出

我々29期生卓球部は、男性は種村、中井、石倉、清水、酒井原、野間、徳重の計7名です。女性は記憶が定かではありませんが、旧姓で橋本、白山、飯田、菅、倉員????と記憶しています。正直我々の29期は、偉大な先輩方や、上下の代と比較して卓球は弱かったと記憶しております。特に私は高校から卓球を始めたものですから、未熟でした。でも何か夢中になり、少しでもうまくなろうと工夫・努力し、またいい仲間を作れたことは本当に私の人生において、めずらしくいい体験でした。今思い出しても、正直汚い・クラーもない高校内の合宿所に泊って、朝から井之頭公園へランニングしたり、1000回ジャンプ、1年生の時は炎天下で1時間トレーニングとよくできたなあと感じます。

私にとって卓球部の仲間は、今も貴重な財産です。高校卒業後は、車で東北や北海道と一緒に旅行しました(写真)。石倉君の車が、北海道のじゃり道から転落して石倉君と危うく心中しそうになったことも今となってはいい思い出です。未だに年1-2回飲み会も開いています。この前は、若干1名が年甲斐もなく飲み過ぎて転倒し出血して、救急車騒ぎになりました。また今年は30期の大石君が、Barを開店したと聞いて、29期でお祝い? お邪魔しにいきました。

私は、現在医療関係に勤めていますが、現代の医療に対する不信・クレームはすごく、日々一生懸命やっていますが、苦渋の連続です。夜中や日曜日も病院で出て働いていても、なかなか報われません。そんな時でも卓球部の連中と飲んでいると、高校生になった気持ちで何もかも忘れられます。不思議な感覚です(忘れていいのかわかりませんが……)。最近ではいつも卓球部連中と飲んだ後は、50代後半6名、白髪・髪の毛の薄い人などでカラオケに行っています。店員さんは少し変な顔を

しますが、懐メロを絶叫しています(次回は酒井原君に負けずに80点オーバーが目標です!)

私から後輩に何か特にメッセージなどと言った大それたものはありませんが、高校時代同じクラブで一緒に釜の飯を食べ、つらい夏合宿に耐えた仲間は、かけがえのない経験や仲間を作ります。きっとそれは勉強ばかりし、いい大学に入ることよりも貴重なことだと思います。西高校に入学なさった方なら、3年生になって受験勉強すれば十分でしょう。人生は一度だけです。きつい練習に耐え、苦勞をした経験や、苦勞を分かち合った仲間を作ることの方が、人生はきっと豊かになるはずですよ。

私は、大学入学後も懲りずに、医学部卓球部に入りました。この仲間ともやはり今でも付き合っています。ただこちらは、同業者なので、愚痴や、同じ職業なのに収入格差もあり、少し微妙ですが……でも同じクラブにいた仲間は本当にいいものです。最近では、東日本シニア医師卓球大会にも誘われています。(31期の今泉先生も弘前から、33期の我妻さんも筑波から、参加しませんか?)最後に西高校卓球部の皆様が、今後も御活躍なさることをお祈りして、29期からのご報告といたします。



大学の時、西高卓球部29期の同期で北海道旅行。ノシャップ岬にて(左より)種村 隆行、酒井原 勲、徳重 克年、石倉 志津夫、清水 泉

1966-1975 都立西高卓球部の歴史

		卓球部の出来事	卓球界の出来事	世の中の出来事
1966	19-21期	21期生の入部 小野木、金田、友田、前田、湯浅、小林他計18名		03.01 日本放送作家組合、創立総会 03.31 総人口一億人突破 04.01 メートル法完全実施。鯨尺物差し精算禁止 06.30 ザ・ビートルズ東京公演(日本武道館)
1967	20-22期	22期生の入部 渡辺、森山、河村、坂井、白木、小田、道正他計14名 3期 荻村伊智朗 第29回世界選手権ストックホルム大会女子監督。 「世界の選手に見る卓球の戦術・技術」(卓球レポート)出版	ITTF二代目会長にH・R・エバンス(ウェールズ)が就任。 世界卓球選手権ストックホルム大会 【日本選手決勝記録】 男子団体:日本5-3朝鮮民主主義人民共和国(北朝鮮) 女子団体:日本3-0ソ連 男子シングルス:長谷川信彦3-2河野満 女子シングルス:森沢幸子3-1深津尚子 女子ダブルス:森沢幸子・広田佐枝子 混合ダブルス:長谷川信彦・山中教子	01.27 日米間衛星通信営業開始 02.11 初の「建国記念の日」 03.04 ハワイ出身の高見山、初の外国人関取に 04.15 東京都知事に美濃部亮吉氏が当選、初の革新都政が誕生 06.14 水俣病公害訴訟事件発生 07.01 EC(欧州諸共同体)が成立 08.08 ASEAN(東南アジア諸国連合)結成 08.03 「公害対策基本法」施行 10.18 英国のファッションモデル、ツイッギー来日(ミニスカート流行) 10.20 吉田茂元首相死去
1968	21-23期	23期生の入部 法貴、宗、河口、大橋、今野、瀬戸、谷本、吉田他計10名		04.04 米の黒人運動指導者キング牧師が暗殺される 06.15 東大で全共闘、安田講堂占拠 06.26 小笠原諸島、日本に復帰 07.01 郵便番号制度発足 10.17 川端康成、ノーベル文学賞受賞 12.10 東京・府中市で三億円強奪事件発生
1969	22-24期	24期生の入部 青木、川田、小林、足達、志賀、浜田、山岡他計17名	世界卓球選手権ミュンヘン大会 【日本選手決勝記録】 男子団体:日本 5-3 西ドイツ 男子シングルス:伊藤繁雄 3-2 シェラー (西ドイツ) 女子シングルス:小和田敏子 3-1 ガイスラー (東ドイツ) 混合ダブルス:長谷川信彦・今野安子	01.18 大学紛争激化・東大安田講堂に機動隊 05 東名高速道路全面開通 05 連続43カ月の戦後最長の「いざなぎ景気」 07.21 アポロ11月号着陸 08.15 米国でロックの祭典「ウッドストック」開催。40万人の若者参加 12.01 住友銀行、初の現金自動支払機を設置
1970	23-25期	25期生の入部 近光、市川、庄司(故)他計15名 第3学区都立戦 団体・男子複・混合複・単 優勝	70年代～アンチ・トップスピンラバー、粒高ラバーが開発される。 これに伴い、ラケットの反転使用をする選手が増える。	03.14 大阪で日本万国博覧会開催 03.31 日本初のハイジャック事件発生 08 東京の銀座・新宿・池袋・浅草で「歩行者天国」開始 11.14 東京の渋谷で初のウーマンリブ大会開催・性差別を告発 11.25 三島由紀夫割腹自殺
1971	24-26期	26期生の入部 市川、岩井、内ヶ崎、小沢、笠原、塚田他計23名 25期 近光護 全日本ジュニア東京代表 全日本ジュニア 本戦 3回戦進出 (全国ベスト32) 昭和46年 インターハイ 東京都予選 団体ベスト8 同年 東京都新人戦 団体戦 ベスト4 同年 第3学区都立戦 団体・男子複・混合複・単 優勝 昭和47年 東神大会 団体戦 東京都代表 同年 関東大会 25期 庄司 裕 シングルス 東京代表	0407 日本で2回目の世界選手権「第31回世界選手権名古屋大会」が開催される。今大会が米中、日中の国交回復のキッカケとなり「ピンポン外交」という言葉が生まれる。 日本選手決勝記録】 女子団体:日本 3-1 中国 (男女団体とも日本と中国で決勝) 日本卓球協会が「アジア卓球連盟 (TTFA)」を脱退する。	05.14 群馬県の連続女性誘拐殺人事件の容疑者・大久保清逮捕 06.27 第9回参議院選挙でタレント候補大量当選 07.20 日本マクドナルド、ハンバーガーショップ1号店、銀座に開店 12.18 10カ国蔵相会議で「スミニアン体制」が発足 1ドル360円時代終わる
1972	25-27期	27期生の入部 伊藤、宮原、長谷、浮洲、安部、前田、宮辺他計14名 3期 荻村伊智朗 「卓球教室」(大修館書店)荻村伊智朗・藤井基男・木村興治・山中教子 共著 25期 近光護 インターハイ東京代表 16期 中村明彦 米国出張中にカンサスオープンで単優勝 第3学区都立戦 男子団体・男子複・男子単・混合複 優勝	「アジア卓球連合 (ATTU)」が結成され、日本卓球協会が加盟。 「第1回アジア選手権」が北京で開催される。	01.08 各社、佐藤・ニクソン日米首脳会談で、衛星中継による特別番組 01 横田庄一元軍曹、28年ぶりにグアムで発見 02.19 連合赤軍の5人、浅間山荘にたてこもる「浅間山荘事件」 05 沖縄施政権の返還 08.26 第20回オリンピック・ミュンヘン大会開幕 10.01 道路交通法改正(初心者マークの貼付義務付け) 11.05 上野動物園で中国政府寄贈のパンダ「カンカン」「ランラン」を初公開
1973	26-28期	28期生の入部 石塚、川端、斉藤、田中、長畑、井出、牧野他計25名 3期 荻村伊智朗 ITTF(国際卓球連盟)理事に就任	世界卓球選手権サラエヴォ大会 【日本選手決勝記録】 女子ダブルス:浜田美穂・アレキサンドル (ルーマニア)	01.27 ベトナム和平協定調印 05.06 公営出身の人気4歳馬ハイセイコー、NHK杯1着で10連勝 09.05 国鉄中央線にシルバーシート登場 11.02 第1次オイルショックにより、関東・関西でトイレトペーパー、洗剤買いだめ騒ぎ 10 第4次中東戦争勃発、石油危機
1974	27-29期	29期生の入部 白山、徳重、野間、橋本、藤井他計16名		03.10 旧陸軍少尉小野田寛朗氏、30年ブルにフィリピン・ルバング島で発見 04 北海道愛国駅で幸福駅行き乗車券発売 05.15 イトーヨーカ堂初のコンビニエンスストア「セブン・イレブン」を開店 10.14 ジャイアンツ長嶋茂雄引退
1975	28-30期	30期生の入部 木谷、加藤、大島、三木、安田、小久保他計14名 1975年6月 西高体育館でサウジアラビア卓球団との親善試合、男子部員が対戦。 メンバーは近光(25期)、川端(28期)、石倉、清水、種村(29期)、酒井(30期)、 女子は宗教上の理由で対戦不可。	世界卓球選手権カルカッタ大会 【日本選手決勝記録】 女子ダブルス:高橋省子・アレキサンドル (ルーマニア)	04.30 ベトナム戦争終結 10.15 広島東洋カープ結成26年で初優勝～赤ヘルブーム～ 12.10 3億円事件時効 12.18 タバコ大幅値上げ、セブンスター100円から150円に 12.24 2兆2900億円の初の赤字国債発行



座談会 Part.2



1966(20期)～1975(29期)

卓球強豪校として都立大会や全国大会にも名を馳せていた20～29期。

西高としては校舎の建て替えにより練習環境が改善された時期でもあります。
世代の近い皆さんに和気あいあいと当時の思い出を振り返っていただきました。

厳しい練習環境にも負けず

— 皆さんが在学されていた頃の西高卓球部はどのような感じでしたか。

●吉田 わりと実力者が多くて強かったので、第三学区の都立大会はほとんど優勝していましたよね。団体戦で東京都ベスト4に入り、東神大会に出場したり、個人戦では近光君が全日本Jr.で3回戦進出やインターハイ東京代表、庄司君が関東大会に出場したりしていましたから。

●近光 でも、正直に言って練習環境が良いとは言えなかったです。改築前の体育館だったので非常に古く、照明も暗いから夜6時頃には球が見えなくなってしまうほど。体育館の改築中は渡り廊下に卓球台を並べて練習していました。だからこそ、勝つための工夫を重ねて上達できたのかもしれない。

●小澤 私たちは近光さん達の1期下の世代ですが、その時から既に神のような存在でしたよ。あの頃の西高卓球部というと、都立高校としてはありえないほど強かったと思います。渡り廊下での練習も伝説的エピソードとして耳にしていました。

●坂上 確かに、古い体育館のありさまと言ったらすごかった…。校舎も体育館も木造でボロボロでしたもん。

●志賀 床が盛り上がっていたし、窓が割れているから風が吹き込んで、サーブを打つとカーブするほどでした。

●吉田 いやいや僕らは、小澤君達の世代の練習を信じられない思いで見っていましたよ。合宿の時など、平気な

顔で1000回ジャンプしていましたから。

●小澤 井の頭公園を1周して、ダッシュ10本やって、最後に1000回ジャンプで締めるんですよ。

●中石 私の代からすると、小澤さんからの指導がとても厳しかったです。先代もその上の世代もすごく強くて、そのプレッシャーに打ち負けてしまった世代としては(笑)、とにかくみんなで仲良く頑張ろうという意識で練習していました。

●吉田 あと、合宿と言えば昔の西高会館は本当に暑くて…。当時はもちろん冷房なんてないし、あまりに暑いから顧問の古川先生が大きなスイカを3つ差し入れてくださったのを覚えています。

●志賀 しかも、ただでさえ暑いのに先輩方が卓球について熱く語るんですよ。とても寝かせてもらえないんです。あまり真剣には聞いていませんでしたが(笑)でも、根底にあるのは上下関係なくみんなで一緒に練習して上達しよう、という発想なんですよ。それはたぶん、今も昔も変わらない西高ならではの雰囲気なのではないでしょうか。

●中石 私が忘れられないのは、先生や守衛の松崎さん(愛称:ポッポ 坊主)によく叱られたこと。先生に「体育館履きで外を歩くな!」と怒鳴られたり、こっそり練習していたら木刀を持った守衛さんに追いかけて回されたり…。それでもみんな一致団結して頑張っていたので、今では良い思い出です。

個性的なメンバーで切磋琢磨

— 女子の方はいかがですか。
印象深い思い出などはありますか。

●横山(旧姓:森田) 私たちが在籍していた時は女子が全部で6名だったでしょうか。

●坂上 みんな仲が良かったですよ。でも個性的で自己主張が強いから、ユニフォームが揃わなかったんですね。

●田口 確か、黒と紺で意見が分かれたんです。

●横山 そうそう、バッグも買う人と買わない人がいたから、同じ西高卓球部なのに全然統一感がなかった(笑)

●田口 基本的には仲が良かったし、すごく楽しかったのは間違いありませんけどね。

●坂上 女子は人数が少ないから、特に渡り廊下で練習していた頃は、卓球台を1台しか使えませんでした。

●志賀 そう言われると、渡り廊下に卓球台を縦に並べて練習していた覚えがあります。そこで合宿をしていた時に、突然荻村さんがいらっしたんですよ。

●近光 大きさではなく、後光が射して見えたんです。びっくりしすぎて固まってしまいました。

●横山 「見に行かなくちゃ!」ってみんな大騒ぎでしたよね。

●吉田 荻村さんと言えば、スウェーデンサウジアラビアの卓球選手や世界選手権女子団体優勝の全日本チャンピオン山中教子さんや世界選手権代表の古川敏明さんを西高に連れて来ていただき、現役の高校生の指導を下さいましたね。

●志賀 スウェーデンの選手は体育館が完成する前にデモンストレーションを富士高校の体育館を借りて実施したんですよ。

●近光 今考えると、ずいぶんとありがたい経験をさせてもらったなあと思いますよ。



未来につながる部活動

— 最後に、後輩の皆さんへのメッセージをお願いします。

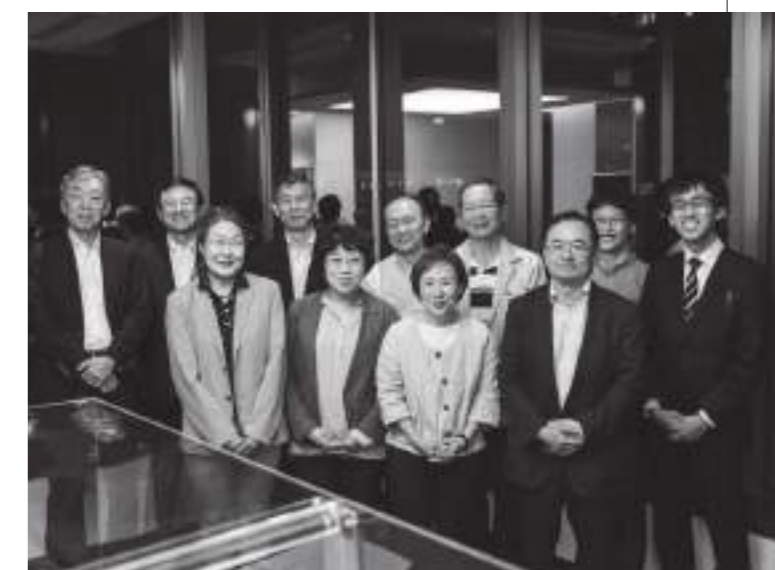
●田口 何かひとつでも頑張っただけという経験は、この先いろいろなことを乗り越える糧になるはず。その頑張りを、未来につなげていってください。

●小澤 卓球は60歳を過ぎてでも高校生と対戦でき、さらに長く続けていける生涯スポーツです。素晴らしいスポーツなので、皆さんも長く続けてほしいと思います。

●坂上 西高卓球部時代の思い出は素振りや球拾いばかりでしたが、トレーニングのおかげで持久力がつきました。トレーニングは大変ですが、一生ものと思って取り組んでほしいですね。

●中石 部活動を頑張ることで、良い思い出がたくさんできると思います。また、卓球を通じていろいろな人と親しくなり人脈の輪も広がるので、一生懸命頑張ってください。

●吉田 部活動を通じて築く人間関係は、かけがえのないものです。つらくてもあきらめることなく、頑張ってくださいね。



(後列左より) 25期:近光 護、23期:吉田 詠一、24期:志賀 朗、26期:小澤 彰、16期:中村 明彦(事務局)、63期:山口 敦史(事務局)、64期:山井 直樹(事務局)
(前列左より) 25期:坂上 みつ子、26期:田口 裕子、25期:横山 亮子(旧姓:森田)、27期:中石 厚

第三章 1976-1995

発展期 第三期黄金時代



執筆

31期 今泉 忠淳

33期 赤司 俊彦

38期 木村 明以子(旧姓 谷)

41期 鴨井 暁比古

42期 山川 元

48期 小川 恵梨子

卒後37年

西高卓球部OB・OG会の皆様。大変ご無沙汰しておりますが、このほど西高卓球部創部70周年とのこと、おめでとうございます。西高卒業から37年を経て、西高卓球部現役のころのことを思い出そうと、記憶の引き出しを開けようとしても、だいぶんさび付いておりますので、近況をご報告させていただきます。

西高卒業後は、青森県弘前市（ひろさき）にあります、弘前大学医学部に進学し、現在は、弘前大学大学院医学研究科の脳血管病態学講座という講座の教授職を務めております。講座は基礎医学系に属しており、動脈硬化や慢性炎症性疾患の基礎研究を行っております（HP：http://timaizum.wix.com/vbversion2、ブログ：http://vascularbiology.blog.fc2.com/）。また、医学生教育や管理業務などを担当しております。卓球はもう随分とやっていますが、弘前大学医学部卓球部の顧問を務めております。

西高卓球部にはすっかりご無沙汰しておりましたが、今年の春、筑波大学医学部の教授（疫学）を務めておられる33期の我妻ゆき子さんが、会議のため弘前大学に来られ、本当に久しぶりに懇談させていただきました。また、現在東京女子医大の教授（消化器内科学）を務めておられる29期の徳重克年先輩と、はじめて電子メールでのやりとりをさせていただきました。徳重先輩や我妻さんとは、大学生の時に東日本医科学生体育大会の卓球部門の試合会場でお会いして以来でしたので、30数年ぶりでした。

数年前に西高同窓会東北支部が設立されましたが、今年の7月に、仙台市で開催されました総会に出席してきました。その会では、現在東日本大震災の復興にあたっておられる26期の迎田克介先輩や、東北大学にお勤めの39期の小倉振一郎さんにお目にかかりました。

現役時代は、私自身は卓球を好きでしたが弱かったです。一生懸命練習しましたが、強くはなりませんでした。一学年上の30期の酒井先輩のドライブ、白谷先輩のカットや津田先輩のフットワークが大人に見えました。試合の帰りに、やはり30期の小久保先輩の実家のお蕎麦屋さん（と思う）に行ったこともありました。当時の部活動では、23期の吉田先輩、24期の山岡先輩、25期の市川先輩、浦久保先輩、小堀先輩、庄司先輩、近光先輩をはじめとして、多くの先輩方にお世話になりました。大変遅くなりましたが、この場を借りて御礼申し上げます。

西高卓球部OB・OG会の皆様および西高卓球部の現役生諸君の益々のご健勝とご発展を祈念しております。当地は、司馬遼太郎氏が「北のまほろば」（朝日文庫）で述べているように、海の幸、山の幸にめぐまれた、四季のあざやかなところ。近くにお越しの際には、是非、お立ち寄りください。

Never Mind the Bollocks, Here's the 西高卓球部

スポーツ、歴史、いや人生に「たれば」は禁物である。まして学生時代のことなら尚更。

「本能寺の変で織田信長が死んでいなければ…」
「坂本龍馬が近江屋に行かず暗殺されてなければ…」
「作新学園 銚子商業で延長後に雨がひどくならなかったら…」
「イラク戦のロスタイム、警告覚悟でタックルに行ったら…」

現在は過去の延長にある。「起きたこと」と「起きなかったこと」を比較検討するのは現実逃避である、という意見を認める。やりたくない、かっこ悪い。

だが「もし」のことを考えると楽しい、わくわくする。夢、ロマンがある。と同時に耐えがたい後悔、無念がつかまとう。

中村、吉田両先輩から70周年記念誌の依頼が来たとき正直「これはやばい」。一応キャプテンだったし書かなアカンかな、とも思ったが出来るなら墓場まで持っていきたい。が、人生50年を過ぎ、西高時代「最大の思い出」を公表するのも最初で最後、ここに記す。

当時、男子の卓球部は少し強かった。まあ長い歴史の中で見れば誤差の範囲だが本当に少し強かった。何の大会か忘れたが悲劇は起こった。

高体連の東京都・団体戦予選、レギュラーは私と石田、松村、一学年上のT先輩。石田はカットマンで私と同じ石神井西中出身。何万、何十万と彼のカットを打っていたので私は都の代表クラスのカットマンに負けなかった。松村もカットマン。この環境なら誰でもカット打ちの名手になる。

接戦を勝ち続け6 or 7回戦、相手は日大一高。何故か強豪校が相手ブロックに集まり勝てば「東京都代表!!!」である。こんなチャンスは高校時代もう二度と来ない、と判っていた。実際そう思って試合に臨んだ。

団体戦は4単1複、順番は単単複単単。こちらはエースがT先輩、二番手が私。向こうは超エースがカットマン、二番手もカットマン。万が一オーダーが良ければ、と思っただけでなんとなんと大当たり!! 単1で私と二番手カットマンがぶつ

かり、複を死ぬ気で取れば他を落としても2-2で単4のT先輩が相手の四番手と当たる。最後に回せば勝てる! この四番手氏はかなりレベル低く初めの挨拶時から敵軍は混乱、「オーダー外れた」「西なんかにまけたらマズイ」等内輪もめ状態。四番手氏は泣きそうな顔で戦意喪失。

試合経過は予想通り。トップで私が鬼気迫る気合で相手を粉碎、複（T先輩・私 Vs カットマン二人）も二番手カットマンが私と相対してから調子悪く「ダブルス負けたら俺達、本当に負けるんだぞ」と相手ペアが言い合い、喧嘩してたこともあり辛勝。次の単落としたがさあ、T先輩だ。俺達全国大会行けるんだ。熊谷商業の斉藤清と当たったらどうしよう、いや試合したいな…

結果はT先輩の惨敗、失点シーンは今でもはっきり次々に思い出す。いや、忘れられない。高1の4月に会って以来星の数ほど先輩のプレーを見たがこの時が最低最悪。ああもう書けない、書きたくない…

T先輩は今でも尊敬している。先輩がいなければ私は途中で退部していた。大学時代も卓球を続けられたのは先輩の指導、助言のおかげです。

（約35年前の出来事を誰にも相談せず資料も見ず、私の記憶だけで書いた。9割の事実と1割の創作。）



33期 赤司 俊彦さんの投稿「追憶」

38期 木村 明以子 (旧姓 谷)

今に昔に想う卓球

まず、70周年心よりお祝いを申し上げます。

歳とともに記憶容量がどんどん小さくなっており、あとからの生活にうわ書きされて、高校時代のことは正直とても頑張らないと掘り出せない。機会を与えてくださったことに感謝します。

38期卓球部は男子三人女子四人。当時のルールでは、一学年だけでは団体戦にどちらも足りない。ブチョートムヒデチカユカカシメ、と並べてみるとおまじないのように一瞬にして呼び終えられる人数だ。先輩方はそれなりにお強かったと記憶しているが、なぜか我々の代はのほほんとして見えたらしく、「走る文化部」なるありがたくないあだ名を頂戴した。そのかわり走ることは合宿等で鍛えられたせいか、皆そこそこ速かったかつ持久力勝負の中距離に強かったので、クラスマッチは本戦の卓球と駅伝、二度役に立つお得なメンバーであった。

高校生なので仲間内共通語を喜んで作り、決め台詞として多用するのが嬉しいのである。

「脇が甘い」「戻りが遅い」

当時コーチに来てくださっていたOBの先輩に何度もご指導を受け、そのうちに部活のみならず学業をはじめとする高校生活全般に使用するようになった。お互いでもよく言い合っただけで笑った。個人的には、要するに「迂闊」と理解していた。卓球は瞬間をつなげていくスポーツで、目の前の瞬時をこなしたらその次に来るものを予測していないと棒立ちである。どう動けばいいのかをシミュレートできないと打ち返しても結局点を取られる。現在でも、実生活において時折しみじみ、ああ今脇が甘かったなあ、と感じることがある。この言葉に関しては今でも、大げさにいえば人生哲学的にお世話になっている。

「ナイス○○」

別に特別な言葉ではないが、ナイスサーブ、ナイスレシーブ、

ナイススマッシュ、という中で、一回だけ部内戦で「ナイスネットおお！」との絶叫応援があったのを妙におぼえている。公式戦だったらスポーツマンシップ的にガッツポーズ以前の所業だが、そのときは校内紅白戦で、格上の対戦相手からの貴重な得点、言いたい気持ちがよくわかるシーンだった(多分)。うっかりネットにかかったボールが何とか相手側に入ってくれてポイントになった時のなんともいえない心境？は、正直喜び方を探すのに苦労した。同様の状況で「ナイスエッジ」も、ともに公式戦では絶対のご法度であるが、「ラッキー」とは違う空気感を眩きたいこともあったように思う。

38期7人はわりあいと仲良く卒業旅行に河口湖へ遊びに行き、帰宅日に大雪に見舞われた。帰宅を試みたものの大月～八王子間が運休となってしまい、結局元の宿まで引き返して温情価格でもう一泊した。随分と忘れていたが、結構典型的な「思い出」である。

大学はほぼ男子校だったので、体育は卓球を選んだ。西高では学年で一番弱かった私でも、さすがに素人よりは強かったので、同級生相手に打ちまくって発散していた。

最近たまにご近所の卓球サークルに参加して打たせてもらっている。60歳から始めたのよとおっしゃりながら華麗なラリーを展開するマダム。ドライブ難しいわねと御年70歳のご婦人。超高校級の中学生とその父上。ここでも私は確実に一番格下で、でも行けば結構楽しい。ドライブのフォームをほめられたりすると、部活動を思い出す。

久しぶりに張り替えたラバーが高くてびっくりしたが、そしてボールは何やら大きくなって打感が少々変わったが、まだ卓球と関わっていることにも、今感謝している。

それにつけても水谷凄いですね！（これで入稿時期が知れます。編集の方申しわけない）

41期 鴨井 暁比古

昭和最後の三年間

70周年、おめでとうございます。41期の私が入部して30年になりますが、それでも半分以下であることを考えると歴史の重みを感じます。在学当時を振り返り、少し記したいと思います。

<昭和最後の3年間>

私が西高在学中の1986～88年といえば、男子は斎藤清・小野誠治、女子は星野美香が全盛期でした。特に小野選手のカミソリスマッシュには強く憧れて、少しでも近付こうとマネしたのですが、今となっては当時の38mmセルロイド球のような軌道の球が打てるはずありません。

当時の活動を思い起こしてみますと、練習は週3～4日、体育館の半面に6台ほど並べて練習していました。現在の格技棟は在学中か卒業間もない頃に完成したと記憶しています。夏合宿は秩父の美津根園へ行きました。その成果はと言いますと、先輩方の輝かしい戦績とは程遠いものでした。私立高校はやはり強く、実践商業(実践学園)を筆頭に、日大・明治・早稲田・帝京・東海大などの付属や、国学院久我山、関東一高、堀越、修徳、また都立では永山などが強豪校として記憶にあります。

また在学中のOB会で一度、大先輩荻村さんにお目にかかる機会がありました。お忙しい中、夜の会だけご出席いただき、ご自身の世界大会のビデオを上映して解説をしていただいたのを覚えています。

<国公立大会>

そんな中、私立には歯が立たない我々でも上位を狙える大会が東京都の国公立大会でした。八丈島からは都立八丈高校も船でやって来るとあって、参加校は120校以上とそれなりにやっつけ甲斐のある大会ではありました。

私が3年生の1学期にクラスマッチのハンドボールで肋骨4本骨折し、引退試合となる夏の国公立は諦めていました。しかし申込間近になって回復し、決まりかけていた団体戦メンバー(4人)を再考しようと申し入れ、ゲームで再選出して私も出場することになりました。(間際で次点となった2年の伊東君には申し訳ないことをしました。)

無理矢理メンバーになったものの私は4番手の捨て駒

で、他は1年生でエースの山内君、2年生からは山川君と私の弟でした。余談ですが私たち兄弟と山内君は練馬の石神井中、山川君はお隣の上石神井中出身ということでご近所さんのチーム編成となりました。

当日は、とにかく相手のオーダーを読んで私をエースに充てる作戦を貫き、それが功を奏して7回勝ち続け優勝することが出来ました。全部は覚えていませんが、日比谷・戸山といった宿敵や強豪永山をも下しての優勝だったと記憶しています。

<近況報告>

卒業後はしばらく卓球から離れ、今でも続いているバンド活動に傾倒することになりますが、数年後からは時々OB会に参加させていただくようになり、最近では地元の市立体育館で活動するクラブで毎週末、息子と一緒に卓球をしています。

卓球を再開して間もない頃、某市のオープン大会に参加した際に新しいウェアが無く、西高時代のユニフォームを引っ張り出して着ました。すると若い対戦相手から「西高のOBの方ですか？荻村さんの高校ですよ」と声をかけられ、改めて大先輩の偉大さを実感したのでありました。

最後になりますが、歴史を築かれた先輩方やOB会で快く迎えてくれる若手の方々のさらなるご活躍と、100周年へ向けて西高卓球部が益々発展されますことを期待しております。



(後列左より)岩尾先生、前中先生、山本先生
41期の女子部員2名と男子部員9名、後列右端が鴨井

1988年の国公立大会

42期副部長兼キャプテンの山川元です。このたびは70周年の記念部史に寄稿させていただき、ありがとうございます。そこで、1988年の夏に行われた国公立大会（東京都全体の国立高校および都立高校の大会）の男子団体戦について、しかもその中でも主に僕の試合について、おそらく必要以上に美化された記憶にもとづいて書きます。かなり話を盛ってるなどお思いになる方もいらっしゃるでしょうが、そこも含めて楽しんでいただければ幸いです。

国公立大会は当時から大規模な大会で、男子団体戦は100校以上が参加、男子個人戦に至っては800人以上が参加していたと記憶しています。当時の団体戦は4単1複で3点先取、ダブルスの2人はシングルスにも出場できる（ただし1番・2番の選手でダブルスを組むことはできない）というものでした。そのため、出場校には4名で編成したチームが多く、その年の西高も部内のレギュラー決定戦を経て4名でチームを組んでいました。前年度、あえて6名で団体戦のチームを編成してベスト16で敗退していたのですが、この年は、絶対的エースである山内君（この大会の個人戦でベスト8）の加入が大きかったように思います。メンバーは、3年生の鴨井君（兄）、2年生の鴨井君（弟）、山川、1年生の山内君で、鴨井君（弟）と山内君がダブルスを組みました。ちなみに、当時の試合は21点3セットマッチ（2セット先取で勝利）、サーブは5本ずつで交代するというものでした。

2回戦で同じ第3学区（中野区・練馬区・杉並区からなる学区）の強豪校である都立大泉北高校（1986年の国公立大会優勝校）を3-0で破って勢いに乗った僕たちは、順調に勝利を重ね、ベスト8進出を決めて、前年度には残ることのできなかった大会3日目（8月20日だったと思います）に都立保谷高校へと赴きました。準々決勝の相手は、前年度団体戦3位の強豪、都立戸山高校です。3年生のM君・2年生のF君という2枚看板が1・2番にくることはわかっていたので、僕たちは4・5番に鴨井君（弟）と山内君を配して後半勝負に出ました。

僕は2番でF君と対戦することになりました。F君は、

右利きのペンホルダーで表ソフトラバーを貼っており、ミスの少ない堅実なプレーをする選手でした。その大会の個人戦で準優勝、翌年の個人戦でも3位という実績に、安定した強さが表れています。ところで、そこでの対戦のたった4日前である8月16日に、F君と僕は試合をしていました。場所は高田馬場の国際卓球です。当時の国際卓球は現在とは違って、高田馬場駅から新大久保・西武新宿方面へ線路沿いを数分歩いたところにあり、ショップの奥に狭いながらも2台分の卓球スペースがあって、空いてさえいれば打たせてもらえました。F君も僕も、国公立大会を前にラバーを貼り替えに行ったところでバッテリー会い、もともと知り合いではあったもののいっしょに打ったことがなかったのもあって、試合をしようということになったのだと思います。結果は0-2で完敗。1セット目は16-21となんとか形になったのですが、2セット目は8-21だったと記憶しています。何もさせてもらえませんでした。2〜3ランクほどレベルが違って、10回試合をしたら10回負けるような実力差を感じるほどの衝撃がありました。団体戦準々決勝の2番で再戦することがわかったときも、「よし、今度こそやってやろう!」という雪辱を期すような気持ちになれたという記憶がありません。

そして、試合が始まりました。特に作戦を練ってプレーしたわけでもなく、意識的に何かをしようとした記憶もないのですが、1セット目は22-20（だったと思います）で取りました。取ったとはいえ、終盤は危うい展開、正確には自分で危うくしてしまった展開でした。実は、20-15とセットポイントを握ったところで僕にサーブ権が回ってきました。もちろん、絶対に有利な状況です。そして、あろうことか、このセットはなんとかなるだろうと慢心してしまったのです。当時の僕の中心的なサーブは、バックでの横下回転、横回転、横上回転をわかりにくいフォームで組み合わせるアップダウンサーブやロングサーブ・ナックルサーブ、そして今も多くの人が使うフォアの横回転系のサーブでした。大事な場面では、しゃがみこみサーブなども出していました。ところが、20-15からは、初心者が最初に練習するようなフォアの真下回転のサーブを出し、そこからツツキをするという展開で21点目を狙ったのです。今振り返ると、楽をして

相手のミスで取りたい、エースサーブは2セット目のために温存したい、というような心理が働いたのだと思われま。結果として、20-20の同点に追いつかれました。そのあとはどうやって2点取ったのか憶えていません。偶然勝てたとしかいいようがありません。現在、都内の男子校で卓球部の顧問をしている僕が生徒にいつも言うのは、「セットポイントを取ったら次の1点はどんなに汚い手を使ってもすぐに取れ」ということです。そこから逆転されれば、もちろんダメージは大きいですし、たとえ逆転されなかったとしても、追い上げられた流れで次のセットに入ると、試合の流れが相手に傾いてしまうからです。実際、あのセットを逆転で失っていたら、2セット目はまったく違ったものになっていたと思います。

2セット目に入り、両面裏ソフトのシェークハンドだった僕は、台から少し離れ、中陣から回転量重視のドライブをかけて相手コートの深いところに押し込むというプレーを、意識的に展開するようになっていたような気がします。4日前の国際卓球では場所が狭かったために前陣でプレーせざるをえなかったと思うのですが、小細工やコース取りなどでは歯が立たなかったため、広い試合会場で、「最初から意識的に」というわけではなかったにせよ、自然と大きな打ち合いの展開へとっていったのでしょうか。また、F君はブロックが上手で、こちらが前陣で決めにいった速いボールをブロックで反対側に返球されると、自分の体勢を立て直すことができずに自滅してしまうということもありました。したがって、僕のボールは速いというよりもループドライブのような回転量の多いボールで、バウンドも高かったと思います。そして、そのようなボールを深いところに押し込み、しかもコースもほどよく両サイドに分散していたはずなので、F君にとっては小細工がしにくく、得意の器用さを発揮できない状況だったのだと思います（F君はミスが少なくテクニックもあったのですが、強烈なボールで打ち抜いて相手を圧倒するというタイプではありませんでした）。F君に強打されるということは少なかったため、試合は僕がやや押し気味に進め、終盤に20-18とマッチポイントを握りました。しかし、さすがはF君、そこから追いつかれて20-20となり、1セット目に続いてデュースとなりました。20-20から、

僕はしゃがみこみサーブを出しました。いざというときのエースサーブです。しかし、F君は強烈な横回転をうまく吸収してきれいに僕の体の正面にレシーブしてきました。当時の僕のプレースタイルは、バックハンドは基本的につなぎ程度で、なんでもかんでもフォアのドライブで打ち抜くというものだったのですが、このときばかりはバックハンドでスマッシュを打つということに迷いを覚えませんでした。ボールに正対したまま右足を踏み込んで思い切り叩いた場面を、今でもスローモーションのように思い出すことができます。また、しゃがみこみサーブからの3球目バックスマッシュという展開も、僕のささやかな卓球人生において他の場面では思い出せません。その後、一度は追いつかれたのですが、最終的には名手F君のネットミスによって23-21で勝利しました。あのバックスマッシュがきれいに決まったことでF君にプレッシャーをかけることができ、再び流れがこちらに傾いたのだと思います。

F君と握手を交わし自陣に戻った僕は、感情を制御することができなくなり、タオルに顔をうずめて泣きました。勝ち負けにかかわらず、試合後に泣いたのはあの時が初めて最後です。団体戦は2番山川、3番ダブルス、5番山内君が取り、4番の鴨井君（弟）はセットカウント1-1（だったと思います）、スコア6-6という互角の戦いを途中で終えました。（ちなみに、戸山高校は5人でチームを編成しており、F君はダブルスに出ていませんでした。ダブルスではパートナーとの相性などが大切ですし、当時の戸山高校の事情もわからないのですが、1・2番で出場していたM君・F君の2人がもし仮にダブルスを組んでいたら、僕たちはもっと苦戦していたかもしれません。）団体戦の挨拶を済ませた後、鴨井君（弟）との激戦を途中で終えた戸山高校のT君が僕に話しかけてきました。「おまえ、うまくやったな。あいつ（F君）に勝つにはあのやり方しかなかったよ。」

戸山高校との激戦を制した僕たちは、準決勝で都立永山高校と対戦することになりました。永山高校のエースである1年生のK君は、その大会の個人戦で優勝、翌年も準優勝した強者で、こちらが勝つためには、K君以外の3本を確実に取らなければならない状況でした。とはいえ、K君と同じ1年生のS君も実力者だったので、オーダーには

苦慮したような気がします。S君は、左利きのシェークハンドでフォア面に裏ソフトラバー、バック面には粒高ラバーを貼っており、粒高ラバーで相手を揺さぶってチャンスボールを作りフォアでスマッシュを決めるというタイプでした。(ちなみに、K君も左利きだったので、永山高校の団体戦のダブルスは左利き同士でペアを組んでいて、なかなかの見物でした。)

ところで、実はその2日前である8月18日に、S君と僕は個人戦の2回戦で対戦していました。結果は0-2で敗戦。当時の僕が粒高ラバーを苦にしていたというわけではなく、敗因はひとえにS君のナックル性ロングサーブを処理できなかった点にありました。左利きのS君が、S君のバックサイドから右利きの僕のバックサイドにロングサーブを出してくるのですが、ある程度スピードがあるのに加えて、1球ごとにタイミングやバウンド後の伸びが少しずつ異なる絶妙なナックル性だったために、当時の僕のバックハンドの技術ではS君の3球目攻撃を封じるような返球ができなかったのです。すべてバックハンドドライブで返すには技術的に安定感がなく、合わせ打ちをするとネットミスになることが多く、ツッツキのように少し面を上に向けると飛ばされてしまってS君にとってのチャンスボールになる、S君が左利きであるがゆえにストレートの速いサーブに対してフォアで回り込むのも難しい…手をこまねいているうちに負けてしまいました。前年度1年生の際に4回戦か5回戦(実は細かく憶えていません)まで勝ち上がっていた僕には、2回戦敗退はたいへんショックで、どうすればよかったのかと考えながらいつまでも心の中でその敗戦を引きずっていたように思います。

団体戦のオーダーについては、みんなで次のように相談した記憶があります。K君は確実に1番にくるから、4番か5番でS君に勝たなければならない。粒高ラバーを苦しめないという点では、4番・5番は山内君と僕がいいだろう…その結果、(はっきりとは憶えていないのですが、)山内君には4番に入ってもらったような気がします。僕は5番でした(これははっきり憶えています)。そして、S君と再戦することになりました。

準々決勝で戸山高校のF君との再戦が決まった際、試合

が始まる前は勝てる気がしていなかったと思います。しかし、準決勝でのS君との再戦では、勝てるという確信をもって試合に臨んだ記憶があります(だからこそ自分から5番に入りました)。そして、試合が始まり、待っていたナックル性ロングサーブが来ました。その瞬間、僕はやや後方に下がり、打点を落としたバックカットで返球しました。その後も、S君が得意のナックル性ロングサーブを出すたびに、僕はバックハンドでカットをしました。2日前の試合でS君に敗れた後、長時間にわたってその試合を振り返っている中で、僕はS君に強烈なドライブをほとんど決められてはいないということを意識していました。S君の得点源はサーブとスマッシュ、ドライブのような軽打もあるが、普段から鴨井君や山内君の強烈なドライブを受けている僕には十分ブロックできる、ナックル性ロングサーブは1球ごとに変化がついているから、見極める時間を作るために打点を落とすほうがいい…これらを総合して出した結論が、カットによるレシーブでした。そして、作戦的中しました。S君に決められたスマッシュはほとんどなく、サービスエースもほとんど取られなかったと思います。S君の軽打から始まる打ち合いの中で僕がミスをすることはあったでしょうが、試合の後半ではS君のサーブを見極めた上で切れたカットとナックルカットを混ぜる余裕も生まれ、S君のミスを誘っていたように記憶しています。結果は2-0で勝利。スコア的には2セットとも10点以上取られたはずですが(よく憶えていなくてすみません)、スコア以上に気持ちで押し切ることができた試合だったという手応えがありました。

団体戦としては、おそらく2番だった鴨井君(弟)、おそらく4番だった山内君、5番山川が取り、4台進行(シングルス4試合同時進行)だったためダブルスをしないまま西高が決勝進出を決めました。

ちなみに、その年の秋の新人戦だったか、関東一高での試合の際に、待機していた僕のところにボールが飛んできました。そのボールを拾い、取りにきた選手に返してあげようとしたところ、相手は試合中のS君でした。S君もボールを拾ったのが僕だと気づき、瞬時に挨拶代わりの笑顔を返してくれました。ひと言ふた言、言葉を交わしたかもしれませんが、はっきりとは憶えていません。ただ、その一瞬の

うちに、2試合を全力で闘った者同士の絆(僕の好きな言葉でいえば「共犯関係」)が感じられたのも忘れたい思い出です。

決勝戦の相手は、前年度優勝校、したがってその大会の第1シードになっていた都立清瀬東高校です。Ka君(右ペンホルダーのドライブマン)とKo君(右ペンホルダーの表ソフト前陣速攻)の両エースを擁して、この年も決勝まで進出していました。僕たちとしては、やはりKa君、Ko君、ダブルスのうち、少なくとも1本は崩さなければなりません。Ka君とKo君以外の2人についてはそれまでの試合を見ておらず、まったく情報がなかったのですが、チームが決勝戦まで進出している以上、当然かなりの実力があると思われれます。ただ、カットマンや粒高ラバーを貼った選手など、相性を考慮しなければならぬ相手がいる様子ではなかったため、僕たちもオーダーを考え過ぎることなく、シンプルに決めたとします。僕の記憶では、1番か2番のどちらかで鴨井君(弟)がKo君と対戦し、4番で僕がKa君と対戦しました。

実は、決勝戦でのKa君との試合展開については、あまり詳細を憶えていません。準々決勝戸山高校戦でのF君との試合、準決勝永山高校戦でのS君との試合は、両方ともほんの数日前に負けていた相手だったという点で共通しており、どのように雪辱したのかという過程を自分なりに分析できているのですが、決勝戦でのKa君との試合にはそのような過程がなかったために、言語化された振り返りができていないのだと思います。ただ、当時の僕にとっては最も多いパターンだったドライブマン同士の試合で、実力も拮抗していたため、先手を取って攻撃したほうが有利に試合を進めるという展開だったと思います。

準決勝に続き、決勝戦も4台進行だったため、自分の試合をしながらチームメイトの状況もつねに確認していたのを憶えています。僕が1セット目を落としたときには、鴨井君(弟)も1セットを失っていました。予想されていたとはいえ、苦しい状況です。しかし、準々決勝・準決勝と1番で出場してエース級の選手の相手を引き受けてくれた鴨井君(兄)が、決勝ではこれまでの鬱憤を晴らすかのような深

刺としたプレーを見せていました。山内君は、あいかわらず安定した試合運びをしています。鴨井君(弟)が僕が逆転すれば、大会参加前には想像もしていなかった優勝が現実のものになりそうでした。

僕が2セット目を取りかえたとき、すでに他の3試合は終わっていたような気がします。団体戦としては2-1でリード。僕が勝てば優勝が決まるというおいしい状況で、都立保谷高校の体育館の満場の注目を浴びて3セット目が始まることになるのですが、その前に1つエピソードがあります。準決勝でのS君戦のときには記憶がないのですが、決勝のKa君戦では、僕はセット間のアドバイスを西高のチームメイトのところだけでなく、試合を見てくれた戸山高校のF君のところにも求めに行っていました。そして、今でも2セット目が終わった後のF君のアドバイスを憶えています。「このままの流れで大丈夫。(君は)サーブの種類が多いんだから、いろいろ出せば相手が浮かせてくるから。」そのときの僕は、リスペクトしているF君にそう言われたので、「じゃあ、持っているだけのサーブの種類を全部出そう。」と素直に思った記憶があります(今振り返ると、その言葉にまた別の意味を見出すこともできますが、もちろん当時の僕にとって背中を押してくれる言葉であったことに変わりはありません。)

ところが、3セット目で記憶に残っているのは自分がサーブを出している場面ではなく、終盤19-14でリードしている場面、しかもサーブ権がKa君にある場面からです。その場面での僕は、どうしてもバックドライブを1本決めたい衝動に駆られていたように思います。そして、実際Ka君のバックからのサーブがバッククロスに入ってきたところを、バッククロスにツッツキでレシーブし、3球目でKa君もバッククロスにツッツキを送ってきたのを狙いすましてバックドライブを決めました。当時のペンホルダーのドライブマン、しかもKa君くらいの本格的なドライブマンであれば、バッククロスのサーブをバッククロスにツッツキでレシーブされたら、ほぼ間違いなく回り込んでフォアでドライブをかけるはずですが、そのときの僕は、今となってはもう思い出せないような理由で「Ka君に回り込ませない」と確信していたような気がします。そこに至るまでの間にフォアサイドを強

く意識させ、相手が回り込めないような試合展開ができていたのでしょう。なお、その1本を踏まえ、20-14になった次のプレーでは、Ka君のサーブがフォア前に来ると読んでいました。そして、案の定フォア前に小さく出してきたサーブに対して早めに踏み込むことができ、フォアクロスへのフリック(払い)によってノータッチエースで優勝を決めました。最後の2点は、今振り返っても出来過ぎの2点でした。

その後のエピソードを、いくつか付け加えます。団体戦終了後しばらくして、個人戦の準々決勝が始まりました。西高では、1年生の山内君が唯一残っていたのですが、同じ第3学区のライバルである都立富士高校の3年生F君に、激戦の末敗れました。準決勝でその富士高校のF君は、永山高校のK君に、これも3セット目の終盤までもつれる激戦の末敗れて、第3学区の仲間はすべて姿を消しました。決勝では、永山高校のK君と戸山高校のF君が、これもフルセットの激戦を繰り広げ、僕も最後までF君を応援したのですが、3セット目の終盤でK君がF君を突き放し、優勝を決めました。

その後、表彰式で賞状と盾をもらって有頂天だった僕たちは、帰路に高校生らしいサプライズを思いつきました。実は、鴨井君兄弟と山内君が石神井中学校の出身、僕が上石神井中学校の出身ということで、みな練馬区の西側に住んでおり、隣の保谷市にある大会会場には自転車で行っていました。そして、当時3年生だった鴨井君(兄)は先に帰ったのですが、残りの3人で自転車に乗りながら相談し、同じ西高のチームメイトの家に賞状と盾を見せに押しかけたのです。1軒目は、当時2年生だった白石さん宅、2軒目は、当時1年生だった石神さん宅です。白石さんも石神さんも、やはり練馬区の西側に住んでいたのですが、女子のチームメイトに賞状と盾を見せびらかそうとするあたりが、微笑ましいというべきか、迷惑千万というべきか、今となっては高校時代のいい思い出です。

また、この国公立大会の1週間ほど後に第3学区の大会があったのですが、国公立大会の2回戦では3-0で勝った大泉北高校に雪辱され、男子団体戦の優勝を逃しました。僕が中学時代の先輩である3年生のS君にフルセット

の20-22で負けたのが原因です。ただ、その悔しさをバネに個人戦ではがんばることができ、山内君と僕が決勝まで進出して決勝戦での同士討ちを実現することができました。そして、僕の記憶が正しければ、その次の第3学区大会からは、男子団体戦で西高が4連覇を果たしていると思います。

そろそろ締めくくりたいと思います。

この文章には書かれなかった多くの試合を含め、さまざまなシーンでの僕自身の心の動き、仲間とのコミュニケーションなど、当時経験したこと一つひとつが僕の財産になっています。そしてもちろん、それらを余すところなく自分の生徒たちに還元していきたいと思っています。いろいろな意味で、西高卓球部、ありがとう。



近年の国公立大会が開催される中野体育館



夏恒例の合宿が行われる現在の西高会館

「井の中の紅い蛙」

私が48期唯一の女性部員として卓球部に入部したとき、女性の部員は他にほとんどいなかった。

47期の女性は烏森先輩1人。とても優しくて、芯が強く、憧れだった。

46期の先輩は、何人かおられたけれども、部活はほぼ引退されていて、あまり参加されなかったので、話をした記憶は少ない。

後輩はというと、49期の新入部員に男性は0、女性部員が3名。

頼りなくて先輩らしくなくて非常に申し訳なかったが、後輩ができて嬉しかった。たった1歳、年齢が下なだけなのに、「なんて若いのだろう」と感心していた。

女性部員が少数だったのは、その当時、西高だけに限った話ではない。そのおかげで、高2の私は3学区戦優勝という栄誉をいただいている。優勝と言えば聞こえはいいが、ふたを開ければ、ほとんど参加者がいなかっただけだ。部員の皆さんからはお祝いの言葉をももらったものの、私自身はどうにも喜びにくい、複雑な心境だった。

そんなふうには、女性に限っては「斜陽な感じ」な卓球部ではあったけれど、46～48期の男性部員はけっこういた。

明るくて気持ちのいい人たちばかりで、紅一点とか紅二点とか、という状況でも、気負わずに練習することができた。私の上達しなさときたらカメラよりひどかった自覚があるが、根気強く丁寧に教えてもらえて、部活は楽しかった。

先輩や同期の名誉のために付け加えると、教え方も上手だった。その証拠に、烏森先輩はどんどん上達されて、

グリップにゴムを巻いた重たいラケットを使いこなして、びしびし鋭いボールを打っていた。男性部員も舌を巻くくらいだった。3人の後輩だって、入部したときが初めてラケットを持ったとき、だったにも関わらず、めきめきと腕を上げていった。

ラケットやラバーのこと。サーブのこと。戦術のこと。練習の中で、いろいろな解説をしてもらった。奥が深く、はてなマークが頭にたくさん浮かんだけれど、卓球の話聞くのは面白く、飽きなかった。

先輩はかっこよかったし、同期は大事だったし、後輩はかわいかった。私から見れば、みんな卓球が上手だったので、自分が負けるよりも他の部員が負ける方が悔しかった。上には上がいると、頭では分かっているけど、自分の部が一番だと、そう思っていた。

「西高卓球部が、一番。」

振り返るなら、今でも、そう思う。

振り返るなら、井の中の蛙だったのだなあとも、思う。2016年、リオのオリンピックを取り上げるまでもない。卓球の世界は広い。

でも、井の中でしか見られないものもまた、たくさんあった。井の中ならではの幸福は、確かにある。その形は人それぞれだし、他人にはそうとは見えないかもしれない。同じ西高卓球部とはいえ、私ほどのんびりしていた人は他にいないかもしれない。

それでも、私はあの「井の中」にいられて、よかったなあと思う。

1976-1995 都立西高卓球部の歴史

		卓球部の出来事	卓球界の出来事	世の中の出来事
1976	29-31期	31期生の入部 市川、今泉、川島、高木、守屋、山本他計9名 1976年9月 西高体育館でサウジアラビア卓球団との親善試合 メンバーは近光、庄司(25期)、大石、河村、酒井、白谷、津田(30期)、高木、松本、山本(31期) 3期 荻村伊智朗 中高校生指導講座Ⅱ(卓球レポート)出版	「マッカーサー元師杯(全国都市対抗)」が第30回福岡大会をもって終了する。	01.31 鹿児島で初の5つ子誕生 04.05 中国・北京天安門広場で数万の群衆と軍警察が衝突 05.08 植村直己 北極圏を犬ぞりで単独突破 07.18~08.02 モントリオールオリンピック 10 日本ビクター、VHS式家庭用VTR発売。25万6000円 11.06 国鉄運賃上げ 最低料金30円から60円 12.21 初のジャンボ宝くじ(1等1000万円が40本)
1977	30-32期	32期生の入部 市川、向井、上條、近藤、城井、鈴木他計12名	「日本リーグ(実業団)」発足。 世界卓球選手権バーミンガム大会 【日本選手決勝記録】 男子シングルス:河野満 3-1 郭躍華(中国)	04.06 池袋に「サンシャイン60」開館 05 排他的経済水域、200カイリ漁業専管水域を設定 「200カイリ時代」を迎える 07.13 ニューヨーク中心にアメリカで大停電事故発生 08.16 エルビス・プレスリー急死(42歳) 09.03 王貞治 756号本塁打世界最高記録を達成、国民栄誉賞の第1号を受賞 09 日本赤軍 日航機ハイジャック事件 11 江川卓ドラフト会議
1978	31-33期	33期生の入部 赤司、魚谷、石田、河瀬、古閑、服部、我妻、滝沢、中村他計30名	「第一回全国家庭婦人卓球大会」が開催される。	05.20 成田空港、厳戒態勢中の開港 07.25 英国で世界初の体外受精児「試験管ベビー」誕生 07.30 沖縄県の交通方式が切り替え「人は右、車は左」
1979	32-34期	34期生の入部 荒木、鈴木、鶴岡他計7名 3期 荻村伊智朗 ピョンヤンの総会でIF会長代理に就任	世界卓球選手権平壤大会 【日本選手決勝記録】 男子シングルス:小野誠治 2-1 とリード後の第4ゲームはいれんで郭躍華(中国)棄権	01.13 国立120大学、初の共通1次試験実施 02 「イラン革命」起こる。第二次石油危機へ 05 日本電気、パソコン(PC-8001)発表。パソコンブームの口火に 07.11 東名高速道路の日本坂トンネルで玉突き事故(死者7人、被災車両189台) 12.10 マザーテレサ、ノーベル平和賞受賞
1980	33-35期	35期生の入部 川口、関根、船木、松倉、宮島、山田他計13名 3期 荻村伊智朗 日本卓球協会専務理事に就任(会長・高城元) 35期生入部 13名	全日本選手権に「カデットの部(14歳以下)」を新設する。	05.16 大平内閣不信任案可決各局特番放送 06.22 初の衆参両院同時選挙 07.16 大平首相死去 05.18 米セント・ヘレンズ山噴火、世界に異常気象をもたらす。 09.09 イラン・イラク両軍全面戦争に 10 山口百恵婚約・引退 11.09 川崎市で予備校生による両親金属バット殺害発生
1981	34-36期	36期生の入部 中条、大山、斉藤、小口、島立、清水、寺田他計14名	全日本選手権に「ホープスの部(小学6年生以下)」を新設する。	03.16 土光敏夫前経団連会長を座長にして第二次臨時行政調査会が発足。「小さな政府・増税なき財政再建」を提言 10.01 国鉄「フルムーン・夫婦グリーンバス」発表 10 初の写真週刊誌「フォーカス」創刊
1982	35-37期	37期生の入部 松林、長谷川、佐藤、川畑、星、高橋他計13名 顧問 藤崎 真佐五(数学・物故)、石橋 和子(芸術・家庭科)、寺田 恵一(英語)	「第一回世界ベテラン大会」が開催される。 「第一回全日本クラブ選手権」が開催される。男子は青卓会(東京)、女子はサンフレンド(東京)が優勝。	02.08 東京・永田町のホテル・ニュージャパンで火災、死者33人。 02.09 日本航空DC8型機、羽田空港着陸寸前に海に墜落 04.01 五百円硬貨発行 06.23 東北新幹線が開通 09 三越の岡田茂社長がワンマン経営と不正で社長解任。取締役会席上で、岡田が発したとされる言葉「なぜだ!」はこの年の流行語となる。 11.15 上越新幹線が開通 11.18 横井英樹社長逮捕
1983	36-38期	38期生の入部 青木、菅、谷、日下部、丸山、吉田計6名 2期 田中恒夫 全国ホープス卓球大会を立ち上げる。小学生の全国大会が誕生、後の愛ちゃん、石川、伊藤、平野等の若手の活躍に寄与。 3期 荻村伊智朗 世界選手権東京大会組織委の総合企画運営委員長、日卓協競技力向上委員長	「第一回全国ホープス大会」が開催される。 日本で3回目の世界選手権「第37回世界選手権東京大会」が開催される。	01.27 青函トンネル貫通 04.15 東京ディズニーランド開園 05.26 秋田沖で「日本海中部地震」(M7.7)が発生、津波により児童ら104人が死亡 06.13 愛知県警、戸塚ヨットスクールの戸塚宏校長を逮捕
1984	37-39期	39期生の入部 今田、大田、岡本、小倉、白石、神谷他計15名 顧問 岩生 陽一(国語)就任 3期荻村伊智朗 アジア卓球連合の執行役員に(~94年) 「実戦 卓球」上下(大修館書店) 荻村伊智朗・藤井基男・木村興治・山中教子 共著 出版 「ザ・ベスト卓球」(大修館書店)出版 「卓球」(日本文芸社)出版 第一回国公立大会開催	全日本選手権に「ホープスミニの部(小学4年生以下)」を新設する(「カブの部」の前身) 「全国家庭婦人卓球大会」の名称を「全国レディース卓球大会」に改める。	01.15 新日鉄釜石がラグビー7連覇 01.26 週刊文春「疑惑の銃弾」掲載開始 03.18 江崎グリコ社長誘拐 04.02 気象庁、アメダスの地方分配開始 07.28 ロサンゼルス五輪開幕(ソ連など共産圏15カ国不参加) 11.01 日銀15年ぶりに新札発行 11.30 首都圏と近畿圏でキャプテンシステムの営業が始まる 06.30 厚生省日本人の平均寿命世界一と発表
1985	38-40期	40期生の入部 高尾、八重樫、赤岡他計9名 第2回国公立大会 男子団体 3位 男子単 3位(山下)	ITTFは「ラバーの色は赤と黒に限定」を決定する 日本卓球協会は、登録会員へのゼッケン配布制度を開始する。	03.11 ゴルバチョフ書記長就任 03.16 つくば博開幕 07.01 詐欺商法の豊田商事、負債総額2000億円で倒産 08.12 日航機御巣鷹山墜落事故、歌手の坂本九ら死者520人 12.20 電電公社・専売公社の民営化

1976-1995 都立西高卓球部の歴史

		卓球部の出来事	卓球界の出来事	世の中の出来事
1986	39-41期	41期生の入部 本郷、鴨井、松野、武藤他計13名 3期 荻村伊智朗 「卓球・勉強・卓球」(岩波ジュニア新書)出版	日本卓球協会は「卓球発展計画プロジェクト」を発足。 白いウェア、オレンジボール、ブルーのテーブル、ラージボールの開発を推進する原動力となる。	01.28 NASAのスペースシャトル「チャレンジャー」が打ち上げ後に上空で爆発、乗組員7人が死亡 04.01 男女雇用機会均等法が施行 04.26 ソ連のチェルノブイリ原子力発電所で爆発事故、死者31人 05.04 チェルノブイリ原発事故の影響と見られる放射性物質を日本で検出 05.04 東京で主要国首脳会議(サミット)が開かれる 05.08 イギリスのチャールズ皇太子とダイアナ妃が来日 11.15 伊豆大島の三原山が噴火 12.09 ビートたけしとたけし軍団ら11人が雑誌「FRIDAY」の編集部に抗議、編集次長らに暴行して逮捕
1987	40-42期	42期生の入部 石原、伊東、岡本、小野村、鴨井、木村他計11名 3期 荻村伊智朗 2月27日、ニューデリーの総会で第三代ITTF会長に就任(〜94年)。 日卓協副会長に就任(〜94年)	ITTF 三代会長に荻村伊智朗(日本)が就任。欧米発祥スポーツ競技の国際組織会長への就任はアジア人として初。 全日本選手権に「バンビの部(小学2年生以下)」を新設する。 ニッタク3スター球が「第39回世界選手権 ニューデリー大会」使用球に選ばれる。 月刊卓球雑誌「ニッタクニュース」が創刊以来第400号を迎える(2月号)	02.09 NTT株上場、買い注文殺到、ストップ高160万円で初値 03.09 日本気象協会「スギ花粉情報」の発表開始 04.01 国鉄114年の歴史を閉じ分割・民営化 07.17 石原裕次郎死去 10.19 NY株式市場で株価が大暴落(ブラックマンデー) 11.29 大韓航空機爆破事件発生
1988	41-43期	43期生の入部 五十嵐、石川、石上、佐藤他計8名 顧問 前中 勝子(外国語科)、山本 佳子(数学)就任 3期 荻村伊智朗 日本初会員制卓球クラブ「ITS三鷹」設立に尽力、顧問として指導(〜94年) 第5回国公立大会 男子団体優勝(鴨井 暁比古(41)、山川 元(42)、鴨井 雅比古(42)、山内 平(43))	第24回オリンピックソウル大会が開催され、硬式卓球が正式種目に採用される。 「ラージボール卓球」が誕生する。	01.07 天皇陛下容態悪化・崩御 01.20 ブッシュ大統領誕生へ 03.13 青函トンネル開通 03.17 東京ドーム完成 04.10 世界最長の道路・鉄道併用の瀬戸大橋開通 06.18 リクルート事件発覚 10.04 ベトナムの二重胎児ベトナムドクちゃんの分離手術成功
1989	42-44期	44期生の入部 浅田、桜井、中庭、本田、宮脇他計8名 顧問 晴山 文男(数学)就任 3期 荻村伊智朗 ジャパンオープンの創設に尽力 「卓球教室」(成美堂)出版 君も名選手になれる卓球教室」(成美堂)出版 第一回 卓球やろう会が三鷹 ITS で開催される 第6回国公立大会 男子団体 3位(五十嵐 嵩訓(43)、高木 裕司(43)、山内 平(43)、宮脇 康(44))	後に荻村杯と冠される「全日空杯ジャパンオープン」第1回開催。	01.07 午前6時33分、昭和天皇崩御(87歳8ヶ月) 新年号「平成」に 04.01 初の消費税導入(3%) 04.21 任天堂「ゲームボーイ」発売、年内150万台販売 06.04 天安門事件 06.24 美空ひばり逝去(52歳)、死後国民栄誉賞を受ける 08 FIFAワールドカップ開催 11.09 「ベルリンの壁」崩壊
1990	43-45期	45期生の入部 佐藤、塩川他計8名 3期 荻村伊智朗 ワールドオールスターサーキット(賞金付大会)の創設に尽力 卓球ディナーショー「ザ・卓球」の開催		06.29 礼宮文仁殿下と川嶋紀子さん結婚、秋篠宮家創設 08.27 ソ連のサハリン州で大やけどの男児コンスタンチン君、超法規的措置で来日。札幌医大で治療 11.12 天皇陛下即位の礼
1991	44-46期	46期生の入部 石川、松田、古林他計10名 3期 荻村伊智朗 4月1日、日本オリンピック委員会(JOC)の国際委員長に(〜94年) 長野冬季五輪の誘致にも尽力、のち実行委員会国際委員長に 世界選手権千葉大会で「コリア」統一チーム実現に尽力 「私のスタンディングオベーション」(日本卓球)出版	日本で4回目の世界選手権「第41回世界選手権千葉大会」が開催される。 「第41回世界選手権千葉大会」で南北コリア統一チームの参加が実現、女子団体が優勝を果たす。オレンジ球、ブルー台が採用された最初の世界選手権となる。	01.01 東京23区の電話番号が4桁に 01.17 多国籍軍イラク攻撃開始 02.15 イラクの条件付きウェット撤退 02.28 湾岸戦争終結 04.01 都庁新庁舎オープン 04.24 著作権接権の保護期間を30年から50年に 06.03 雲仙普賢岳で火砕流発生
1992	45-47期	47期生の入部 江川、大澤、金井、河井、島森他計6名 3期 荻村伊智朗 バルセロナ五輪で卓球責任者、スウェーデン国王・IOC会長などに説明役		03.14 東海道新幹線に新型超特急「のぞみ」登場 04.25 人気ロック歌手、尾崎豊急死 07 バルセロナオリンピック 10.17 米国で留学中の少年(服部剛丈くん)がハロウィンで射殺される 11.27 貴花田と宮沢りえ婚約(翌1/27婚約解消)
1993	46-48期	48期生の入部 小川、佐藤、佐野他計6名 顧問 高山 繁(社会)就任 3期 荻村伊智朗 地球ユース大会(20歳以下の世界大会)の実現に尽力 「スポーツが世界をつなぐ」(岩波ジュニア新書)出版 南アフリカのシェリル・ロバーツが荻村伊智朗伝記「Ichiro Ogimura」(榎並悦子訳)をケープタウンで出版		05 日本初のプロサッカーリーグ(Jリーグ)が開幕 06.09 皇太子殿下・雅子さま「結婚の儀」 07.12 北海道南西沖地震発生(M7.8) 08.09 38年ぶりの非自民政権「細川連立内閣」成立 10.26 JR東日本の株式上場。初値60万円
1994	47-49期	49期生の入部 大友、小林、深沢、松元計4名 3期 荻村伊智朗 12月4日、肺がんのため死去 日本政府から正五位が贈られる	ITTF 四代会長にロク・ハマランド(スウェーデン)が就任。	07.30 松本サリン事件で河野義行氏が記者会見、事件との関わりを全面否定
1995	48-50期	50期制の入部 大多和、瀬川、中川、矢野、山路他計8名 顧問 金玉熙 就任	ITTF 五代会長に徐寅生(中国)が就任。 「日本卓球リーグ実業団連盟」が誕生する。 月刊卓球雑誌「ニッタクニュース」が創刊以来第500号を迎える(6月号)	01.17 阪神淡路大震災 01.24 歌手・長渕剛が大麻取締法違反で現行犯逮捕される 03.20 地下鉄サリン事件 05.08 歌手・テレサ・テン死去 05.16 オウム真理教教祖の松本智津夫容疑者逮捕 11.01 東京臨海副都心にゆりかもめが開業 11.09 アメリカ・メジャーリーグでドジャースの野茂英雄投手が新人王を獲得 11.23 アメリカのマイクロソフト社が「Windows '95 日本語版」を発売 12.22 俳優・川谷拓三が肺がんのため死去(22日)



座談会 Part.3



1976(30期)～1995(49期)

30～49期の皆さんが在籍していた当時は、卓球がオリンピック種目に選定され、ラージボールなどの競技も生まれた頃。当時のお話を交えながら、4名の皆さんに卓球への想いや高校時代のお話を語っていただきました。

生涯スポーツとしての卓球

——最近も卓球は続けていらっしゃいますか。

●鴨井 地元の体育館で週に1回、日曜に練習しています。子どもに教えつつ大人も一緒に練習しているという感じですね。

●山村(旧姓:高橋) 私も近隣の体育館でやっていますが、最近は週に2～3回練習に出て、試合にも月に2回は出場しています。10年ほど前から再開したのですが、一時期は毎日のように練習していたこともありました。

●宮脇 すごいですね。私は小学校で教鞭を執っているのですが、職員対抗戦や区民大会など、練習はしないのに試合には参加していました。そこで知り合った方からお誘いいただきチームに参加することとなり、

最近ようやく練習もするようになっていきます。

●山内 僕はあまりできていないのですが、なかなかチャンスがないですね。周りにやっている人がいないと、一人ではできないスポーツですから…

●宮脇 確かに、卓球自体は生涯スポーツとして長く続けられる競技だとは思いますが、どこかのチームに知り合いなどがいないとなかなか始められませんよね。

●山村 私は子どもが通っていた小学校のPTA活動がきっかけで、保護者のクラブ活動がはじまりました。高校時代のラケットも持っていたのですが、部活の延長戦ではつまらないなあと思い、ペンからシェイクに変え

て再開したんです。

冬の時代から五輪種目へ

——高校時代を振り返ってみて、当時の西高卓球部や練習についてもお聞かせください。

●山内 私と宮脇さんは小学校時代から顔見知りで、中学・高校と同じ卓球部に在籍していました。伝統的に西高卓球部は練習が厳しいと言われていますが、私達の頃はそうでもなかったような…

●宮脇 練習場所が剣道部と共有で、週3回くらいしか練習できなかったんですね。山村さんの頃もそうでしたか？

●山村 私の時は週4回でしたね。

●山内 弱くはなかったと思うのですが、必死に練習に励むというよりは、もっと自由に楽しんでいた印象が残っています。

●山村 変わるものなんですね。私は「もっと勉強したいのに」と思うほど練習量が多かったように思います。あとは、しっかりとした指導者がいてくれたら良いのに…とっていました。

●鴨井 でも、僕らが在学していた頃は合宿とかもしていましたよね。

●山内 そうですね。1週間ほど泊まり込みでやりましたが、場所が西高会館だから全然引き締まらない(笑)翌年からは山中湖に連れて行っていただくようになりました。OBの先輩に来ていただき、指導してもらっていましたね。

●宮脇 あとは、1988年に卓球がオリンピック種目になって嬉しかったのを覚えています。当時はまだまだ卓球冬の時代。“根暗”の象徴のように言われていたので…。

●山村 今では随分メジャーなスポーツとして認められるようになりましたね。大きな変化だと思います。

——OBのお話も出ましたが、印象的な思い出はありますか。

●山内 やはり荻村さんの存在は大きいのではないのでしょうか。西高卓球部に名を連ねた身としては、知っておくべきだと思います。高校2年の頃のOB会でお目にかかったのは、今でも忘れられませんね。

●山村 私もOB戦の後の懇親会でお会いしました。毎年ではなかったものの、時々おいでいただいていたように思います。

●鴨井 あと、荻村さんの名前が入っている卓球台を寄贈していただいたような覚えが…。大先輩であり大スターでもある方でしたが、いろいろなかたちで西高に関わりを持ち続けてくださっていましたね。

卓球が世界を広げてくれる

——最後に、後輩の皆さんへのメッセージをお願いします。

●山村 今思えば、私が在学していた頃は、練習環境なども恵まれていたように感じます。でもいろいろな時

代があって、必ずしも十分に練習できないような状況でも、西高卓球部は成果を残してきたことは誇りに思えます。練習の場所や時間、指導者なども含めて最近では環境的にも整ってきているのだと思いますが、それを当たり前と思わず、先輩方が作り上げてきた西高卓球の歴史を大切に引き継いでいってほしいですね。

●宮脇 私の頃の部活動は比較的ゆるく、指導者もいなかったことから、楽しんで卓球をしようという風土でした。それも良い思い出ではありますが、一方では、もっとしっかり卓球に打ちこんで頑張ればよかった、という想いがあることも否めません。高校時代にしかできないこともありますから、悔いのないように頑張ってほしいと思います。

●鴨井 荻村さんのように雲の上の存在のような方もいらっしゃいますが、そういうOBの存在をまずは知っていただきたいですね。また、最近では卓球がメジャーなスポーツとして認知されるようになってつつありますので、部員も増えて活発な部活動になっていけばいいと思います。

●山内 私自身が自由に、やりたいことを楽しんだ高校時代を送ったので、後輩の皆さんにも好きなことを好きなように頑張ってもらえればいいと思います。卓球に打ち込むもよし、勉強を頑張るもよし、それを自分たちで考えて選べるからこそ、西高生が一番の特権だと思います。現役の方々とは隔世の感もありますが、OB会などで一緒に打ち合える機会があることをありがたいと思ひ、できれば今後も参加していきたいと思っています。

●鴨井 あとは、広い世界を知るようにしてほしいですね。仲間内だけではなく、知らない人達と打ち合うことはとても実りある経験になると思います。私達の頃は、他校との練習試合の申し込みなども自分たちで行っていましたが、広く外に目を向け、さまざまな経験を積むことでたくさんの学びを得てほしいと思います。



(後列左より) 44期:宮脇 康、43期:山内 平
(前列左より) 37期:山村 利枝(旧姓:高橋)、41期:鴨井 暁比古

第四章 1996-2015

安定期 第四期黄金時代



執筆

59期 安部 智秀

59期 江頭 理沙

61期 山口 直哉

62期 南雲 みどり

63期 松本 龍太郎

64期 芳賀 優弥

64期 山井 直樹

67期 浜本 航治

西高卓球部70周年に寄せて

西高で卓球ができた3年間は、私にとってとても大きな経験となりました。顧問の先生方、先輩、同期、後輩にはたくさん迷惑をかけ、今となっては申し訳ない思いもありますが、様々な方とのつながりが今に活かされていると感じます。

卒業して10年が経とうとしている今も、卓球を続けることができます。去年は神奈川県での全日本クラブ選手権に参加し、新体連の全国大会で京都に行きました。

今年は、全日本クラブ選手権で大阪まで行きました。社会人になってまで大きな大会で卓球ができてるのは、高校で一生懸命練習をして、基礎が作れたからではないかと思っています。

今卓球をしていて、とても楽しい思いができています。本当に、高校時代関わってくださった方々に感謝の気持ちでいっぱいです。

高校3年間の卓球部の思い出は、今でもよく思い出すことができます。

1年生で入りたてで生意気な私を宥めながら団体で使ってくださった先輩方、ありがとうございました。2年生に進級すると、顧問に野中先生がついてくださいました。

関東大会の予選で団体ベスト8に入れ、夏の国公立大会ではシングルス、団体ともに優勝することができました。秋から冬にかけては満足いく成績が出せず、一番周囲に迷惑をかけた時期であったと思います。野中先生をはじめ、家族や同級生も励ましてくださいました。東京選手権や全国選抜（シングルス）に出られて、少しずつまた卓球に前向きに取り組めるようになりました。

3年生ではインターハイ予選で8位に入ることができました。インターハイには出られませんでした。ずっと憧れてきた「東京都の個人戦でベスト8」に入ることができ、本当にうれしかったです。

インターハイ予選では、個人戦にも関わらず野中先生が来てくださいました。3年間卓球を続けることができ、本当に良かったと思っています。

その後OB会の幹事などで、数回、西高の卓球部と関わる機会もありましたが、今回70周年を迎えるにあたっ

て、改めて西高卓球部と関わりをもつことができました。

久しぶりに現役生の練習もみることができました。一生懸命がんばることができているようで、卒業生としてもうれしいです。

都立高校の卓球部として、ここまで長い歴史をもち、名のある先輩がいらっしゃることは珍しいのではないかと思います。時代もかわり、先輩方や私がやっていたような活動を今の生徒たちがこなすのは難しい面もあると感じます。そのうえで、後輩の生徒たちが卓球に一生懸命取り組み、将来生きるための糧を得てくれればと思います。

最後になりましたが、西高卓球部の今後さらなるご発展をお祈りしております。私自身、本当に微力ではございますが、少しでもサポートできたらと思います。



2016年7月 全日本クラブ卓球選手権

西高卓球部の思い出

西高卓球部創部70周年、心よりお祝い申し上げます。記念部誌への寄稿という貴重な機会をいただき、ありがとうございます。

拙い文章で恐縮ですが、私の卓球人生や、西高卓球部での思い出を綴りたいと思います。

私は小学校4～5年生の1年間だけ、兵庫県の小学校に通っていました。その時のクラス担任の先生がたまたま卓球に熱心な先生で、その先生に誘っていただいて、「卓球がんばろう会」という放課後クラブに入ることになったのが、卓球を始めたきっかけです。当時、運動が大の苦手だった私ですが、先生の楽しい指導のおかげで卓球が大好きになりました。

その後中学2年生の時に東京に戻ってきましたが、その中学校の卓球部には女子部員が1人もいませんでした。それでも入部を決めました。女子部員が入らず、寂しい思いをしたことを覚えています。

そして念願の西高に入学することができ、卓球部に入部しましたが、西高でもやはり女子部員が少ない状況でした。（3年生の女子部員の先輩は1人いらっしゃいましたが、すでに引退が近く、練習などでご一緒する機会もほとんどなく残念だったことを覚えています）

ただ、仲良くしてくれた2人の同期と、優しい先輩たち、顧問の野中先生のおかげで、練習は有意義な内容で、かついつも楽しかったことを覚えています。

週に1、2回は私の苦手としていた筋トレの日や、井の頭公園までの往復（イノラン）等の日があり、正直辛い時もありましたが、皆と一緒に頑張れたなあと思います。

試合前などは、ジャージで登校し、朝練をして、10分休みの時合間に昼ご飯を食べきって昼練をやり、放課後は部活や地元で練習など、生活時間の多くを卓球に費や

していたことも、懐かしく思い出します。

振り返ると、西高卓球部では、いつもきちんと目的意識を持って練習することや、それぞれの部員の思いを尊重する、応援する空気が自然とあったように感じ、そういったことの大切さを教えてもらっていたのだなと思います。

2年生の時には、念願だった女子の後輩（深井さん）ができ、女子ダブルスが組めるようになりました。その後正木さん、浜崎さんも入部を決めてくれ、女子チームで練習試合に行ったり、団体戦に参加でき、女子部として活動することができたことは私にとってとても良い思い出です。

詳しい近況が分からず申し訳ないのですが、62～64期では女子団体で国公立大会3位という素晴らしい成績を残していることを知り、嬉しく思っています。

都立高校では多くの高校が女子部員を揃えること自体が課題となっている中、すごいことだと思います。今後も勧誘活動などにも力を入れつつ、女子部が継続していけることを願っています。

余談になりますが、私は西高卒業後も大学で細々と卓球を続け（大学でも女子部員がおらず、勧誘活動に力を入れ3年生でようやく女子団体が組めたのですが…）、社会人になってからも職場の卓球部に在籍し、時折練習に参加させていただいています。

卓球という競技自体の楽しさはもちろん、卓球を通して人と関わることの楽しさ、目的意識をもって一生懸命物事に取り組むことの大事さ、などなど、ここには書ききれない多くのことを一番教わったのは、西高卓球部時代だったなあと思います。感謝しています。

今後も、西高卓球部の益々の発展を願っています。

卓球部の思い出

どうしてもっと記録を残しておかなかったのか。僕はしばらく時間が経ってから、このような後悔をすることが多い。当時は、その瞬間に忙しくて、ずっと先のことなど思いもよらないのだ。僕にとって、西高卓球部での三年間はまさにそのようなものだった。いや、受験生の夏前には引退していたから、実質、二年と少しの間だったはずだ。当時は、高校生活が短いなんて考えたこともなかったが、いま振り返れば、なんともあつという間だった気がする。毎日一所懸命で、写真の一枚も撮ることを忘れてしまった。あるいは同期の友人は持っているのかもしれないが、僕の手元には、記憶の頼りになるものは何も残っていない。そのため、強く印象に残っていることをいくつかだけ、書き留めてみたい。

同期の思い出を語る上で、欠かすことができないのは、東京都国公立大会の団体戦で優勝したことだろう。もちろん、私立高校の学生が出場しないぶん、大会全体のレベルはぐっと落ちている。しかし、それでも、上位校のエースは私立高校の学生とも拮抗するようなレベルだったはずだ。団体戦の前日に行われた個人戦では、あまりチャンスを掴めなかった。唯一、小野君だけが、良い成績を残したように覚えている。僕自身も、あまり勝ち上がるができなかった。しかし、団体戦は、西高に何かが取り憑いているようだった。この日はOBや先生も駆けつけてくれ、後輩も、試合に出ていないメンバーも含めて、文字通り一体となって戦った。トーナメントでは、良くじ運に恵まれ、また、相手としては厳しかったかもしれない高校が途中で敗れるなど、西高に追い風が吹いていた。そしてあの日、僕たちは本当に良く集中していた。応援も手を抜かず、一人が勝つと皆で喜び、そうやって、一つ一つの試合をものにしていった。後から他校の人に聞いた話であるが、この日の西高の雰囲気は羨ましくなるほどにいいものだったらしい。僕もそう思う。決勝のことは良く覚えている。立川高校が勝ち上がってくると予想していたが、蓋を開けてみれば、新宿高校が勝ち上がってきたのだ。決勝では台を四台並べ、シングル

スを同時並行した。西高の一番二番と相手校の一番二番がぶつかって、がっぷり四つに組んだ展開だった。それぞれの選手の後ろには、OBや先生が待機してくれ、応援も四つに分かれてくれた。一人が勝つと、台が一つ空いて、応援が残りの台に集中していった。僕も自分の試合が終わると、祈るような気持ちで、隣の仲間を応援した。現実とは思えない高揚感だった。結果的に優勝することができたが、その事実よりも、目標に向かっていくあの心地よい一体感を懐かしく思い出す。やはり団体戦はいいものだ。

もう一つ、夏の合宿を思い出す。合宿といえば、西高会館に数日泊まり込んで、丸一日練習三昧だった。朝から井のランを走って、梅田食堂で食事をとって、夜はみんなで銭湯に行った。もちろん強くなるために練習していたが、同時にとても楽しい時間だった。合宿に限ったことではなかったが、僕らは練習のメニューから筋トレの内容まで全て自分たちで手作りのした。中学の部活で習ったことや、当時いろいろなところから新しく教わったことを、試行錯誤で組み合わせ、僕たち自身のための練習を作っていた。強制力などないにもかかわらず、皆努力して、時間を惜しむように練習した。これはまさに西高的だったと思う。

僕自身は、高校卒業後に北海道で一人暮らしを始め、六年間を札幌で過ごした。その後、アメリカに移ったため、西高の友人たちとは物理的に離れてしまった。一年ほど前、久しぶりに多くの卓球部同期が集まって飲み会を開いた。遅刻してくる順番から、会話の主導権まで、全く当時のままだった。まさに過去にタイムスリップしたような感覚を覚えた。三木君は当時のことを驚くほど鮮明に覚えているようで（なんと、試合の相手からその点数差まで覚えているようだ！）、それに加えてみんなで思い出を持ち寄って、とても楽しい時間を過ごすことができた。この文章の記憶違いも、もしかしたら彼が訂正してくれるかもしれない。

西高卓球部の3年間

西高卓球部創立70周年を迎えましたことお祝い申し上げます。記念部史の寄稿という大役を預かり大変恐縮しております。西高卓球部での3年間は、私にとってかけがえのない3年間であり、本当にあつという間の3年間でした。

高校1年生の夏の国公立大会で女子団体第3位に入賞できたことで、高校でも自分の力が通用することを初めて実感しました。それからは、試合経験が積める機会をできるだけ多く見つけ、色々な選手を観察して戦略や試合運びをノートに付け、見返すことで自分のものにしていました。1年生の時には強い気持ちを保つために、競ったときは思い切ることを、積極的に声を大きく出すことを特に心掛けるようにしていました。練習後には駅前で、帰宅後には電話とメールで、部活動のモチベーションや西高の授業の勉強について、先輩からアドバイスをもらいました。そのおかげで先輩を敬う気持ちが自然と身に付き、謙虚に目標としていました。

私が1年生のときの国公立大会男子団体は、決勝戦で新宿高校に勝利して優勝しました。その時の歓喜に満ちた瞬間は、最も先輩方の勇姿が感じられ、団体戦の秘められた楽しさや面白さを感じた瞬間でした。そしてそれまでの私は、団体戦というものについて、レギュラーに入れなければ応援だけのつまらない試合だと思っていました。しかし、チームの勝利のために一丸となって立ち向かう部員全員の勇ましい姿に、勝ちへの思いを全員で共有する本当の意味での団体戦に気づきました。尋常ではない応援の盛り上がりで圧倒され、その熱狂ぶりは、常識を覆されるほどの衝撃でした。みんなは一人のために、一人はみんなのために戦う勇姿を目の当たりにし、チームで感動を味わいたい！と、団体戦出場への思いを強めていきました。

2年生に上がると、女子主将として一番手を引き受けることが多くなっていきました。苦しい場面では、プレッ

シャーに耐え切れず部活を辞めることを何度も考えていました。それでも、ここで辞めたら逃げたことを一生後悔すると思い、女子主将として部活を続ける決心をしたことを覚えています。その後の夏の国公立大会では、女子団体、女子シングルスともに第3位入賞を果たすことができました。主将としての責任を果たしたことで、自分の成長を実感できた経験です。2年生として練習にも慣れてくると、部活内で卓球の実力に力の差が出始め、無我夢中で離されないようにしがみついていた。少しでも追い付けるよう、当時の私は、周りの部員に毎日刺激を受けながらの学生生活を、失敗しても絶対に諦めないという気持ちで送っていました。部員に感化され、卓球に最も全力投球で取り組めたのがこの1年間でした。

3年生のときには、大舞台で最後まで誠心誠意戦い、仲間と共に全力を出し切る事で、学生生活以上に魅力的で自分自身にとって最高の経験ができました。同期メンバーの応援や、後輩達のプレーに励まされ、最後の国公立大会女子団体で第3位に入賞できました。最後の試合後のミーティングでは、顧問の先生方や選手、応援に駆けつけてくれた部員たちと、三本締めで締めくくり、胸に熱い思いがこみ上げてくる感覚がありました。それは、後輩に代替わりすることや、主将の役目を果たせてほっとした気持ちというよりは、西高卓球部の現役部員から胸を張って退ける達成感のようなものに近かったと思います。

彼らと一緒に戦った日々は、勝つうえで、チームの存在はとても大きな力になるということを教えてくれました。彼らは、ライバルでありながらも、互いを尊重し合え、誇りを持っている仲間です。重要な場面でも、自分の得意な力を最大限引き出し、自分自身の力で前に進みだすことができるメンバーだと感じます。西高卓球部での日々は、それを感じさせてくれる3年間でした。

～あの日～

西高を卒業して5年が経つ。高校時代は卓球ばかりしていた私だが、大学では卓球を続けなかったことも相まって、卓球部での日々は記憶の片隅に追いやられていった。そんなある日、当時部長だった山口氏より本寄稿文のオファーが来たのだ。正直私は部に貢献してきた人間ではないし、そんな私に寄稿文なんて書けるのだろうかかと戸惑った。そもそも5年以上も前のことを文章にする自信などない。そんなことを考えながら記憶の糸を辿っていくと、「あの日」のことを思い出した。忘れもしない3年最後の団体戦。夏のインターハイ団体予選の日だ。

最後の団体戦、私は念願のレギュラー入りを果たしていた。直前の関東予選団体戦のときにはレギュラー入りできず、目の前で負ける姿を見ていることしかできない悔しさがあったため、最後にレギュラーを勝ち取れたのは感無量だった。また、レギュラー奪取は高校から卓球を始めた私が、ずっと掲げていた目標であったため、最後の最後でそれを成し遂げる形となった。そんな念願の団体戦、初戦の相手は上水高校。決して弱い相手ではなく、誰一人として負けることはできない相手だ。そして2回戦の相手は強豪安田学園。2日目に勝ち残るためには最低でもベスト16に残らねばならず、厳しい戦いが予想された。

迎えた当日、山口氏の提案もあり、朝は63期のメンバー全員と64期の芳賀氏を集めて小金井の卓球場で練習することになった。通常は試合に出るメンバーだけで練習をしていくものだが、やはりこれが最後になるだろうという予感が皆の中にあったのだろう。試合前とは思えないくらい伸び伸びと、リラックスした雰囲気の中で練習ができたことを覚えている。ちなみに、最後の団体戦にも関わらず浅井氏は寝坊して練習に参加しなかった。必死の形相で息を切らして現れた浅井氏を前に、怒る者は誰もいなかった。今となっては良い思い出である。

そして1回戦。对上水高校。相手とのオーダー交換の結果、私の相手はエースのI君だった。I君に私が勝てばエースを潰すことになり、チームの勝利はぐっと近づ

く。逆に負ければ相手を勢いづかせ、チームの敗北に繋がるかもしれない。そう考えた瞬間、私の身をとてつもないプレッシャーが襲った。最後の団体戦の勝敗が自分の双肩にかかっているのかもしれないと考え、とてつもない恐怖を感じた。まともにプレーできるのか不安だった。だが、そんな思いは杞憂だった。夢中で応援してくれるみんなの顔を見るたびに、声を聴くたびに不安やプレッシャーはなくなっていった。試合は一進一退であり、どう転ぶか分からない展開だったが、全く怖くなかった。試合の細かい内容は全く覚えていないが、とにかく心地よい一体感の中でプレーしたことは覚えている。最終的に私はフルセットで勝利し、チームもストレートで勝利できた。

その後、2回戦で西高は安田学園と対戦した。奮闘するも、やはり強く、敗れて私たち63期の引退が決まった。正直私は安田学園のH君相手にポロボロにやられていて、途中で試合は終わったものの、清々しいまでの負け戦だった。それでも、試合後のミーティングの前にはなぜか涙が出てきた。周りのみんなも同じだった。これで卓球漬けだった日々が、仲間との日々が終わるのかと思うと、自然と涙が出てきたのだ。楽しいことも辛いことも、様々なことが思い起こされ、最後に残ったのは、やはり感謝の気持ちだった。ありきたりだが、こんな自分に居場所を与えてくれ、充実した毎日を過ごさせてくれた仲間への、卓球部への感謝の気持ち。こうして、私の部活生活の集大成となり、皆で熱い思いを共有した「あの日」は、私にとって忘れることのできない日になったのだ。

高校生活とは、長い人生において非常に重要な時期である。その高校生活を卓球に捧げた私の人生は、本当に正しかったのだろうかと思ふことがある。だが、「あの日」に想いを馳せると、少なくとも間違っただけではなかったと思える。仲間と過ごした熱い日々。後悔は無い。そして、当時の仲間には本当に感謝している。ありがとう。これからもよろしく。

西高卓球部での思い出

このたびは西高卓球部70周年を迎えられたことを心よりお祝い申し上げます。私が西高卓球部に入部したのは平成21年の4月、元から卓球を続けよう決めていた私にとっては入部の決断は容易なものでした。入部してから約二年半の間、ほとんどを部活に捧げていた私にとって卓球部での思い出は語り尽くせないほど、多くあります。その中でも、特に印象に残っていることをここに紹介させていただきたく思います。

入部当時の卓球部は三年生と二年生の実力が拮抗し、非常に充実した戦力を誇っていました。私は入部直後にも関わらず、上級生の練習に混ぜていただき、三年生の引退試合に向けて共に汗を流しました。その中でも今も覚えているのは、練習のない日に当時三年生の久保木先輩に誘われ、共に練習したことです。入部した直後であるのに、練習相手として認めてくれ、学年関係なく引退まで共に切磋琢磨しながら過ごしたことを覚えています。残念ながら試合には出場出来ませんでしたが、共に練習した三年生の応援には特に力が入りました。

三年生の先輩たちが引退してからの最初の大会に地区別大会がありました。大きな大会ではありましたが、私たちの目標は優勝でした。三年生の引退からこの大会に向けて主将である山口先輩を中心に必死に練習してきた私たちは数々の熱戦を制し決勝に進出しました。私はダブルスとシングルスで勝利を挙げることができ、西高の優勝に貢献できました。決勝で対戦した選手は何度も練習したことのある相手で、いつもは負けている相手でした。しかし、チームの勢いが自分に乗り移ったように実力以上の力を発揮することができ、勝利することができました。新しい代になってから初めての大会での優勝であり、部活生活に大きく期待を抱かせる大会でした。大会後には、夏休み恒例の西高での合宿が予定されており、全員で意気揚々と学校へと向かったのを覚えています。

一年生の最後になり、主将に任命していただいた私は多くの不安を抱えていましたが、いざ主将となると責任感が生まれ、自分が引張っていかうという気持ちにな

りました。自分なりに練習を考え、部長としても少しずつ仕事に慣れていったのを覚えています。しかし、二年生になり一つ上の代の引退が近づいていた頃、練習中自分のプレーに対して納得いかない気持ちを表に出してしまったことがありました。それを見た山口先輩はすぐに練習を止め、私に部員の前ではそういうことは表に出すなど言われました。その時、今まで部の雰囲気気配りができておらず、基本的なことである部員が楽しくのびのびと練習できるような環境作りが全くできていなかったことに気づいたのです。その日から、気持ちを切り替え、同期には自分たちが中心となって部の雰囲気などに最大限気を配っていかうと再確認しました。このように厳しくも暖かく接してくれた一つ上の代の引退試合は部活生活の中でも特に思い出深く、最大限以上の力を発揮し、試合後には全員涙を流していた先輩たちの姿が印象に残っています。

やはり、最も印象的な出来事は自分たちの代の引退試合です。入部してから約二年半最も多く共に練習し、練習以外にも多くの時間を共に過ごしました。自分たちの代には個性的な人が多く、それぞれ卓球のプレースタイルも違えば趣味も違うといった具合でした。それでも、部活の空間が好きで練習に来ていたことは全員に言えると思います。引退する時には、レギュラーとレギュラーではない人の垣根を越えて、全員が自分は何をすべきか理解し、行動できるようになっていたと思います。自分たちが中心となって戦った引退試合は厳しい戦いの連続でしたが、シード校に挑戦できる位置まで勝ち上がることができました。最後は負けてしまいましたが、二年半の全てを出し切ることができました。それも、サポートしてくれた同期の存在が一番大きかったと思います。

ここには書ききれないほど多くの思い出がありますが、このスペースでは書ききれそうにありません。末筆ではありますが、西高卓球部の一層のご発展と皆様方のご活躍を祈念致しまして、お祝いの言葉とさせていただきます。

僕と卓球、西高

学区制が廃止されていたとはいえ、葛飾のような辺境から杉並の西高に通う物好きも少なかっただろう。ここでいう「物」とはもちろん「卓球」である。中学から卓球を始めたが、1つ上に先輩がいなかったことで早くからレギュラーとして個人・団体に出場し、また顧問が熱心だったので（区内では）かなりの実力を身につけることができた。やはり試合あつての卓球だと今でも思う。勝負の面白さがますます卓球への興味をかきたてた。

卓球関連の書籍を読み漁るようになった中学2年の夏、城島充氏の『ピンポンさん』に出会った。荻村伊智朗氏の存在と功績が一瞬にして僕を魅了した。何度も読み返した。読み返すうちに高校受験を考える時期になり、巻末の「都立西高校卒業」の一文で志望校を決めた。試験の当日もこの本をお守りのように持って行った。

井の中の蛙とはまさにこのことだなあ、と感じたのは最初の練習で先輩や同期の強さを目の当たりにした時である。案の定、西高は市部からくる学生が多く、ここは都大会に上がるのも難しい。そこを抜けるような部員がゴロゴロいる。例えば同期の芳賀君なんかは1年からレギュラーに入っていたし、有竹さんは早くから女子のトーナメントをどんどん勝ち上がっていった。そこに追いつけと林君、平沼君、糟谷君、汐月君、名手さん、竹下さんが頑張る。はじめ64期はこんな感じだったように思う。それぞれが強みを持っていて、そこをぶつけていく。初期西高のオールフォア・オールロングは難しくとも、「ここは負けない」という気概は先輩方にも劣らなかつたらうと自負している。

同時に僕らの代は「考える」ということをよくやったように思う。中学時代のように丁寧な指導をしてくれる先生がいなかったことで、良い意味で西高の自主自律の精神が試された。さらに上を目指すためにどうすれば良いかを考えた。練習内容もそれぞれが何を必要としているのかを考え練習した。部内戦はかなり盛り上がった。筋トレや井のランもよくやった。多球練も声を出していないとダメだという風潮すらあった。大学でも卓球を続

けているが、最初の練習であまりに静かだったのには驚いた。

とにかく、限られた資源（台の数や時間、勉強との両立）の中でいかに効率良く練習をし、成績を残していくかを考えたのである。運営は芳賀君が中心になっていたが、部員の間で意見がぶつかることもしばしばあったし、僕なんかは適当に流すような選手だったので真面目にやれとよく檄を飛ばされた。

良くも悪くも「64期は遅咲きのチーム」だったので、最後のインハイ予選で32シードを奪取できた瞬間が頭の中に鮮明に残っている。2つ下の須永君もレギュラーに入っていたが、最後の試合となった対明大中野八王子戦は64期の4人で出た。国立競技場のそば霞ヶ丘体育館の低い天井、4シングルの同時進行、関係者の声援、同級生や親も見に来ていた。でも応援は同期が一番熱かった。チームとして戦っていることがいつも以上に強く意識された。スコアだけ見ればストレート負けであっけないのだけれど、ずっと試合をしている感覚すらあったし、それまでの試合が嘘のようにみんなよく動きよく打っていた。最高のゲームだった。

僕はあまり昔を振り返らないのだが、卓球部のことは「こんなだったなあ」と思い返すことが多い。同級生と会うとなれば決まって卓球部の面々であつたりもする。高校時代、僕は秀でた同級生に劣等感を感じながら3年間を過ごしたが、卓球部だけが唯一のオアシスだった。そこもまた勝負の世界、実力の世界であることに変わりはないのだが、「なにくそ」と俄然やる気が出た。それが良かった。卒業してから5度目の秋。同期も今は別々の場所でそれぞれの道を歩んでいるが、いつかふとUターンして格技棟でもう一度卓球をしたいなあなんて思っている。

67期部長として私が見た西高卓球部

卓球部に入部して最初の試合の応援に参加したとき、非常に驚いた。チーム全体がひとまとまりになって、文字通り「全員卓球」を実現していたからだ。特に私たちの場合は一人一人が強くて単なる足し算の結果として強いのではなく、一人一人の力が相乗的に表れていた。

代替わりして僕が部長になると、いかに部長という職が大変であるのかを痛切に感じた。普段の練習メニューも考えながら大会の申し込みなど事務的な仕事もこなさなければならず、歴代の部長の偉大さを思い知らされた。

ここで一人、勉強に専念したいという理由で退部者が出た。本当は続けてほしかったが、あくまでも本人の意思であるからと思い、その退部を受け入れた。

六十六期の先輩方の関東予選、ここのベスト十六決定で私たち西高は当時東京都団体一位にいたチームと当たった。このくじを引いてかなり冷や汗をかいたのを今でも覚えている。先輩方は格上相手でも怖気づくことなく、いつも以上の卓球をしていた。その結果シングルスで二対二まで持ち込み、最後のダブルスに繋いだ。この試合は惜しくも敗れてしまったが、先輩方はやり切った様子だった。

私たち六十七期がこの西高卓球部を引っ張っていくことになり、私は「本当に私が部長としてふさわしい存在なのだろうか」ということを何度も考えた。別段実力があるわけでもなく統率力があるとは当時は到底言えなかった。そこで、私は私にできることをしようと「返事」の統一をした。これは指示が通っているかどうかの確認のためだけでなく、全体の統一を図る目的で行った。

自分なりの目標を立てて練習に臨んだものの、前途多難であった。今振り返ってみると、私たちは技術不足が深刻で、練習メニューもだんだんと固定化されてしまい、いい練習をしていたとは言えなかった。夏休みの合宿でも先輩方に呆気なく負けてしまい、焦りと不安であふれていた。

その焦りや不安は国公立戦で顕著に出た。初戦一番手で出た私は緊張のあまり実力を全く出せなかった。これが響いて初戦で敗退してしまい、非常に悔しかったのを

覚えている。シングルスでも、初戦で二セット先を取ったにもかかわらずそこから三セット取られてしまい、実力不足と同時にメンタルの弱さも実感した。

九月に入って新人戦が始まったが、私は思うように結果を出せなかった。さらに追い打ちをかけるように、レギュラーを張っていた部員の一人から勉強するために退部したいといわれた。私は非常にショックを受けたが、彼の本心を尊重することに決め、新人戦の団体戦に臨んだ。このころにはすでに六十八期にレギュラーを半分取られてしまっていたことも悔やまれた。ベスト三十二決定まで進み、そこで私は二番手として出場した。おそらく実力をしっかり発揮できれば勝てるだろう相手だったにも関わらず、二セット取られてしまった。しかし、自分でも声を出して自らを鼓舞し、それに伴って周りの応援も聞こえてくるようになった。これに助けられ何とか一セットを返した。しかしその次のセットで取られてしまい、一対一で次につながることになった。この結果私たちは一対三で敗れてしまい、長年受け継がれてきたシードを落としてしまった。

このシードを取り返すべく、練習に励んだものの自分の卓球が分からず迷走しているうちに代替わり、旧三区大会へとあつというまに時間が過ぎていった。この旧三区大会で私はBチームとして参加し、準決勝で前回の優勝チームと当たった。私は前日のシングルスで四位にいた選手と当たった。かなり緊張したものの、来てくださった先輩のアドバイスもあり、何とか三対二で勝つことができ、ここしばらくの間で初めてまともに勝つことができた。しかし、四月の大会に入ると、調子が悪化しインターハイ予選まで引きずってしまった。引退試合では一度だけダブルスで出場し、ベスト三十二決定まで進み、そこで惜しくも敗れてしまった。結局落としたシードは取り返すことができなかった。

この卓球部での活動を通して、非常に多くのことを経験でき、今ではそれが生きているとも感じる。後輩たちには是非全力で卓球にぶつかってもらい、悔いのない卓球部生活を送ってほしい。

1996-2016 都立西高卓球部の歴史

		卓球部の出来事	卓球界の出来事	世の中の出来事
1996	49-51期	51期生の入部 行武、石田、戸田、中川他計6名 顧問 吉澤 裕子(外国語科) 就任 3期 荻村伊智朗 「卓球物語」(大修館書店) 荻村伊智朗・藤井基男=共著 ※卓球発展の背景を伝えられる本をつくりたいという荻村伊智朗の希望を藤井基男が荻村の没後完成させた本		01.11 宇宙飛行士若田光一氏「エンデバー」に搭乗 02.14 羽生善治氏王将等全タイトルを獲得 07.26 アトランタ五輪 12.18 ペルー日本大使公邸、武装ゲリラにより占拠
1997	50-52期	52期生の入部 安藤、石井、塩野、末藤他計8名		05.24 神戸小6男児殺害事件発生 消費税5%スタート サッカーW杯出場が決定
1998	51-53期	53期生の入部 伊神、植村、岡本、加藤、斉藤、長谷川他計11名		和歌山毒入りカレー事件など毒混入事件が多発 長野冬季オリンピックで、ジャンプ団体・スケート男子で多くの金メダルを獲得 若乃花が2場所連続優勝し、兄弟横綱が誕生
1999	52-54期	54期生の入部 綾城、大沢、大島、岡島他計8名	ITTF六代目会長にアダム・シヤララ(カナダ)が就任。	01.01 EU通貨統合、単一通貨「ユーロ」発行、11カ国で開始 03.27 日産自動車、ルノーと資本提携、調印 04.01 改正男女雇用均等法施行 04.11 東京都知事選で作家の石原慎太郎が初当選
2000	53-55期	55期生の入部 永木、佐藤他計6名	10月1日以降のITTF主催大会で、ボールは従来の直径38ミリから2ミリ大きい40ミリサイズの採用をルール化、実施 全日本選手権で、40ミリサイズのボールが初めて採用される	04.05 森喜朗連立内閣成立 07.19 2,000円札発行 07.21 第26国主要先進国会議(九州・沖縄サミット)開催 08.18 三宅島噴火で全島民避難 10.10 白川英樹筑波大学名誉教授がノーベル化学賞受賞 12.13 アメリカ大統領選挙、大接戦で混乱の末、ブッシュが当選
2001	54-56期	56期生の入部 越後、大信田、高井、永島他計6名	日本で5回目の世界選手権「第46回世界選手権大阪大会」が開催され、40ミリサイズのボール初採用の大会となる。 ラージボール卓球の活発化に伴い、全日本軟式選手権が平成13年度大会をもって廃止となる。	01.20 ジョージ・ブッシュ、アメリカ大統領に就任 03.31 ハリウッド映画のテーマパーク「ユニバーサルスタジオ・ジャパン(USJ)」がオープン 09.04 東京ディズニーシーがオープン 09.11 アメリカで同時多発テロ発生で3,000人を越える死者・行方不明者 10.10 野依良治がノーベル化学賞受賞(12.10授賞式) 11.20 イチローが渡米1年目で大リーグ首位打者、盗塁王、新人王、MVPを獲得 12.01 皇太子夫妻に第1子誕生「愛子」と命名
2002	55-57期	57期生の入部 鈴木、中村、松尾計3名 顧問 石井 愛彦(理科) 就任 3期 荻村伊智朗 「世界の選手に見る卓球の戦術・技術」増補改訂版(卓球レポート) 荻村伊智朗著・藤井基男監修		01.01 欧州単一通貨「ユーロ」現金流通開始 02.08 第19回冬季オリンピック・ソルトレークシティー大会開催(～02.24) 05.31 サッカーワールドカップ、日本と韓国で共催(～6.30) 07.24 郵政関連法成立、郵便事業に民間参入認める 09.17 日朝首脳会談、小泉首相が日本の首相として初めての北朝鮮を訪問 10.08 小柴昌俊がノーベル物理学賞、翌9日、田中耕一がノーベル化学賞を受賞 10.15 北朝鮮から拉致被害者5名帰国 12.01 東北新幹線(はやて)、盛岡・八戸間が開業
2003	56-58期	58期生の入部 鴨井、黒田、後藤、宮田他計8名 顧問 中澤 修二郎(国語) 就任		01.10 北朝鮮、核拡散防止条約(NPT)脱退を宣言 01.29 脱北の日本人妻44年ぶりに帰国 02.01 米スベスシャトル「コロンビア」空中分解で墜落 03.05 ロス疑惑の三浦和義に無罪判決 03.20 米軍がイラクに侵攻、英・豪もこれに追従
2004	57-59期	59期生の入部 安部、今井、臼井計3名 顧問 野中 敬(社会) 就任		01.19 自衛隊のイラク派遣開始 04.01 帝都高速度交通営団が民営化され、東京地下鉄(株)(東京メトロ)発足 04.28 年金改革関連法案可決。前後して、政治家の年金未納問題続出 08.13 アテネオリンピック開催(～29日) 10.23 新潟県中越地震発生 12.26 スマトラ沖で大規模地震・津波発生。死者数十万人に
2005	58-60期	60期生の入部 川邊、清田、高橋、菊池他計8名 第22回 国公立大会 男子団体 優勝 男子単 優勝(59期 安部智秀)		02.16 京都議定書発効 03.25 愛知で「愛・地球博」開催(～9.25) 07.07 ロンドンで同時爆破事件発生 09.01 セブン&アイ・ホールディングス発足 09.11 衆議院選挙で自民党、歴史的圧勝 10.14 郵政民営化関連法案成立
2006	59-61期	61期生の入部 安、池田、山口、川田他計9名 59期生 安部智秀 第33回全国高等学校選抜卓球大会 ベスト16 3期 荻村伊智朗 「荻村さんの夢」(卓球王国) 藤井基男・上原久枝・織部幸治=編 ※荻村伊智朗にとって「価値観を共有する友」藤井基男がUFOの会のメンバーの思いを代表して「荻村さんが達成した夢」「達成したかった夢」を書いた本。多くの人の寄付と協力でできた本である。		01.04 東京三菱銀行とUFJ銀行が合併し、三菱東京UFJ銀行誕生 01.23 日本郵政(株)発足 01.23 堀江貴文ライブドア社長、証券取引法違反容疑で逮捕 04.01 29都道府県でフンセグ放送開始 09.06 紀子さま男子ご出産(悠仁親王)、41年ぶりに皇室に男子誕生 09.26 安倍内閣発足 10.01 「ボーダフォン」日本法人、「ソフトバンクモバイル」に社名変更

1996-2016 都立西高卓球部の歴史

		卓球部の出来事	卓球界の出来事	世の中の出来事
2007	60-62期	62期生の入部 大島、久保木、南雲、寺村他計7名 第24回国公立大会 男子団体 優勝 女子団体 3位		01.21 東原英夫、宮崎県知事に当選 07.16 新潟県中越沖地震発生 07.29 参院選で自民党、歴史的大敗。民主党が参院第一党に 09.26 福田内閣発足 10.01 郵政民営化スタート。持株会社と4事業会社に
2008	61-63期	63期生の入部 岩淵、浅井、江村、大久保、禰寝、山口他計13名 第25回国公立大会 女子団体3位 南雲みどり 62期(女子代表) 保科奈津記 62期 柴崎麻奈 63期 笹川穂乃歌 63期 女子単 3位(62期 南雲みどり)		01.27 橋下徹、大阪府知事選に初当選 06.08 秋葉原無差別殺傷事件発生 07.07 北海道洞爺湖サミット開幕 09.15 米証券4位のリーマン・ブラザーズが経営破綻 09.24 麻生内閣発足 10.07 小林誠・益川敏英・南部陽一郎、ノーベル物理学賞受賞 10.11 米、北朝鮮のテロ支援国家指定解除
2009	62-64期	64期生の入部 有竹、名手、芳賀、山井他計9名 顧問 平山 たみ子(英語) 就任 地区別大会男子団体優勝(都立西B) 山口敦史 63期(部長) 浅井裕一郎 63期 松本龍太郎 63期 芳賀優弥 64期 第26回国公立大会 男子団体 3位 山口敦史 63期(部長) 大久保篤 63期 小川隼人 63期 芳賀優弥 64期 女子団体 2位 柴崎麻奈 63期(女子代表) 南雲みどり 62期 有竹奈緒 64期 名手幸穂 64期 東京都高等学校新人卓球大会 男子団体ベスト16	日本で6回目の世界選手権「第50回世界選手権横浜大会」が開催される。	01.22 オバマ米大統領就任 02.02 浅間山噴火 02.11 プロスキーヤー三浦雄一郎(76)、エベレストに登った最年長の男性としてギネス・ワールド・レコーズ社に認定 03.05 定額給付金の支給開始 03.29 森田健作、千葉県知事に当選 04.05 北朝鮮、日本東方の太平洋上に向けミサイルを発射 05.11 民主党・小沢一郎代表が辞任を表明 05.21 裁判員制度スタート 06.26 米の歌手マイケル・ジャクソン死去 07.13 臓器移植法改正案の成立 07.22 皆既日食 46年ぶりに日本で観測 07.31 宇宙飛行士・若田光一さんが4ヶ月ぶりに地球に帰還 08.30 第45回衆議院選挙、民主党圧勝 09.16 鳩山内閣発足 10.03 2016オリンピック開催地がリオデジャネイロに決定。南米初 11.11 行政刷新会議による「事業仕分け」第1弾開始
2010	63-65期	65期生の入部 岡野、沓掛、田沼、中村他計9名 顧問 小豆畑 和之(社会) 就任		01.01 日本年金機構発足 06.08 菅直人内閣成立 06.13 小惑星イトカワから「はやぶさ」帰還 12.04 東北新幹線全線開通
2011	64-66期	66期生の入部 小川、渋谷、鈴木、須永他計10名		02.06 八百長問題の影響で、大相撲春場所が中止に 03.11 東日本大震災 12.19 北朝鮮・金正日総書記が死去 後継には三男の正恩氏
2012	65-67期	67期生の入部 浅尾、片岡、金谷、浜本他計7名	「第30回オリンピック ロンドン大会」で、日本卓球五輪史上初のメダル獲得(女子団体で銀メダル)	04.14 新東名高速道路 一部区間(御殿場JCT～三ヶ日JCT間)開通 05.18 米Facebook 上場 05.21 日本で25年ぶり金環日食 06.03 地下鉄サリン事件のオウム真理教元信者 菊地直子容疑者逮捕 06.06 寛仁さまが逝去(享年66) 06.15 地下鉄サリン事件のオウム真理教元信者 高橋克也容疑者逮捕
2013	66-68期	68期生の入部 北原、谷本、野瀬、結城他計7名	プラスチック製ラージボール「ラージボール44プラ 3スター」が日本卓球協会の公認を取得(8月19日)、発売(12月15日)	02.01 テレビ放送開始60年 04.02 新歌舞伎座が開場 05.05 長嶋茂雄さん、松井秀喜さんに国民栄誉賞 05.26 三浦雄一郎、最高齢(80)でエベレスト登頂 06.26 富士山、世界文化遺産登録
2014	67-69期	69期生の入部 計12名	ITTF七代目会長にトーマス・ヴァイカート(ドイツ)が就任。 日本で7回目の世界選手権「第52回世界選手権東京大会」が開催される。 7月1日以降のITTF主催大会では、ボールはプラスチック製を使用球とすることが決定されている。	03.31 フジテレビ「森田和義アワー 笑っていいとも!」、32年の歴史に幕 04.01 消費税率8%スタート 07.01 安倍内閣、「集団的自衛権」の行使容認を閣議決定 11.08 宮崎駿監督にアカデミー名誉賞 11.10 高倉健さん、悪性リンパ腫のため死去
2015	68-70期	70期生の入部 計7名 9月の記念祭で卓球部が運動部OB展示 記念祭の時の臨時総会で70周年記念事業の実施と実行委員が決定	4月6日を「卓球の日」に制定、卓球を通して世界で一つにつながるプロジェクトを立ち上げる。	03.02 テニスの錦織圭選手、世界ランク4位に 05.02 イギリス王室 ウィリアム王子の妻 キャサリン妃、第二子女児を出産 06.17 選挙権の年齢を「18歳以上」に引き下げる「改正公職選挙法」が成立 08.14 安倍晋三首相、戦後70年談話発表 09.03 「改正マイナンバー法」成立 2018年から銀行口座と結びつけ開始 11.14 フランス パリ中心部の劇場などで同時多発テロ
2016	69-71期	71期生の入部 計14名 9月 東京都立西高等学校卓球部創立70周年記念部史発刊 10月1日 創立70周年記念パーティ開催	「第31回オリンピック リオデジャネイロ大会」で、日本卓球五輪史上初の個人戦メダル獲得(男子単で水谷隼選手銅メダル)、男子団体で銀メダル、女子団体で銅メダルの快挙	



座談会 Part.4



1996(50期)~2015(69期)

現役世代に最も年齢の近い50期60期代のフレッシュな先輩の皆さんに、
在学していた当時の思い出や、西高卓球部での部活動を通して得た学び、
そして後輩へのメッセージを語っていただきました。

部活動の思い出

— 現役時代の合宿や練習で
思い出されることはありますか。

●**禰寝** 7月末や8月のはじめに5日間の合宿をしました。合宿があると、夏休みが始まったなあという感じがしました。

●**寺村** 8月の半ばの国公立戦（東京都国公立高等学校卓球大会）に合わせた時期ですね。

●**山口** 合宿の最終日には一つ上の先輩たちが来てくださって、現役生と団体戦をしました。その後に花火を楽しむのが恒例で、思い出に残っています。

●**山井** 僕は1年生の初めての合宿で、同期とすごく仲良くなった思い出があります。寝食を共にすると絆が深まりますね。

●**寺村** あと、試合の前の土日や平日は、部員同士で誘い合って練習をしていました。

●**山口** そうですね。学校で練習ができないときは、外部の体育館に行っていました。千歳烏山の卓球場にはよく行きました。あと、三鷹にある体育館にもバスで行きましたね。金曜日は学校が使

えないので、団体戦の前なんかはレギュラーメンバーみんなで集まって練習しに行った思い出があります。

●**浜本** 試合の前になると熱心な先輩が練習にきてくれ

て激励してくれるので、頑張らなきゃと思って練習に励みましたね。

●**山井** 僕は今もよく現役生の激励に行きます。66期が引退の時に試合をしたのですが、コテンパンに負かされました(笑)

部長としての役割

— 部長をされていた方は、
当時の思い出で印象的なことはありますか。

●**寺村** 僕は1年生の冬に部長になって、あまりうまく統率できなかった苦い思い出があります。その時に言われた「部長は背中であれ」という言葉を今でも覚えています。

●**山口** まだ先輩がいるのに、1年生で部長になるというのは、すごくプレッシャーがありますよね。

●**安部** 僕はいい言葉を残せるタイプではないので、その分、後輩たちと一緒にプレーをしたり、練習をしたりすることで、後輩たちの思い出に残ればいいなと思っていました。

●**谷本** 僕が部長の時は、僕とキャプテンの2人体制でやっていました。背中であれというのはキャプテンに任せて、僕は細かいことを言うという役割分担をしていました。

●**浜本** 1年生という早い時期に部長を交代するので、はじめは先輩がこわかったです。でも後輩が入ってきてしっかりしようと思いました。僕は卓球があまり強くなかったけれど、みんなの雰囲気盛り上げてチームをうまく支えることが自分の役目だと思っていました。

部活の仲間はかけがえのない存在

— 部活動を通して得たものを教えてください。

●**山井** 大学生になった今でも部活で知り合った同期との友人関係が続いています。現役だとまだ気づかないかもしれませんが、将来きっと大切な存在になるので、ぜひ仲良くやってほしいです。



●**保科** 今、女子部員が増えてきていると聞いています。私は62期ですが、女子同士とても仲が良く、卒業後も時々会っています。今でも交流があるってとてもいいことだと思いますね。

●**南雲** 私は大学でも卓球を続けています。高校で卓球やっていてよかったなと思います。これからも卓球を通して高校時代の仲間と交流していきたいと思っています。卓球大好きです(笑)

●**寺村** 西高卓球部のいいところは、上下関係の良さです。僕の代の目標は、経験者みんなが初心者を支えながら、底上げしていくというものでした。これからも後輩と先輩のいい関係を継承してほしい。僕たちも、たまには西高を訪れて後輩たちといい関係を築いていきたいです。

精一杯頑張ることの大切さ

— 最後に、後輩へのメッセージをお願いします。

●**浜本** もし、今、部活を辞めようと思っている人がいたら、あきらめずに続けてほしい。僕の代には家庭の事情で続けたくても続けられない仲間がいて、部活が続けられるというのは実はすごく幸せなことだと気づかされました。だから、簡単にあきらめないでほしいです。

●**谷本** 最近の西高は進学校化が進んできて、部活よりも勉強が大事という環境になりつつあります。でも、勉強は部活を引退してから真剣に頑張れるので、今は部活を本気で頑張ってください。

●**禰寝** 僕は高校から卓球をはじめたので、周りに追いつこうとたくさん努力をしました。その頑張った経験が今でも力の源みたいなものになっています。

●**山口** 部活は頑張れば、頑張っただけの価値が得られると思います。頑張ろうという気持ちがあるのであれば、迷わず必死にやってみてください。

●**安部** 実はおととい高校時代の通知表が出てきたので見てみたら、前期の成績が体育以外オール2…。部活では、都大会（インターハイ予選）でベスト8までいけましたし、国公立戦で優勝もできたので大満足でしたが、本音では勉強も大事だよ！といたいと思います(笑)

●**新美** それぞれの代で、自分たちの立てた目標に向けてしっかりと頑張ってください。こうして引退して集まって思い出話ができるのも、当時精一杯頑張ったからだと思います。

●**加藤** 高校生のうちにしかできないことを一生懸命やってほしい。運動会や学園祭もそうだし、部活も3年間の限られた時間しかできないことです。気を抜かず一生懸命やってください。あとひとつ、カットマンが増えてほしいですね(笑)



(後列左より) 68期:谷本 隆之、67期:浜本 航治、59期:安部 智秀、62期:加藤 峻、62期:寺村 祐介、62期:新美 貴大
(前列左より) 62期:南雲 みどり、62期:保科 奈津記、63期:禰寝 創太、63期:山口 敦史、64期:山井 直樹、顧問:小豆畑 和之先生



第五章 2016現在

西高卓球部の今





座談会 Part.5



2016(70期)

現在、西高卓球部には男子28名、女子6名の計34名が在籍しています。
69期生と70期生の皆さんに、卓球への想いや勉強との両立について、
未来の後輩たちに向けたメッセージを語っていただきました。

勝利への道を一歩ずつ

——最近、東京都の高校卓球はどのような状況ですか。

●川崎 都内の強豪校と言えば、やはり私立が強いですね。最近では明大中野（明治大学付属中野高校）や日大豊山（日本大学豊山高校）でしょうか。

●笠原 やっぱり、小中学校の頃からクラブチームで鍛えてきた選手は、桁違いにハイレベルです。そういった選手が入学した学校が、突出して強くなるということがありますよね。

●合田 西高で言えば、目下の目標は東京都のシードを獲得すること。ぜひともベスト32に入りたいと思っています。

●山口 くじ運に左右される面もなくはないですが、シードを獲得してポイントを増やすことで勝ち残るチャンスが増えますからね。

●青木 伝統ある西高卓球部ですから、日々精進していきたいと思っています。

学業と部活動の両立

●合田 西高は、卓球と勉強を両立できる学校という印象が強いですね。

●木村 僕は中学時代も卓球部でしたが、西高は学力面で選んで入学しました。練習はかなりハードです。結局、引退するまでは卓球優先で頑張ってきたので、

これからは勉強に力を入れていこうと思っています。

●鬼澤 私は中学時代テニス部で、西高は学力で選びました。勉強を第一に据えつつ、卓球も頑張りたいと思っていました。竹内さんが入部するまで、女子は私一人でしたし…。

●竹内 自分の学力にあう都立高校で卓球が一番強い高校、というのが西高のイメージでした。女子は少なかったのですが、鬼澤先輩がいらしたので入部を決めました。最初は男子とほぼ同メニューの練習についていくのが大変でしたが、卓球と勉強を両立したくて西高に来たので頑張っています。

●大場 やはり、学力で西高を選んでいる人は多いみたいですね。僕も中学時代の延長で卓球部に入りましたが、実際の部活はなかなか大変です。それでも、楽しいこともあるのでこれまで続けられています。

●高橋 僕はむしろ、卓球が盛んだったことが西高を選んだ決め手でした。中学時代も卓球漬けで、その覚悟で入学したら思ったほど強くなって、ちょっとがっかりしましたが(笑)

●川崎 だからもっと強くないといけませんね。卓球だけやりたければ私立に行けばいいわけで、勉強と両立できることが西高のいいところだと思いますから。

●高橋 そうすると、やっぱりまずはシード獲得が第一目標ですね。頑張っていきましょう。

鍛錬の先に未来が広がる

●笠原 中学時代、土曜日は朝から夕方までずっと練習していたので、最初は練習時間が短いと思っていました。

でも、午前中だけの練習でも一日練習と同じくらい疲れる(笑)時間が短い分、集中してできているのかなと思います。

●渡邊 休日練習でも、午前は4時間、午後でも4時間半ですから。平日は授業の後だから2時間程度。冬場はもっと短くなるので、否が応でも短期集中でやらざるを得ないですね。

●青木 練習メニューもいろいろと工夫しています。基本はキャプテンについていくスタンスですが、中学時代の練習をアレンジして取り入れたりすることもありますよね。

●高橋 キャプテンが代替わりするたびに、練習メニューも少しずつ変わってきています。歴代の先輩方が考案されたメニューも、受け継いでいると思いますよ。

●木村 あとは、昔はOBの方が練習にいらしていたという話も聞いたことがあります。今はなかなか難しいかもしれませんが、ぜひおいでいただきたいです。

●鬼澤 私としては、女子の活躍にも期待したいです。71期生で女子が4人も入部してくれたんですね。

●竹内 そうなんです。今までは笠原先輩とダブルス戦に出ただけだったのが、団体戦にも出場できるようになりました。経験者がいたこともあって、初試合で2勝してシードも獲得できたんです。

●川崎 70年の歴史を受け継ぎ、今後も卓球に勉強に頑張っていきたいと思っています。

次世代へのメッセージ

●高橋 西高卓球部には、70年という偉大な歴史があります。先輩方から受け継がれてきた伝統を次世代にもしっかりと渡していくと共に、OBの方々との縦のつながりも大切にしていってほしいですね。

●合田 特にシングルスの場合、卓球＝個人スポーツと思われがち。だけど、部活動としてやるからにはお互いに高め合うことが大切だと思います。自分も周りも一緒に強くなるようとする意識を持ち、仲間と切磋琢磨する姿勢を持ってください。

●木村 卓球の魅力は、頭をフル回転させて行うスポーツであること。メンタルも鍛える必要があり、卓球以外の場面でも良い影響が出てくるように思います。さまざまな面で役立つんだと考えながら、卓球を楽しんでほしいですね。

●川崎 西高の卓球部には長い歴史があります。真剣に卓球に向き合い、部活動の枠にとられないことなく、どんどん上を目指してほしいですね。現状に満足することなく、向上心を持って卓球を深めてほしいと思います。



●青木 部活動では仲間や先輩からの確かなアドバイスがもらえるので、中学時代には気づけなかった発見も多いです。勉強も卓球もしっかりがんばれるのが西高の特徴。貴重な機会を大切に、西高で卓球ができる幸せを感じてほしいと思います。

●笠原 “Do your best.”君ならできる！

●渡邊 僕は西高に入学してから卓球を始めました。当然ながら、初心者と経験者では技術に大きな差がありますが、あきらめたらそこで終わり。常に上を向き、追いついていこうという向上心を持って頑張してほしいですね。

●大場 勉強にしても部活にしても、西高は環境的に恵まれていると思います。さまざまな行事があり、自分たちで取り組むという姿勢が部活動にも生きています。高校生活での学び、考える力、強いメンタルなどを身につけてください。

●鬼澤 部活動に打ちこめるのは実質的に2年ちょっと。これは、人生において非常に貴重な2年間だと思います。やると決めたからには部活も勉強も目的意識を持ち、常に広い視野を持ってさまざまなことに挑戦してほしいと思います。

●竹内 勉強も卓球も切り替えが大事。卓球に全力で打ち込めば集中力が養え、引退してからはしっかりと勉強に打ち込めるはず。練習ひとつを取ってもムダにせず、1球1球を大切に頑張してほしいですね。



1948
↓
1965



昭和36年(1961年) 夏季合宿 西高会館での初めての合宿



1955年(昭和30年)8月号
卓球 Monthly 表紙
写真左側が5期
斉藤友希子さん



1956年(昭和31年)8月号
卓球 Monthly 表紙
写真右側が5期 斉藤友希子さん
1956年 全日本軟式卓球選手権大会
女子シングルス優勝(2連覇)



昭和37年 夏休みの練習風景



平成16年 第12回世界ベテラン大会 年代別
男子シングルス50代 予選リーグ



昭和33年(1958年)12期の皆さんが2年生の時
(後列左より) 蔵多 淑子(旧姓:上野)、高尾 弘、隅田 献、川久保 洋
(前列左より) 佐野 健一、斉木 篤、伊藤 英徳、堀川 靖晃



5期 斉藤友希子さんのメダル
1956年 全日本軟式卓球選手権大会
女子シングルス優勝(2連覇)



2001年 江戸崎CC
12期が8人そろって初めてのゴルフです
(2001年10月)



12期同期会 ご臨席頂いた藤崎先生を卓球部員が
囲んで



つつじヶ丘スポーツ少年団創立30周年
記念大会祝賀会



1972年9月17日 ミネアポリス(米国ミネソタ州)
の地方新聞 ST CROIXオープン大会での男子単優勝の記事
右側はミネソタ州の卓球のニュースマガジン、
ダブルスの決勝戦の写真および他の大会結果が掲載



2013年 新宿御苑 12期同期会 観桜会
車椅子の川久保(2014年没)との最後の集合写真です(2013年4月)

思い出 写真館

Photo studio

1966
1975



大学の時、西高卓球部29期の同期で北海道旅行。ノシャップ岬にて
(左より) 種村 隆行、酒井原 勲、徳重 克年、石倉 志津夫、清水 泉



1974年 西高にて 萩村さんの卓球教室



1974年 西高にて 萩村さんの卓球教室



河野満さんコーチ会の写真(1973年)



1974年 28期生が2年生の時の集合写真



平成27年8月 志賀、山岡、大庭、川田



昭和63年4月 鎌倉にて 川田、志賀、高久、大庭

1976
1995



1989年1月 初めての卓球やろう会



1994年1月15日 5回目の卓球やろう会

『学苑』第173号より抜粋
サウジアラビア卓球団来校を伝える記事



昭和60年4月21日 西卓会 新宿三井ビル54F「メヌエット」

1996
2015



64期の皆さん (左より) 平沼、加賀、林、山井



第三学区戦 優勝トロフィー

2016



思い出
写真館
Photo studio



2011年3月6日 卓球やろう会 (ITS)



2013年 大黒屋にて



2009年 地区別大会優勝 (63期 64期)



2010年1月 卓球やろう会 (ITS)



2011年3月6日 卓球やろう会 (大黒屋)

編集後記

今回実行委員として、西高卓球部のさまざまな歴史に触れることができました。今現在西高の卓球部に入部してくる生徒はもしかするとこの歴史の長さ、OB・OGの方々の熱意に驚くのではないかと思います。私もOBの一人として、今後本当に微力ですが、西高卓球部をサポートできればと思います。次このような機会は100周年でしょうか…？またさまざまな方と交流できることを楽しみにしております。

59期 安部 智秀

今回、西高卓球部創立70周年を記念した、『70周年記念誌作成』及び『70周年記念パーティー開催』の運営に携われたことに感謝申し上げます。田中会長、荻村さんを始めとする偉大な先輩方から現役生まで、今日まで脈々と西高卓球部の歴史が紡がれてきたことを今改めて実感している。そしてこれからは私達若手が中心となって現役とOB・OGを繋ぎ、ひいては100周年に向けて西高卓球部を更に盛り上げていきたい。

62期 寺村 祐介

私にとって西高での生活＝卓球部での日々でした。そのおかげで、今でも思い出しては楽しい気分や悔しい気分になる思い出がいっぱいです。今回の記念部史が、皆様にとってそんな卓球部での日々を思い出し、部員同士の交流が続いていく一助になったらとても嬉しく思います。部史作成においては先輩方、同年代の方々に任せきりでした。読んでみたくなる楽しい部史ができたと思います。ありがとうございました。

63期 山口 敦史

今回の企画に携われて本当に幸せでした。なんとなく始めた卓球が今では部活動の枠を超えて、あらゆる人あらゆる時代と僕とを繋いでくれました。それはさながら荻村氏のピンポン外交のようであり、この記念誌を通じてたくさんの方に何かを残せたら嬉しいです。おお栄光よあれわれらの都立西高校卓球部。

64期 山井 直樹

城川さん(10期)高村さん(11期)中林さん(13期)、玉稿を有難うございました。栄光の都立西高卓球部記念部誌、前は創部30周年記念(1976年発行)、今回は創部70周年記念(2016年発行)、この調子だと次回は創部100周年記念?はたして生きているだろうか。

12期 高尾 弘(75歳)

編集に携わって、ますます荻村さんの威光が輝いていることを実感します。

ずっと理論的思考と強靱な意志の重要性を示し続け、そこから生まれた偉業が綿々と70年間後輩に伝わっていることがわかります。

これからもずっとこれが続くでしょう、そして西高卓球部がずっとずっと力強く継続していくことを確信しました。

16期 村上 克男

70周年記念部史の編集と、記念パーティの準備に追われた半年が過ぎて、これから何をしようかな、といった、いつもの毎日がきてくれそうです。何も特別なことがない毎日、こんな素晴らしい毎日があるなんて、を大切にしていきたいと思っています。多くの卒業生の皆様とメールやお手紙でお会いできました。とても楽しい半年間でした。ありがとうございました。

16期 中村 明彦

30年史、70年史の作成を担当させていただきました。座談会を始め卓球部関係者の多くの方を取材でき、荻村さんを始め、天に召された多くの方々も大変喜んでおられると思います。最後になりましたが企画、編集を担当していただいた 富士ゼロックスシステムサービス 滝沢様を始め多くの方々に感謝申し上げます。

23期 吉田 詠一

70周年記念事業に携わり今まで余り接点の無かった大先輩や後輩と知己を得たことは大きな収穫でした。また、何年も卓球から離れていたのに、卓球に賭けていた学生時代の自分を思い出し、また卓球がやりたくなってきた自分に驚いています。ただ、後半は仕事の関係で大した働きが出来ず、幹事の皆さんにご迷惑をお掛けしたと思います。申し訳ありませんでした。あと数年で暇になると思いますので、その時は恩返しさせていただきます。

25期 近光 護

都立西高等学校校歌

一、
うるはしく研ぎ造らむ
あきらけく掲げ示さむ
明日の世を起すわれらが
ゆるがざる志操のかがみ
ああ まどか
富士をそがひに
わが誠意 著きやさしさ

二、
たゆみなく究め掬ぼむ

かぎりなく求め悉さむ
明日の世を築くわれらが
あふれくる窮理のいづみ
ああ はるか
多摩に水脈継ぎ
わが智慧の深きゆたけさ

三、
たくましく鍛へ競はむ

ほこらしく讃へ謳はむ
明日の世を荷ふわれらが
ほとばしる生命のいぶき
ああ さやか
梅が香ぞして
わが体力 若きあかるさ

都立西高等学校学友歌

一、
長き世紀の中葉の
茨なす歴史の野辺に
われらぞ立つ
地に落ちよひと粒の麦
実れわがいのちの枝に
智慧の葡萄の房ひとつ
新しき未知なる時代の
先がけに
おお栄光よあれ
われらの都立西高校

二、
世界は広しわが世界

閉ざさるる窓を叩くは
われらが務め
輝けよ若き太陽
真と美の希いに眼覚め
われら光の子とならん
よしたとえ死の谷影を
渡るとも
おお栄光よあれ
われらの都立西高校

三、
ああ世は移り人は去り
あまたなる時は亡べと
道こそつきず
いざ行かん彼方に自由
誇らかに探し求めて
注げよそこに若き血を
先人のいまだ褪せざる
清き血に
おお栄光よあれ
われらの都立西高校

作詞 高橋 宗近(十中四期)
作曲 大中 恩(十中一期)

東京都立西高等学校 卓球部70周年部史

2016年10月1日発行

発行者 東京都立西高等学校卓球部OB・OG会
編集・印刷 富士ゼロックスシステムサービス株式会社